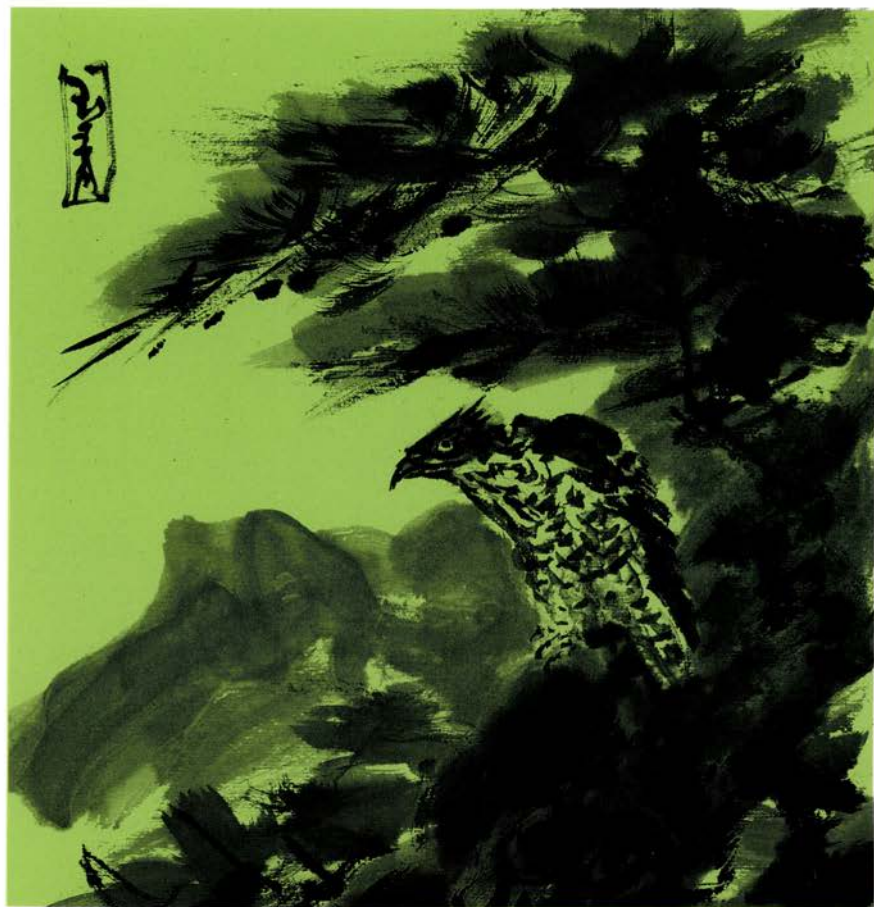


# 川柳塔



No. 810

十一月号

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限ります。  
■締切 11月25日（本社事務所宛）

年賀広告募集

本誌新年号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各川柳会（句会）の紙上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は左記のとおりですので、よろしく願います。

★個人 一口二、〇〇〇円

★団体 次の四種といたします。  
（氏名・住所・電話番号など掲載）

① 1/3頁 六、〇〇〇円 ③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月25日までに本社事務所へ

〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

全日本川柳誌上大会

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」を昨年につづいて開催します。十八回の歴史を持つ全日本川柳大会、九回を数える国民文化祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

課題と選者（各題2句・速記）

|        |       |       |    |
|--------|-------|-------|----|
| 「快調」   | 江口 東白 | 吉岡 龍城 | 共選 |
| 「少年」   | 野口 初枝 | 片倉 沢心 | 共選 |
| 「ときめき」 | 佐伯みどり | 西田柳宏子 | 共選 |
| 「城」    | 石井 有人 | 広瀬 反省 | 共選 |
| 「五」    | 佐藤 良子 | 山田 良行 | 共選 |

参加費 2000円（投句料・「平成柳多留」第2集代）

賞 文部大臣奨励賞（申請中）・全日本川柳協会会長賞

締切 平成6年12月31日（土）

発表 平成7年6月・第19回全日本川柳長野大会

参加方法 所定用紙に各題2句と雑詠1句を書き、参加費と共に左記へ（用紙は請求下されは送ります）。

〒530 大阪市北区天神橋2丁目北1―11 702

社団法人 全日本川柳協会

電話・FAX (06) 352-2210

# 世代交替

## 西尾 栞

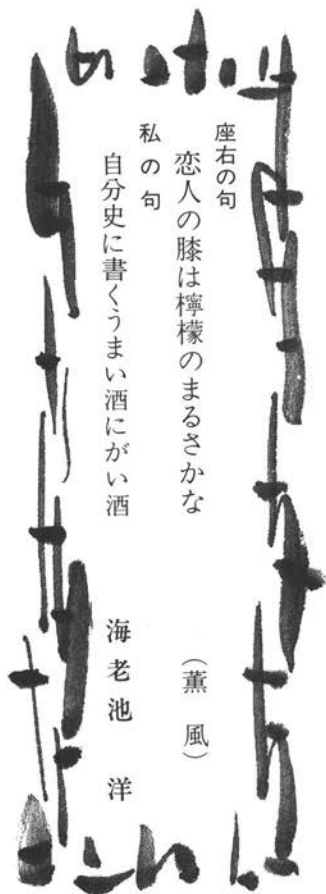
平成六年度同人総会は、快晴の十月二日午前十時から大阪市立阿倍野市民学習センターの三階で開催された。

河内天笑の司会に始まり、西田柳宏子の開会の辞、西尾栞の挨拶について議長席につき、会計報告を春城武庫坊、会計監査報告を高杉鬼遊（松川杜的病欠のため）代読。事業経過報告は玉置重人で進行し、小池しげお、笠原吸江の二氏から軽い質疑があつて無事終了。つづいて役員改選に入り指名委員会制をとり、別室で七名の者が慎重協議の結果、下記のとおり決定した。

|      |       |
|------|-------|
| 主 幹  | 橘高 薫風 |
| 副主幹  | 高杉 鬼遊 |
| 同    | 小出 智子 |
| 理事長  | 西田柳宏子 |
| 副理事長 | 板尾 岳人 |
| 同    | 宮口 笛生 |
| 同    | 河内 天笑 |
| 名誉主幹 | 西尾 栞  |
| 相談役  | 黒川 紫香 |
| 同    | 野村太茂津 |
| 会計監査 | 阿萬 萬的 |

もう一度大きな拍手のうちに世代交替劇は無事終了、そして若い薫風丸が目出度く船出した。

いずれ新役員の諸氏から誌上にて挨拶があらうかと思いますが、若いパワーを十分に発揮するよう、他社柳人の各位並びに塔社同人、誌友の皆様の温かいご指導ご支援を賜りますよう、お願いいたします。役員改選の挨拶を申し上げます。



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

私の句

自分史に書くうまい酒にがい酒

(薫風)

海老池 洋

## 川柳塔 十一月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 世代交替

豆秋さんの一句

川柳塔(同人吟)

新任ごあいさつ

自選集

川柳の群像 田辺幻樹

■古川柳 柳籠裏二篇研究(二十三〜二十四丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟  
水煙抄

銀河系

茴香の花

西尾 栞……(1)

高杉 鬼遊……(2)

西尾 栞選……(4)

橘高薫風・西田柳宏子……(41)

東野 大八……(46)

黒川 紫香選……(48)

土橋 螢……(52)

吉村 一風……(81)

河内 天笑選……(74)

八木 千代選……(78)

## 豆秋さんの一句

高杉 鬼遊



須崎豆秋句集『ふるさと』の奥付に、発行所、大阪市阿倍野区旭町三ノ一四須崎方、川柳雑誌社阿倍野支部とあり、ここが豆秋さんの

住居だった。生れは香川県坂出市とも観音寺市とも言われ、定かでない。大阪へ出て来たのは、大正の終り頃と思われる。が、前記場所だったかどうか。昭和三十六年五月四日、六十九歳で逝去したのがこの地、麻生路郎師宛に遺書を送ったのもこの地からだった。

奥さん宛の遺書に「あなたは、遺族年金その他で貧しいながらも暮らして行けますから高嶋さんへお願いして、この町内(こないいい町内はありません)でおらしていただき健康に注意して達者で長生きして下さい。」とあり、長らくここに住んでいたと思われる。

出勤へヒヨコがすこしついて来る

いわしいわしなすびなすびの日がつき長靴の中で一びき蚊が暮し

けなげにも家主の犬を噛んで来たはしご酒大阪中が寝しづまり

借家住いの長屋から路地を抜けると、通称

|                  |           |       |
|------------------|-----------|-------|
| ■ ひみこさろん         | 小倉アサ・光井玲子 | (80)  |
| 「息」              | 原 さよ子選    | (82)  |
| 一路集「嘆く」          | 仁部四郎選     | (82)  |
| 「いびつ」            | 小寺花峯選     | (83)  |
| 初歩教室「雲」          | 吉岡美房      | (84)  |
| 大空のこころ(47)       | 橘高薫風      | (86)  |
| 各地柳壇(佳句地十選/谷口次男) |           | (88)  |
| 平成六年度 川柳塔社同人総会   |           | (100) |
| 二賞表彰十月本社句会       |           | (102) |
| ■ 句集紹介 『甲吉川柳』と甲吉 | 波多野五楽庵    | (106) |
| 柳界展望             |           | (107) |
| 十一月各地句会案内        |           | (109) |
| ■ 編集後記           |           | (110) |

座右の句

曲り角まだ人生は遙かなり

私の句

風見鶏 娘住む空ばかり見る

(鬼遊)

安永 暁子



旭町筋だ。居酒屋、パチンコ屋、映画館などが並ぶ場末の繁華街で、昔、遊廓への名残りの道か、アベノから山王町トビタへ通じる。焼肉屋から漂うにおいの中を人の往き来は夜おそくまで途切れない。

豆秋さんの最初の雅号は、豆酒と言ひ、音は同じだが、酒の字があるほどにお酒が好きだった。居酒屋の暖簾を上げて幻の豆秋さんがひよいと出て来そうな、こんな町の雰囲気私好きだ。

ふらんすへ行きたし秋の背広着て

柳壇の一茶と言われた彼の作品群にしては泥くささない透明感のあるロマンチックな一句である。

石川啄木の歌に

あたらしき背広など着て 旅をせむ しかし今年も思い過ぎたる(処女歌集『二握の砂』明治四十三年東雲堂書店刊)の一首がある。

また、萩原朔太郎の詩『旅上』に

ふらんすへ行きたしと思へども／ふらんすはあまりに遠し／せめては新しき背広をきて／きままなる旅にいでてみん。／汽車が山道をゆくとき／みづいろの窓によりかかて／われひとりうれしきことをおもはむ／五月の朝のしのめ／うら若草のもえいづる心まかせに。(大正二年東雲堂書店発行北原白秋編集文芸雑誌『朱鷺』ザンボア掲載)

私は前句を剽窃だと思いたくない。

# 川柳塔

## 西尾 栞 選

大阪市 稲本 凡子

五キロも痩せた八月のカレンダー  
寝る時間きたのに頭冴えてくる

損得の言葉は喉でくいとめる

冷酒にじわじわストレス浮いている

美しく老いる秘訣の箇条書

思ひ出の道が舗装されている

竹原市 小島 蘭幸

鼓笛隊のリズムで秋がやってくる

節水の看板がある曼珠沙華

若竹の水 類焼を食い止める

蟬の男らしさとやさしさと

てのひらに汗をかくことなどはない

仙人になっても悟れないだろう

豊中市 田中正坊

花芯には仏が在わします燦華

もう腹は立てぬと決めた秋扇

競う気はないが完走するつもり

そよ風のように生きたいなと思う

余命表書き換えているパスポート（香港・マカオの旅）

百弗を儲け一〇〇ドル播るカジノ

大阪市 西出 楓 楽

実年が拗ねてみたとして絵にならぬ

てのひらを開けば歩駒ばかりある

孫がくる激んだ空気かき混ぜに

縄電車降りぬ大人がふえてくる

終幕で幸せ芝居うまくなる

秋の風のせられやすい人に吹く

松原市 小池 しげお

賓頭盧サン私も痛いところだけ

どんな諺よりも母から聞いたこと

百日紅咲いて三十三回忌

言い訳になってなかった河内弁

気の利いたジョークのつもりだったのに

嬉しい日雑巾絞る音も派手

倉敷市

小野 克枝

西宮市

奥田 みつ子

生かされている幸せの雑居部屋

忍耐を教えて父の樹が枯れる

饒舌が愛を拾ってから無口

許せない嘘をあと押しして平和

善を積むことの嬉しさむつかしさ

豊中市

安藤 寿美子

藤井寺市

吉岡 美房

日めくりをかためてめぐり二七日

一合の御飯 仏とわけおうて

腹の立つ事を次々おもい出し

夕刊をとれば表戸はとぎす

支払いをすませてどつと出る疲れ

富山市

舟渡 杏花

奈良県

田中 紀美代

風呂敷を持って来たとは言いそびれ

だんだんと信憑おびる嘘ひとつ

ときに便利な友の名借りる二度三度

心变りの封書に記念切手など

枕ふたつ品よく並んでいる怖さ

熊本市

永田 俊子

松江市

柳楽 鶴丸

号令にみんな走った敗戦忌

無視された男が鈴をつけにゆく

ストローが屈折してる身近な計

過去すこし覗かす社長の紙こより

淋しくて夕日放さぬ野の仏

服買った帽子買ったと他愛なし

一人だけおしやれをしてもつまらない

言いたい事いっぱい溜めた目を伏せる

暇がないのは哀しくて有難し

フアイトフアイト毎朝暗示かけている

藤井寺市

吉岡 美房

ほろほろと秋がこぼれる萩の寺

読書する秋の美人と乗りすごす

うどん屋が隣に出来たうどん好き

拾われて急に謝礼が惜しくなり

一票で一矢報いる時を待つ

奈良県

田中 紀美代

なんにもない時に大事な人が来る

晴れの日も末席という母の場所

押しピンで止めたくらいの恋でした

悠久の種子が芽吹いた湖の底

武勇伝少し脚色して話し

松江市

柳楽 鶴丸

美人が居たから中国語を覚え

私が愚妻ならあなたなんなのさ

可哀想だけどゴキブリ退治する

行水と言う我が家の露天風呂

妻は卓球 僕はピンポン

松江市 舟木 与根一

夏が逝く掬うた金魚みんな死ぬ

夏バテが一番ひどい夏帽子

貧乏は遺伝するのか孫の数

主食にも豊作貧乏出はじめる

居眠りの癖があるので席が無い

東大阪市 森下 愛 論

わがままが一人家族の輪を外れ

見栄を張る仮面の酒が面白い

さらさらと嘘の言い訳喋り過ぎ

間延びした声で留守番顔を出し

休肝日グラスを伏せて思案する

笠岡市 松本 忠三

ばあちゃんの手善し悪しを聞き分ける

敬老の日を満でいく不仕合わせ

じいちゃんがコーヒー通でアメリカン

飛び板を洗濯板で間に合わせ

お小言を言うまい箸のあげさげに

堺市 楊井 二南

年よりも若い仕草は目に余る

爪弾きされても野暮に気付かない

矢も盾もたまらず舌をもつれさす

腹積り有るから母に味方する

マジックの点滅八百長臭くなる

今治市 矢野 佳雲

波潜る魚の涙は洗われる

好きな娘と添うてその地に根をおろし

鳴っている電話へ髪を撫でて出る

浮草が根のない噂もってくる

ブランドものの着てるカカシのコンクール

廿日市市 林野 甦光

街角のピラは私を通り越し

聴覚が冴えて気まずさだけ残り

おしほりを出して根回し怠らぬ

去年から離婚の話未解決

その背なに取り付く鳥を求めても

米子市 林 荒介

街路樹の短い影と連れになる

他人だと思ったことのない切手

どうしても結果が欲しい柿の種子

友達の手も分析しておこう

正面の山には何時も気を遣う

岡山市 川端 柳子

秋の気配 涙にもろい人育て

金婚や風は静かにやり過ごす

夏帽子すべってころんでまだ達者

愛がさめたらバックミラーを見詰めよう

歯ブラシが乾くもう主還らない

島根県

堀江正朗

花を心に八十三の誕生日

愚痴言えば それだけですか妻笑う

子供にも大人にもある嫌がらせ

想像の秋空楽し戦盲も

苦しみを知らないように妻笑う

島根県

堀江芳子

祈らぬと生きて行けない弱虫で

秋らしくなつたなつたと風邪を引く

虎の子の財布孫には向きを変え

やりきれぬ思い走ってみたくなり

吸物の味にも亡母は生きている

砂川市

大橋政良

夕やけがしずくしている余命表

深くなる眉間の皺に火の匂

葱刻み鍋を洗って丸く古い

嘘の舌 右へ左へ躲される

古い義理 足掬われて目がさめる

名古屋

越村枯梢

年金暮し荷が重いやら軽いやら

行く先はあなた任せの影法師

子ら散り散り日毎疎遠になつてゆく

穴の開いた笑い袋を捨てにゆく

最低値の葬式予約しておこう

奈良市 天正千梢

骨抜きにされて塩水につけられる

かりの世の自慢話もむなしかり

類似点ひとつあるので拍手する

きこし召しくれしかロウソクゆらぎおり

節高き皺を染めつつ紫蘇を揉み

京都市 都倉求芽

道草をした人だけが知る情け

自分では逆さになれぬ砂時計

消えかかる炎バイブル放さない

子の旗がだんだん高くなつてくる

恨んでた去年の舌で雨頼み

宇部市 平田実男

飽食の舌タイ米を悲しませ

口八丁時々火傷しています

遺産分けこじれて薄くなる酸素

言い勝ってバックミラーに残る悔い

3 Kの職場履歴書などいらぬ

松原市 玉置重人

女へんやさしい男多すぎる

難敵の中のひとりは妻である

丁度よいキッショ ビールが冷えている

旗色をはつきりさせてから落ちめ

十年もたつて時効にしてくれぬ

高槻市 川 島 諷云児

横浜市 菱 田 満 秋

七人の敵に身内が一人いる  
散る花と咲く花あって四季巡る  
気楽さと佗しさ五分という余生  
左遷地の孤独が煮えるおでん鍋  
ふる里を捨てても残る国訛り

奈良市 宮 口 笛 生

鳥取県 土 橋 螢

丹精の菊がたつぷり水もらう  
水不足とうとう秋が来てしまい  
おいしくもさんまさんまの日は困る  
豊作の米へ手拍子打つ雀  
大勢の中だ悪いのも居てる

尼崎市 春 城 武庫坊

柳井市 弘 津 柳 慶

黄昏にまだ夢を追う気概持つ  
諸行無常 兵の墓地には曼珠沙華  
助走路のかかりで拾う夢もある  
楷書より書かぬ男で忘れられ  
妻の眼にまた差し障る冬が来る

尼崎市 春 城 年 代

伊丹市 檜 谷 寿 馬

同窓会大先輩になりました  
洛西に萩見つけた日退院す  
つかず離れず夫との距離程がよい  
どの顔も金婚の皺晴れている  
忘れられているのも猛暑なればこそ

セクハラにされて男がいじめられ

癌治る薬出来たら何で死ぬ

計を知らせながら互いを戒める

星屑の中の一つとして光り

悪臭の犯人捜す眼に出逢い

腰が痛くなるほど今日も背伸びする

のらりくらりの人生もあとわずか

男と女の終らない話する

冷房の部屋から四季が逃げてゆく

悪人正機 仏の前の胡坐かな

妻のぐちをまじめに聞いてやるゆとり

ボールペンちくり皮肉が書いてあり

だまされてあっさり泥舟に乗せられる

今更に五十年前の事で頭さげ

青春時代を思い出させる大正琴

団欒の膳へ土産の山の水

大正琴 船頭小唄が生き返る

みそ汁の椀で琵琶湖の水が泣く

意味も無く平均寿命クリアールする

喝水の水は血よりも濃いくなる

八尾市 宮西弥生

鳥取県 新家完司

土の香がほしくて鈍行で走る旅  
生き方を変えてみました医者通い  
水よ水 女すこしずつ枯れてゆく  
神様と会えた都会の一隅で  
敬老の日にこれからを教えられ

堺市 高橋 千万子

手ほどの苦勞を知った代がいこ  
力とは腕あり金も地位も要る  
ごますってすって余生の座を保ち  
決心が顔を合せてから崩れ  
不快指数やつと救いの萩すすき

松山市 白石 春嶺

こうのとりに生まれる逃げはよしなさい  
かけがえない友だった穴が開く  
前略と何時も手抜きをする不精  
後ろにも目があるママの客さばき  
真相に迫れば返り血を浴びる

大阪市 津守 柳伸

一本の葦にもしかと燃えるもの  
目覚めれば南国鶴戸の縁結び  
景觀に胸一杯の溶岩道  
知覧茶にかかるかん添えたおもてなし  
秋桜 不定愁訴を取り除く

四季の歌 夏は突然終るもの  
浴衣着てころをだらしなくさせる  
ともだちになりたい腕のいい漁師  
息絶えた蛍を川に返してやる  
老残という宿題が残っている

寝屋川市 稲葉 冬葉

強がりを言うて涙を拭いている  
いく晩も隣の軒聞いてます  
オペはせぬ約束の気儘な患者  
グロッキーになって神様仏様  
顔を出すヘルニアがいちびっている

寝屋川市 江口 度

人見知りする鈴虫でまだ鳴かず  
万札もはいはい消える挙式前  
無重力の暮し新婚しています  
有名税夫婦げんかも見逃がさず  
実りの秋よ地球も少し重くなる

下関市 石川 侃流洞

柿たわわ過疎にストンと陽が落ちる  
二番煎じの駄洒落お酒の味が落ち  
円相場年金暮らしに用がない  
嬉しさの余り忘れた休肝日  
大穴へ無欲で張れとそそのかす

大阪市 本間 満津子

なに言うつもりだったのだろうしやべりすぎ

形見に上げる約束が有るペンダント

小さな財布 母の形見の鈴の音

迷わないのは厳しさか怠慢か

出来る 出来ないではなし やるかやらないか

倉敷市 田辺 灸六

うたかたの夢さいなむか癌末期

友逝きていまだに熱帯夜が続く

眉ビクリやつれをかくす喪の女

妻の寿司 隣はいつも褒めてくれ

ひと雨が欲しい畑の花いじり

大阪市 河井 庸佑

つまらない意地が孤独へ追い詰める

相手立て負けるが勝ちと腹くくる

経験とキャリア言わないのが怖い

損得を言わぬ真心報われる

バイオリズム今日は出過ぎぬようにする

羽曳野市 榎本 吐来

末席の笑顔肯定とは見えず

老眼鏡またまた何か探してる

お隣の旅行肴に飲んでいる

悪友の目配せ終業ベルが鳴る

見知らない笑顔が会おう万歩計

弘前市 蒔苗 果林

点滴の光る命を奉る

お恵みの雷様は家族連れ

よかったね稲を見回る合い言葉

露草の花に涼しい道を聞く

わかってます答えて秋の風になり

弘前市 村田 善保

人情に流され石も丸くなる

磨りガラス彼方模索の海がある

茶碗酒哀しい過去は棄ててみよ

輪廻転生 落ち葉にも似た安堵感

絶望の思案を膝に問うてみる

弘前市 肥後 和香子

白足袋を三回履いて夏終える

幸福がウインクしながら擦れ違ふ

少年の微熱がひけてからの距離

ダブルからシングルの余韻遠い海

ひらがなの意地悪許し合える仲

弘前市 佐治 千加子

ブータン国真昼のどかに大歩む

王若く四人の王妃うるわしき

仏教国みほとけ達の舞踏祭

パロ銀座ゆっくり回る時の中

ヒマラヤが見える野外風呂の石を焼く

弘前市 小寺花峯

弘前市 一戸ツネ

妻と娘の会話が少し風に舞う  
偏差値の椅子が軋んで閉じる本  
反射率一〇〇パーセント娘の涙  
寝転んだ大地で風になった耳  
見上げればいまだ途中の坂である

弘前市 岡本花匠

昔日の人影うすく稲刈機  
梯子からジョークもはずみりんご挽ぐ  
大菊の妖精が舞い自己顕示  
花舞台妖精に酔う菊見酒  
七五三孫に夜なべの愛着せる

弘前市 高瀬霜石

礼節を尊び男おとこたる  
床の間に「生涯現役」と吊るす  
家系図は無いが代々蟻である  
少年の心に消えぬチョーク文字  
世を拗ねた髭がタコ焼きやいている

弘前市 中山雅城

性分を逆手に取ったパチンコ屋  
新米に食い付いているにぎり飯  
煎餅の耳から聞いた味自慢  
母ちゃんは何時も港の防波堤  
宿々を碁会所で打つ旅の晩

産声に始まる迷路墓場まで  
てのひらにわたしの割符隠れてる  
明日の米研げば感謝の道拓く  
色即是空 瘦せた影にも今日の道  
静脈もとぎれとぎれの喜寿の坂

黒石市 相馬一花

きのこ採りクマもラジオを聞いている  
酒癖の悪さ本人だけ知らぬ  
お祭りが終わり寡黙になる津軽  
即席の愛は途中で火が消える  
それとなくおんな外濠埋めさせる

五所川原市 斉藤 島

一粒の雨一粒の芽となりぬ  
深深と天に従う稲の出来  
そして静かに花束が浮く海よ  
生前は馬を愛したお人柄  
舟下り松尾芭蕉の顔をして

十和田市 阿部 進

飽食に育った子等の成人病  
先輩に続けとばかり猛げいこ  
ダムかれて沈んだ校舎顔を出し  
脱サラへやっとなじんできた野良着  
人情のあふれる北の旅楽し

米子市 石垣花子

母という演技続けた背が丸い

いつからか情けをもらうバスの席

女は魔物 年は見せない舞扇

暗示には弱い女のくすり指

じつくりとかかれば連れ解きほぐせ

米子市 林 瑞枝

ハガキ書くいひ癖つけてまた逢いに

満月やおんなの秋も充実す

おんな二人の下着が乾く赤蜻蛉

薄野の女神が笑う月が出た

天性か耳に心地のいいお世辞

米子市 田中亜弥

我が身の陰を陽にさらすのも今だ

一日のはじめに老眼鏡ふく

隣のばあちゃんおから煮るのが得意だと

ブームに乗ってアルカリ性の水くみに

ひんぱんに出逢って老いを遠ざける

米子市 政岡 日枝子

動かない風に明日は明後日は

今は守り風と静かに眠ってる

人古くなつて鱗を削ぎ落とす

尻尾使えば上手く歩けることだろう

何もないけど後ろに森を控えてる

米子市 野坂なみ

この屋根は父だ父だといいきかす

我慢した分だけ薫る菊の鉢

出逢いまで野道を歩きつづけてる

一すじの煙となつて洗われる

鬼と手をつなぐ芝居も二幕目(政局)

米子市 寺沢みどり

坂道で他人の杖にすくわれた

灯台の陰で夕陽とすれちがう

暗示からさめて彼岸が見えてきた

ほどほどの我慢はクスリかも知れぬ

墓洗う亡母の背中に触れたくて

米子市 菅井とも子

秋連れて来たらし雨も弾んでいる

裕着て亡母の温みをなつかしむ

瘤の無い方から写真撮つてくれ

停車場でボツンと亡父を見送った

あと先の順にも慣れて輪の中に

米子市 青戸田鶴

萩竜胆 風少しずつ秋はこぶ

昼の月見るともなしに見ています

赤い舌だれをかくした彼岸花

温かい顔になるまで墨をする

いさかえば夫も時々他人めく

米子市 澤田千春

つまりいた石をかかえてスタートにあぐらの中で父が歌った赤トンボ茶柱の暗示に縄をないなおす呑みこむ事が上手になって丸くなる洗いざらしの紺に母の声がする

米子市 金山夕子

かあさんが笑うと広い海になる  
ブライドが高い周りは退屈だ  
ロングスカートに隠している胡坐  
中流の我慢の中に上中下  
他人は詐欺師わたしも詐欺師大あくび

米子市 新正子

どんぐりの歩幅がとてよく揃う  
一番星探すと亡父が語り出す  
鳴き砂が聞いた噂をしゃべり出す  
潮時によろしくと言うコツがある  
納得をしない紅葉がまだ青い

米子市 川上より子

残暑一転 命日に野菊咲く  
午睡してふらり神話の国に入る  
怠慢の証が風呂敷からもれる  
秋の深まりを読む父の気管支  
中絶の権利に神々の葛藤

米子市 中井ゆき

しばらくは旗をたたんで歩くだけ  
秋風に押されて彼岸花と逢う  
遠い日が劇中劇になってゆく  
チェーホフの劇でカモメになる私  
新しい畳に愚痴はきかせまい

米子市 木村富美子

我慢して今は天下を取ってます  
我慢する時は羊羹厚く切る  
クラス会あの日の顔にすぐ戻る  
妻よりも隣の顔がやさしそう  
ポスターの笑顔に暗示かけられる

米子市 光井玲子

古い耳洗いかタカナ語を聞こう  
やせ我慢やめよう月が満ちてくる  
他人事と思えぬ種を蒔いておく  
灯明の揺らぎの中にある暗示  
散る日までここに真珠光らせる

米子市 茂理高代

知恵袋までも病は食い潰す  
迷い出すと足踏みばかりして困る  
ダイエットしたのに太る秋が来る  
もしここで我慢をすれば事は済み  
歩道橋きくと会えると立って見る

鳥取県 松下 たつみ

損得で動けば越せぬ壁があり

説曲げてまでもしたかう気になれず

乗りかかった舟に人間性を見る

写経一卷終えて仏と近くなり

敵が無いと一人決めていた奢り

鳥取県 林 露 杖

飛行雲一筋だけの青い空

真田の月の真下の影と佇つ

足跡が残らぬ道がまだ続く

妻からの忘れた頃の変化球

おせっかい嫌だが無視はなおも堪え

鳥取県 土 橋 はるお

通帳を積んで枕に丁度よい

鉄瓶がはなし相手を待っている

箸使う指に震えが見える父

コーヒーに押され茶釜が錆びてゆく

まずまずの幸せ釜の飯を炊く

鳥取県 江 原 とみお

歩けあるけ歩けば仏さまに会う

責任負う程の給料もろてない

我慢するしか方策はないようだ

神さまへ届く太鼓をうっている

使い残しのいのちに酒を注いでやる

鳥取県 乾 隆 風

お天気を見てから猫は散歩する

婆さんの素顔と写真見比べる

姑とリズムが合って海が風ぐ

極楽の出店のようない仏壇や

いつもより近い床を敷く女房

鳥取県 石 谷 美恵子

三世帯同居わたしが我慢する

ふれあいの場合へ臆病な赤い靴

ブレイキばかり踏んでよい芽が育たない

円高はどうあれ三度箸をもつ

洗うほど藍はおんなの肌に合い

鳥取市 西 原 艶 子

ふるさとは梨一色の長月に

輪をかけて言っておこうか言うまいか

好意持つ暗示であらう目線合う

美しくやせたい飯を軽く盛る

和裁にはうとくワープロ打っている

鳥取市 小 谷 美ツ千

体温を分け合う秋の生臭き

恋多き男かも知れぬ夏が近く

彩の無い砦訪ねて恋になる

急な秋逢いたい人は遠国に

樅の木に出逢うと思ひ出す男

鳥取県 西浦小鹿

鳥取県 羽津川公乃

純粹な足音が海まで届く  
木犀の香りが届く汽笛から  
洞窟の石打つ音がまだ続く  
鬼よりも恐い話が森にある  
月影に仏を遊ぶキリギリス

鳥取市 春木圭一郎

沈むのは承知あなたと船に乗る  
逆風も味方と船が帆を上げる  
さわやかな笑顔息子の婚約者  
あの人にくれたものなら宝物  
あの時のがまんで今も生きている

鳥取市 武田帆雀

料亭の水車世間が騒がしい  
仏像師の耳は鉛筆挟むもの  
俺は俺 人は人です如露の穴  
三分で五段の詰め碁突き付ける  
難しく考え過ぎて貝になる

鳥取市 美田旋風

見ない振りしてくれ借りがまたできる  
心にもないこと言われ興醒める  
続編は儒教がやたら顔を出す  
またノーと言えずしょんぼりして帰る  
泳ぎ方覚えた息子目が光る

難聴を口にしてから輪に溶ける

習性か耳考えて席を取る

微笑みで聞こえぬ耳をカバーする

器量の差だけは長生き出来そうだ

泥臭い色でわたしを織り上げる

鳥取県 鈴木公弘

人並みに秋刀魚を焦がす幸がある

彼岸花 死なせたくない人ばかり

ダムの底から台風を待っている

ほろ酔いの月を誘って寄港する

竹の春 若い者にはまだ負けぬ

鳥取県 さえきやえ

道ばたの花のいのちが気にかかる (水飢饉)

路地裏に子らさせい合う声がない

どしゃぶりでやつとあしたの絵がかかる

てにをはをつけたら遺書になりました

五円の机 亡父と亡母との声がする

鳥取県 上田俊路

野次馬がこんなに湧いてくる平和

近道を覚えてからの怠け癖

まっとうに生きて近道ふり向かぬ

大ジョッキからが女の物語

ハエ男ばかりが目立つ永田町

鳥取市 西村 黙光

ぎっくり腰 神のお告げと妻笑う

女房と角突き合はす熱帯夜

貧乏へ光り輝く知恵袋

夏ばてへいたわるように池の蓮

生ぬるい風が重たくのしかかる

鳥取県 黒田 くに子

ピノキオの鼻につらぬくものがある

満月の丸さに勝てるはずがない

無風地帯で忘れる事が多くなり

老母が居て雑巾濡れている安堵

口下手なうそを包んでやるなさけ

鳥取県 石尾 かつ乃

反骨の祖父は孫には甘かった

朝露にかがやく稲穂見る日課

夏休み孫八人に散る花火

同居してよかった孫という宝

賞められた孫の瞳にファイト見る

鳥根県 西村 早苗

いか焼きの匂 葉屋着く港

もののおもい芒の原に来てしまひ

秋に似合うか味噌汁よく売れる

締めくくる茶がひきたてる奥座敷

水不足低い朝顔咲いていた

鳥根県 小砂 白汀

ある時は有無を言わさぬところが好き

久しぶり息子と飲んだ酒の味

熱帯夜わたしが燃える星が燃え

呱呱の声歓喜の声とも悲鳴とも

あくまでも明治 市場籠など持たぬ

鳥根県 松本文子

朝昼夕咲く花のあり一人もよし

一枚の写真といつも対峙して

瘦我慢の化粧鏡も知っている

敬語忘れたのはジパンをはいてから

美しい暗示をくれた 流れ星

鳥根県 榊原 秀子

花婿が来るととびきりいい話

ジョークかと思つてばかりいた本音

お名前と顔が一致せず困り

草焼きの匂う煙に亡母の影

秋の気配やつぱり淋しくなってくる

鳥根県 佐々木 鳳笙

行儀よく聞いてくださる枕経

代われるものなら代わつてあげるこれも嘘

女から冷たい戦聞かされる

安過ぎるから匂を嗅いでみる

こんな坂登りなさんなハイヒール

島根県 藤原鈴江  
思い切り話してみたい人に会い  
自尊心守り通した我が家です

かけ足で落ちる夕日の愛しさよ  
一日に命炎やして芙蓉咲く  
叱られて我が八十歳を自覚する

出雲市 尼れいじ

離婚など出来ぬ男の細い腕  
私の影が遊びに出たまま帰らない  
素朴だなこれが芸術かも知れぬ  
追想の日々ライバルもまた恋し  
噂話好きで耳鼻咽喉科へ通う

出雲市 吉岡きみえ

月のぼるはげしく炎えるもの秘めて  
すっとんと落つ赤い夕陽を見えます  
恵みの雨 配給のように降って止み  
友達は銭勘定ばかりする  
向こうずねの傷の深さを思い知る

出雲市 園山多賀子

呉越同舟 昨日の敵と手を握る  
趣味の友 老若男女壁がない  
散る花も未だ舞ういのち抱いている  
花茗荷他人に過去をほじくられ  
無器用でふたつも顔が持てません

出雲市 島祥庵

ヒロインになつて未完の書を閉じる  
拘束の窓へさびしい流れ星  
百鬼夜行 素足で越える水たまり  
仏心の証おとめの心澄み  
菊一輪 仏と語る花鉢

出雲市 伊藤寿美

萩ゆれて我が家の庭に万太郎  
磁器婚のこわれやすさを抱く夫婦  
古里の抜け道トムソーヤに還る  
箱の中まだだんまりが続いてる  
ブルートレインも飛行機も来る夏休み

出雲市 岸桂子

花活けて渴きをいやす午後部屋  
許さねば虹も一色ずつ消える  
わがままを捨てねば渡る橋がない  
家事の垢ときには落すイヤリング  
計の中に九月の風は通り抜け

出雲市 久谷まこと

限界へいどむ男の肌もえる  
茶柱も今日の幸せ保証せぬ  
運命かサイコロどおり上がらない  
顔つくり自分の個性まで隠す  
飽食の果てを鏡に写されぬ

出雲市 板垣草丘

風呂にゐる捻挫の妻のドッコイショ

月十日 小遣い稼ぎ西東

俄雨あの時何処にいましたか

いい返事お人好しだと言われても

浅漬けの上下夜中に混せておく

出雲市 竹治ちかし

気にしてゐることを気にして他人が問う

足して二で割れば程良い人になり

御機嫌が悪いと猫も気を遣い

人間のエゴが出口で待つ話

誇張した嘘もまじつて良い話

出雲市 小玉満江

タイ米のボンボン菓子は良く売れる

ポケベルで連絡を取る計のしらせ

命日は仏の好きな豆御飯

園児らと交流結ぶ竹とんぼ

ポッチャリの茄子が途中で曲り出す

出雲市 小白金房子

老母がゐる頃はよかった実家の灯

豊作を綴る日記の字があふれ

病名もなくて生き抜く老いの詩

朝露を素足に感じ種をまく

敬いの心で築く家庭の灯

今治市 越智一水

さけられぬ道は黙って歩いとく

針仕事 一兵卒が役に立ち

コスモスのそのゆれが好き風が好き

夏休み秘密がひとつ出来た恋

ごちそうと涼しい旧家はめてくれ

羽曳野市 吉川寿美

帳尻の合わないままで夏が逝く

思慕恋慕二度と逢えない竹の花

いい姑と言われ本音は申すまじ

糸トンボ亡母の使いか墓の道

寝そびれて一夜を共に周五郎

町田市 竹内紫鏑

金婚の曲 当人もむかし弾き

祖父のいた町こう変わる万歩計

少年の耳に味方のひどいやジ

街路樹は理科 校庭の木は歴史

再会の日なり画廊で影を待つ

仙台市 川村映輝

クーラーをかけて風邪引く馬鹿も居る

上手ではないが楽しい友のうた

何所へ入門しても先生年が下

新築の家に老人様になる

子供無い家庭を羨む不倖せ

美禰市 安平次 弘道

イエスマン自分の時間見失い  
政治家のみそぎ毒消し売り切れる  
出土品ごくごく古代史が変わる  
小銭入れに入る程度の夢は持ち  
愛はまだ序章で見せぬ舞台裏

吹田市 山本 希久子

季は巡る愛あるままにないままに  
潔く脱ぎ捨てられず夏ごろも  
誤解される位置でお金が無くなった  
胃袋をときどきびっくりさせてやる  
反省の足りぬ鏡を拭いている

寝屋川市 柴田 英壬子

すすきの穂 酸いも甘いも噛み分けて  
綺麗ごと並べて星が降りてくる  
ひと言に鬱の方程式が解け  
糸口へ秋の電話が長くなり  
御堂筋燃える銀杏よ青春譜

今治市 野村 京子

恋しくて父の位牌を磨いてる  
画廊覗く夢のつづきを確かめに  
梅干しの酸っぱさなにか欠けて行く  
ラムネ玉昔はなしがまだ続く  
父の井戸涸れて引導渡される

富士宮市 渥美 弧秀

晩の妻の軒をそつと抜け  
諍いで割られた皿に罪はない  
冷静のよそおい見抜く血圧計  
温かく富士が見守る老夫婦  
富士は神 夜明けの富士へ合掌す

姫路市 大原 葉香

肩の力抜いたら目からうろこ落ち  
くたびれた万札 贋でない証拠  
世間の目あるから離婚など出来ぬ  
健康法あれこれやって病んでいる  
○×のアンケートならすぐ書ける

姫路市 丁坪 サワ子

一日だけエンゼル微笑む敬老日  
招かない齡がわたしを老いさせる  
真心を切り売りしてる老いの店  
断水に小便小僧も羞恥心  
じいちゃんが待っても塾は休めません

京都市 松川 芳子

不発弾抱いても女よく眠る  
ゴキブリと妻の勝負が面白い  
人間の生命つくづく水不足  
二人三脚紐のゆるみはほどほどに  
補聴器がだんだん笑い消してゆく

京都市 山海友 熙

茄子漬の色よし味よし厨の翳  
ヌカ床をふたつに分ち嫁の香に  
暑いなあグチで甘えた夏恋し  
ハープ好き客をもてなす部屋がある  
どくだみのはびこる性を摘みきれず

和歌山市 堀端三男

遠回りしても別れる駅に着く  
野暮なこと言いっこなしと酌ぎにゆく  
止り木に並んで本音聞かされる  
あれから五十年思えば今は極楽だ  
集金人の愛想 鈴虫褒めて去ぬ

和歌山市 牛尾緑良

年の差は同じ夫婦をつづけてる  
臨時停車の駅で自分と向かい合う  
語り部となるため今に忠実に  
月が出て男の心試される  
掲示板で待たされているメッセージ

和歌山市 垂井千寿子

告白をしてから深くなる絆  
油照り一日熱い茶で通す  
野暮な服着ても心に星を抱く  
反抗期いいえの本音書く日記  
矢面に立つ父の樹に守られる

和歌山市 福本英子

まだ少しだけ役に立つおみおつけ  
打ち水に咲く夕顔と昏れてゆく  
心ない一言八起きめへ刺さる  
一の矢がそれて慕情がなおつる  
真直ぐな矢筈で的を逃さない

和歌山市 木本朱夏

夏草や泣かぬ泣かぬと眉あげて  
見かけ倒しはある女にも渋柿も  
仏壇を正視出来ない朝があり  
犬にさえ帰る家ありいわし雲  
不機嫌に猫は尻尾で返事する

和歌山市 桜井千秀

よいことずくめどんでん返ししないように  
真実をこめて嘘から出す誠  
壁画から都市空間の風の音  
演じ続けるそれがどんなに辛くとも  
好かれるより嫌われぬよう低姿勢

海南省 三宅保州

椅子がある限り競争する男  
矢印のとおり行くのも疲れます  
社長より上司が怖い平社員  
ストレスが溜まると髪を切る女  
行くと行けない理由考える

和歌山市 細川稚代

嬉しくて安定剤を飲んで寝る  
こぼれ萩手のひらで受け人を恋う  
山上の駅で貰ったうまい水  
心まで許していない瞳の色だ  
炎えるものあるから明日が生きられる

和歌山市 玉井豊太

秋ですネ菊人形が威張ってる  
赤とんぼ渴いたビルで鼻を打つ  
大根が干されて冬へ身構える  
根が浅い話に人は耳たでる  
今日からは妻の機嫌を取るとする

和歌山市 福井桂香

金瓶梅浮いてながれて迷う雲  
出生地問えばめだかに啜られる  
言い勝って喉のかわきは癒されず  
パソコンに弱い手のまめ足の胼胝  
群れ薄 亡母を隠していませんか

和歌山市 宮口克子

やれる奴 遊び心も取り入れて  
目的は果した旅のわんこそば  
微温湯へリストラ喝を入れた来た  
幸せの尺度はみんな違います  
一触即発 呑んだ勢いなんてこと

和歌山市 田中輝子

開口一番 痩せた痩せたという無礼  
谷の深さよ霧の深さよ恋進む  
末っ子に残す一つのわらべ唄  
硝子細工の脆さを愛す人愛す  
風波くぐっておとぎ話が上手くなる

和歌山市 青枝鉄治

左遷地に古りて仲人頼まれる  
いま無職男ざかりを持て余す  
形勢不利 酒の話に切り替える  
妻よりも車の方が自由利く  
ああ無念おはこの唄を先取られ

和歌山市 山田高夫

毒針を含む忌憚のない意見  
善人になれず悪人にもなれず  
二軍落ち男は奥歯すり減らす  
終の駅まだまだ先にある旅路  
自叙伝のどのページにも誤字脱字

和歌山県 小倉アサ

魅力かも知れず短所を野放しに  
売り歩く神に合掌疎くなる  
記念日でなくても誘うレストラン  
見回すと火元はいつもさり気ない  
縁の下とかく覗いてくれぬ風

有田市 松井 かなめ

糖尿にノーカーリーのコーヒー中毒に

特大のてるてる坊主ききめない

水不足植物も枯れ人も枯れ

過疎の村また若夫婦町に出る

一夜漬け会の挨拶みな忘れ

和歌山県 西口 忠雄

残高は無口で利子はよく喋り

風邪ひいて賢いようにめしを食い

永眠に氷枕はもう溶けぬ

壁に釘打って蛇が出る鬼が出る

逃げるため四本の足がついてある

和歌山市 堀畑 靖子

賭けたぶん負けた悔しさ跳ね返る

白い肌キープするのも楽じやない

泣くという女は返し技を持つ

自己対話できる日陰が好きなた

生きて愛して女は奇跡生み落とす

大和高田市 岸本 豊平次

給水制限台風予報の進路追っ

作句帖今日もすすまぬ暑さ呆け

同窓会大阪商人になったのも

ふる里の梁に重みの通し土間

忘れてた頃に満中陰志来る

西宮市 門谷 たず子

皿ふたつ重ねて喜劇くり返す

ポンポン船の小父さんにきく島の秋

女郎花客を迎える顔を向け

外反拇趾をこらえてせわし妻の靴

津軽じょんがら熱い炎を抱く三味よ

姫路市 人見 翠記

家中の窓開け放つてもカーテン動かない

エアコンの音無き時は虫の声

山火事が雨乞いの役に立たないか

夕立は山の向こう雷は太鼓だけ

便利です妻は秘書兼家政婦で

箕面市 坪田 紅葉

在りし日の思い出つきぬ墓まいり

初盆に大好物の西瓜ぜめ

ウェディング父の席はあけてある

バージンロード父のかわりを叔父がする

一世に秀でた人の如才なさ

高石市 浅野 房子

決断を延ばし延ばして秋になる

その昔見切り発車をした罰か

外食が続き布巾が乾き切る

時々はいけずもされる女神さま

石橋にためらい傷が二つ三つ

寝屋川市 岸 野 あやめ

親友に逝かれて人生観かわる(友逝く 3句)

精一杯生きて浄土へ還るひと

友死せり生まれ変われば野の花か

七十の主婦にも家を守る意地

付添いに付添いが要る長寿国

宝塚市 丸 山 よし津

探し物忘れた頃にひよいと出る

明日のこと分らないから生きられる

派手を着て老いに負けない背を伸ばす

だんじりに命をかける祭り好き

風向きの変らぬうちに帆をたたむ

八尾市 宮 崎 シマ子

洗濯機男物から洗う母

夕顔の白さよ遠き日の乙女

だんじりの綱のしんがり孫が居る

わが視線知らずに妻の盆踊り

到来物松茸スダチ秋の贅

八尾市 山 下 美津留

一本の糸垂らしてくれた恩人よ

衣紋竹 妻の姿で掛けてある

別姓の夫婦へ家紋宙に浮き

父がまた立読み族のなかに居る

にこにことやさしい妻も爪は持つ

八尾市 吉 村 一 風

双六に習うて回り道をする

小姑の塩ひかえめで無事にすみ

綺麗ごと言うから話またこじれ

口どめはされたが自信なんか無い

行動は自分で決める定年後

八尾市 高 杉 千 歩

幸せも不幸も左手に托し

足だけが動くだるまで猛暑生き

病院の花うなだれたまま開き

痛くても死なんよ死んでたまるかい

八十と並び高齢食の膳

八尾市 片 上 英 一

風林火山おこたらぬよう危機管理

転禍為福 変毒為薬かもしれず

同床異夢 隣は妻の高いびき

同病相憐 待合室の顔なじみ

肝胆相照 君と俺とのおとこ酒

大阪府 榎 山 隆

掌のしわも感情線も深くなる

風紋にのこるざんげの罪ひとつ

恩讐を超えて絆は太くなる

ジョーク吐く友を見舞ってほっとする

落陽に大海原はたぎりそう

折鶴の夢の一つに空の青

竹原市 時 広 一 路

昨日まで補欠の僕に來た出番

握手するだけなら誰とでもしよう

口下手の方を信用しておこう

押付けの自慢話が褪せている

呉 市 楨 田 英 詩

罪あまた終生悔いの鉦を打つ

働いたこの手よ手抜きなかったか

耳鳴りが止むと三途の川に着き

万歩計妻も買ったとついてくる

そう言えば元憲兵の顔してる

竹原市 岡 本 清 水

齡はとし無事と言う字が消えてゆく

死ぬるまで我執の業は捨て切れず

正しいと自己判断が裏目に出

独居慣れ口にはせぬが底淋し

弱音吐く気持ちはないが道譲る

竹原市 岩 本 笑 子

火事見舞思わぬ人の電話口

二三日確かに夫の煙草減り

もの足らぬ甘さはきつとハウス物

求職の電話他人事でなし

折り返し点過ぎた過ぎぬと白髪染め

やっと秋けいとうの紅 倅の彩

アングルを変えよと賢治に悟される

百日紅 笑顔の好きなピエロかな

有りったけ葉を食べつくし揚羽蝶

干天に耐えたコスモス花をつけ

岸和田市 福 浦 勝 晴

元氣だネあんだも元氣と老い二人

空腹を無視して柱時計鳴る

てのひらをひらくと吉凶判然と

りゅうちような会話で誰かを貶してる

すこうし寂しいのでわざと高笑い

岸和田市 芳 地 狸 村

夢のある出発ロビーの旅鞆(関西空港で)

どの客も明るい顔の一番機

離着陸うまくとらえたカメラアイ

撮る撮られカメラ仲もつコンコース

吹き抜けの光明るいターミナル

岸和田市 島 崎 富 志 子

ちぎり絵に心盗られて小半日

猛暑にも耐えたコスモス五等身

来ぬ人を伝言板が待っている

勝敗にカッカと燃えて老いていず

目の前に空港出来たが予定なし

岸和田市 古野 ひで

ひと握りの愛をいただく赤い羽根

納豆をほいほい食べるようになり

冷血をよそおう母の深い愛

こんなにも倅せ少しこわくなり

ねこじやらしガラスのコップでかしこまり

岸和田市 原 さよ子

あれ大事これも大事としまい込み

呆けたかな名前すぐ出ぬもどかしさ

ぬくもりが伝わる遍路のご挨拶

一円の値打ちがわかる手内職

訃報聞き耳になつかし国訛り

岸和田市 高須賀 金太

ボール気味の球きみは投げられるか

ツースリー日本の位置が危ないぞ

にんげんをしている限り明と暗

意地を張るわたしに返し矢が刺さる

プライドの狭間で揺れる私です

岸和田市 岩 佐 ダン吉

母を捨て回り灯籠ばかり見る

一日の余白は妻の愚痴を聞く

連絡橋渡ると海が泣いている

九月三日 社党と申す党が消え

一幕のコントで書いている余生

岸和田市 田 中 文 時

諦めてヘルスメーターうす埃

言葉とは重宝なもの出来心

酒ありて倒れず回るわが余生

只管に時よ経てよと二日酔い

千天の慈雨受けつけぬアスファルト

岡山市 井 上 柳五郎

うちの子がうまいと心では思い

欲深い顔 香具師の目に見抜かれる

生きようよ頑張ろうよを交わす老い

発信人なしで暑中見舞来る

風鈴の音やれやれと聞く残暑

岡山県 萩 野 鮫虎狼

仏の灯消えるお経はまだ続く

左遷地の酒が案外性に合い

暑い暑いと生ビールの独り言

順番を待つ病床の無言劇

古希過ぎて空想だけは飛翔する

岡山県 小 林 妻 子

急行白兔 新幹線が来たような(上智線十二月間通 2句)

皆々様お忘れでない武蔵駅

どれほどの贅だと言うかコシヒカリ

五十年忌 戦友は二十の顔でいる

百姓を捨てた子供に送る米

秋灯下 古い女の古い詩

岡山県 矢内 寿恵子

子の婚になつて祈りの中にいる  
ひらがなの女でいつも気を持たせ  
どう叫んでみても女の守備範囲  
ゆき昏れた胸でホタルが点滅す

岡山県 山本 玉恵

美しい情けを知ったこぼれ萩  
一匹の蝶の呪文をききただす  
縄電車のびてちちんで日が暮れる  
尾の取れぬままで蛙のよそ見好き  
貧しさに耐えた十指を陽にかざす

岡山県 江口 有一朗

腹立ちの心の角に蹴つまずく  
お陰様丸い心のご挨拶  
六方礼拝我執を捨てること学ぶ  
誕生日母に感謝の日と決める  
勝っているチームに暑さこたえない

富田林市 和田 維久子

巡業と思う人生昨日今日  
枯山水はだしの足裏こそばゆい  
百歳のタレント電波にのる元氣  
永遠の友名水の味に似て  
変らない味を支える句座の星

紋切り型の言葉に秋風が落ちる

富田林市 池 森子

素足から季節ごよみの風に会う  
強く吐くおんな一人の向い風  
こだわりをひとつ溶かしてゆく耳よ  
老母の膝で待つ亡妹の毛糸玉

富田林市 片岡 智恵子

微罪重ねてあなたに染まる色を織る  
胃の底でまとまらぬ辞書繰るばかり  
短気もののきつと善人だと思つ  
ストーリー萎んでばかり水飢饉  
解決の相違男と女なり

唐津市 田口 虹汀

雁に恋をしたのか鶏頭華  
泰然と案山子耳でも遠いのか  
私欲では済まぬ水かけ不動尊  
伴せそうに老いた騏驎が生きている  
毒舌が聞けぬ寂しいベッド傍

唐津市 仁部 四郎

血統が自慢のポチに吠えられる  
父の血を承け鈴付けに手を挙げる  
スーパ―に一家総出の文化の日  
スーパ―で雑誌が売れる文化の日  
ブラウスの胸を見ている旅の街

唐津市 久保正剣  
予想屋もおみくじ売りも軽い詐欺

政権を取つたら捨てる労働歌  
風化した刻み煙草と羅宇屋さん

掏摸ほどの才覚もなく顔洗う  
竹槍とバケツの上を双胴機

唐津市 山口高明

嫁さんを貰い付き合い悪くなり

二次会を奢り仲間と認められ

トウフ屋の灯が点いた午前二時

願いごと叶えば御神酒安いもの

先生になって戻った我が母校

唐津市 筒井朴竜

日除庭瓢箪糸瓜蔓伸寿

風流な御仁吟行旅気儘

見借乃庚申三猿土鈴焼

猪堀滝流し素麺涼吸溜

曳山囃子天真爛漫祭好

唐津市 浜本ちよ

伸びる芽を切られすねてる鉢の松

何所か抜けたお人好しだが人不信

幾久しく誓った絆軽く切り

流れ行く小川に断水の都市思い

天気予報ピタリと当る晴ればかり

高知県 赤川菊野  
ハチキンとも女竜馬とも言われ

その先は言うまい傷が深くなる

追憶の中に蘇州の風が吹く

夫婦にはなれない人と大文字

野暮だとは言えずあなたは純情ね

高知県 北川竹萌

正午からクーラー回し夏を越え

赤紙よ海軍服を着せるのか

七五日真夏日解けた朝涼し

老めがね畳む順序が身について

日に半歩進める夢をまだ捨てず

高知県 小澤幸泉

父の日の似顔絵とおい娘の育ち

結局は何事もなく暮れてゆく

もうろうと街をながめて秋の午後

ナルドの壺に罪の涙をあふれさせ

血糖値わたしをどこへ連れていく

香川県 木村あきら

自画像を少し明るい彩で塗る

水澄んで彩鮮やかな水中花

上向いて歩くと石に蹴躓く

矢が尽きたことは秘密にして置こう

自販機の釣銭ししぶ出してくる

香川県 工藤 吟笑

嫁取りか家をアチコチ直してる

鈴虫が大きな秋を連れてくる

味方だと思って読んだのが誤算

当確になると味方がドツと増え

渡り鳥 鍋釜持たず生きてゆく

香川県 成重 放任

噴き出した汗にうき出る肉体美

焼いたとて煮たとて固い魚の目

こぼす愚痴母の背中は聞いてくれ

憎い人その気にさせてそつと逃げ

装いのベールの下をのぞかせる

香川県 川崎 ひかり

かと言つて今更妬いてみたとても

働いて働いてこれでも運動不足とか

仮説たてあなたの本心聞いてみる

うれしいな二キロ体重減りました

善し悪しは言うまい切れぬ血の絆

香川県 山地 マツエ

流れ星恋の呪文が間にあわぬ

よい事は姑さん似ですと如才ない

余命表少しは夢も盛りつけよう

孫とするジャンケン本気でして負ける

いい人に逢えそう小さな旅に出る

香川県 新川 マサエ

夏祭り白鳥音頭でしぼる汗

帯付けの稽古も出来た盆踊り

プロの技 阿波の踊りで沸き上がる

夢一杯未来を吊す星祭り

漂える小舟の梶を取り直す

豊中市 吉田 あずき

鏡拭くことを虞れて影薄し

あやしてる方がよっぽど被写体に

渴水を盾に雑巾乾きがち

王朝風鏡へ写る貧相な顔

遠花火果てず思い出なお果てず

豊中市 江口 明光

渡り鳥また来てくれた三回忌

ロボットへ働き蜂が一人言

バラソルの下カゲロウが炎えている

冷静によそおい内心あわててる

人間も干上がりそうなダムの底

大阪市 藤田 頂留子

ロウソクの明りに詫びることばかり

もの言わぬ物にひかれてゆく詩人

よほどお気に召したか残暑の重い腰

さやさやと稲田を渡る赤とんぼ

やっかみの噂が結びの神になり

笑い袋 孫が繕う敬老日

大阪市 北 勝美

紋り切る玉露の一滴和ませる

過疎の村みどりの繭の稀少価値

遠くへ行きたいテレビで老いの挫折感

年金のくらしに隠すものがない

大阪市 上田 柳影

前向きに歩いて今日も草臥れる

秋の風アバンチュールな旅もよし

四季のない花屋で秋を妻に買う

久し振りパレットに出す秋の彩

妻の手の皺の深さに幸を見た

大阪市 板東 倫子

弱者にも何故神様は鞭を打つ

もう死んではるやろなあという話題

贖罪のように病妻看取る夫

かきまぜてこねて丸めた社会党

持って死ぬつもりなのかときつい揶揄

大阪市 榊本 落児

食べ歩き茶粥の味を御存知か

浅草で田舎の匂いってくる

裸婦の像 今年の暑さ一入だ

引越してポストの場所を確かめる

向日葵のシュプレヒコール雨はなし

寺の池 食用蛙 経の声

大阪市 小林 トメ子

高級地 野良猫までブライド持ち

白檀の扇子おおげさにあおいで

婦人科の老人患者皆無口

白菊に埋れる友は自由を得

大阪市 寺井 東雲

忙しい人にストレス逃げて行く

次の世におやじの背中伝えよう

野仏にトンボの勇姿見せている

後一人だんだん鬼の顔になる

本家より少し小さい鬼瓦

堺市 黒田 真砂

孫が来て 婿 娘来て盆送る

楽あれば苦あり講座の出席表

この胸の空しさは何 七回忌

占いの厄日は何事もなく過ぎた

一姫二太郎思うように産んでくれ

堺市 柿花 紀美女

薬袋ふえて枯野の中を行く

私にも言いたい事あり声の欄

札東へ靡かれそうな崖っ淵

物忘れア行から指繰って見る

友が逝く運命論者になつてくる

堺市 一瀬福一

下積みに耐えた極がかるすぎる  
虫干に昭和文化の風を入れ  
あり余る物に埋まつてる孤独  
尼さんの赤い口にも世の流れ  
いきさつはあったが今日の角かくし

堺市 中野樺子

好い彩のスカーフ見付けて小さい秋  
水不足 悪循環のこわい秋  
一病息災 薬に御礼申し上げ  
落しぶたコトコトリズムに亡母想う  
本当の旬 忘れてしまった茄子 苺

奈良県 長谷川 春蘭

ののしりや噛んで吐き出すように言い  
茄子の紺ぬりのはげたる夫婦箸  
柚子青し雨呼びながら何か言う  
文字摺草なよなよ咲いて老夫婦  
ふきよせの菓子思わせて枯葉掃く

静岡県 蘭田 獏 杏

ゲレンデと妙に似合った千枚田(信州の旅 2 句)  
中乗りさん民謡残しダムの壁  
望みなく恐れもなく祖母は病む  
青蛙嘘はつけまいその顔で  
遠ざかる尾灯に残像タブらせる

西条市 片上 明水

宙返りしてみたいほど空が澄み  
透析のベッドで税の本を読む  
注射針いとも静かに血を盗む  
病院の時計の針を恐く視る  
葬式へ無職の靴に刷毛を当て

広島県 藤解 静風

雑魚でいるうちは古傷目立たない  
浴びるほど捨てた水から意趣返し  
老妻のつつこみだんだんきつくなる  
雑巾ならとうに擦り切れてるわたし  
無か空か解らぬまんま逝くでしょう

羽曳野市 田中 透太

本当のことを言わない石つぶて  
筆ばかり選び決心まだつかず  
胸の帯少しゆるめて逢いに行く  
シナリオになかった駅で途中下車  
淋しさの分かる女と秋を酌む

寝屋川市 平松 かすみ

ロケットの炎は元気だったのに  
貴女とは違う遺伝子だと妹  
つまらない女になったハリぐすり  
神様の怒り人間乾涸びる  
夕やけこやけあの頃はみなモンペ

運鈍根 人夫々にある人生

奈良市 米田恭昌

正論を吐いた煙草がふるえてる  
気がねして庭に水まく日が続く

姿造りの目玉に泣いた娘も二十歳

検尿の静々歩く紙コップ

西宮市 西口いわゑ

公園のベンチに暇なソクラテス

往復をねぎらうように月が出る

抜き衣紋すこし女を主張する

風になるのか雲になるのか薄の穂

純情ですこし話を通じない

生駒市 北山悟郎

恋語る孫が大人になりました

健常者の不器用を笑う障害者

善人が悪に墜ちこむ銭の音

有頂天その後に来た請求書

自分史に軍歴抜けば何もない

神戸市 山口美穂

独りごとと言うて酷暑に耐えている

蛇口から出て来る水よありがと

三日目の赤ちゃんすっかり自己主張

落日へ今日の感謝を忘れまい

宝くじ買わねば当らぬと知りながら

思い上がりの鼻の先から夕暮れる

尼崎市 田中薫

夕陽いくたび生きものの声重なり

ふつふつとひと恋う風をてのひらに

どの窓も夕焼け雲が好きである

人間がどんどん沈む日本列島

西宮市 秋元てる

思い出と違う故郷が気に入らぬ

背のびしてきりきり舞いはもう止そう

現役の際は寸暇にあこがれた

ばあさんの目分量未だ確かなり

さめざめと泣ける居場所を持っている

静岡市 安本晃授

月冴えて夫婦茶碗の夢芝居

秋桜秋を飾って秋に病む

訃報聞く電話か夜の低周波

菊日和化粧と違う女の美

袈裟すてて鎧で見栄をきる首相

藤井寺市 中島志洋

偽もんが出て一流の仲間入り

妻の役姑に押しつけ共稼ぎ

肩書の多い名刺に口説かれる

若作りほのかに匂うサロンパス

駅に来てガスの元栓気にかかり

広島県 田村新造

鳥葬になるか病む戦友山に捨て(興安嶺逃亡記)

興安嶺逃げてカラスの餌になるか  
戦友見捨て生涯消えぬ悔いとなり  
たそがれて今日もごそごそ動く影  
落日へ今日も生きてる無事を謝し

東大阪府 崎山美子

墓だけの故郷訪ねるブラン組む  
訪ねくるものなしひとり花つくる  
干してきた布団 雲行き気にかかる  
立て前と本音がからむ心です  
先ず心開けば幸せに出合う

大和郡山市 坊農柳弘

单身赴任秋の夜長をもて余し  
小選挙区八方美人の有権者  
神無月出雲の神の気ままなる  
胎教に名曲聞かせパパ演歌  
騙された振りして妻に任せきり

倉吉市 野中御前

無縁仏ととても仲いい彼岸花  
一粒も粗末にしないけど老化の目  
ふたありでおもしろい研究しています  
酔ってますだから結果は本音です  
帳尻を合わせておとなの恋終る

七尾市 松高秀峰

いつの世も忍と和です嫁姑  
明暗をそれぞれ背負い敬老の日  
ナースの笑顔に今日も励まされ  
ナースをほめると声まで若返り  
お蔭様透析はじめ満二年

吹田市 栗谷春子

古い蚊がひとこと何か言にくる  
あぶな気なけものの情けきたきつね  
ふたこぶが一つにとけたらくだ雲  
土痛く蜥蜴のかおも久しぶり  
ご無事かな長谷ゆく道のお地藏さん

伊丹市 山崎君子

真夏日に花のロマンは消えてゆき  
彼岸花 亡夫を思う風が吹く  
茄子の紺みょうがの香り亡母の味  
慰めあうために二つの肩がある  
田高に新婚旅行早くなり

倉敷市 井上富子

美女達がニットに染まる秋茜  
お手頃のアイデアを盛りリサイクル  
家計簿の隅に旅行の種を播く  
ゴミ袋 心の埃もそっと入れ  
心の緩みへ家計簿の足が出る

藤井寺市 福元 みのる

父の小言と母の苦情で娘も疲れ  
吠えようで嘆願と知るお留守番  
病む人のうつ憤聴くも医のひとつ  
読書の秋に目を背けたくなる雑誌  
百歳現役長寿法など語らない

東大阪市 指宿 千枝子

ふるさとへ五十円分便り書く  
誰に似て葉書一枚子は書かず  
残された道で愚痴などこぼすまい  
両耳にイヤホンはめて子は出かけ  
うなずいた友の笑顔を信じてる

宝塚市 吉田 笑女

呆けだした姉も八十路の登り坂  
くり返しまたくり返す古日記  
生きているかぎり血糖つきまとう  
逢う度に大人びて来た孫娘  
一人住む部屋にも秋は忍び寄り

守口市 森川 まさお

秋はまだ砂場の砂と滑り台  
空想がしきり積乱雲の下  
人形が神社の柱に捨ててある  
灰皿が綺麗先には吸いにくい  
等分にどちらにもはめる壺二つ

富山市 酒井 輝

手話のあと結ぶ手と手を疑わぬ  
宅配の芋に帰れという句  
告白を聞くには要らぬ砂時計  
結ぶ手の中にほんとの敵も居た  
飲める水捜しあぐねた糸とんぼ

和泉市 西岡 洛醉

休日を畳一帖寝る無策  
野の花の可憐がひとつ罪を消し  
現実には佗しさがあり昼の月  
秋の音妻の素肌を着せ替える  
母の指 密かに念じる事がある

茨木市 堀 良江

時々は一人言いう影法師  
苦勞した人の論しにある温み  
よそ事のような顔して赤い爪  
小さな背がなぜかパパより頼もしい  
姪嫁ぐ深いブルーの瞳の人に

寝屋川市 堀江 光子

袖通す前から汗のこの暑さ  
込み入ったこと涼さへ追い送り  
返事だけ聞こえ奥から猫がくる  
玉石混淆 玉より派手な石の色  
九死に一生それ以来愚痴言わず

枚方市 海老池 洋

人間万事 追うて虹消えて虹  
汗だくの掛け声 蟻の蝶をひく  
思ひ出を滾らす若き日の寮歌  
男ならときに火を噴け桜島  
趣味の欄パチンコごろ寝とも書けず

広島市 森田 文

医学にも限界がありある悟り  
お大事にルルドの泉遠過ぎる  
荒波の稲佐の浜で神を待つ  
順番がくるまではもる三部唱  
湯豆腐の話もまじる朝の冷え

北九州市 梅田 宣司

妻と行く余生二匹の亀となる  
本性は魔女かと思う妻の勤  
やかましく叱った頃が俺の華  
勝算があつたためらう振りを  
禁煙をためらう訳は他にある

宝塚市 中田 純次

心経の空の一字がふと見えた  
人並みに務め果して妻と居る  
父の日は何故か氣勢が今一つ  
死の空気迷宮入りかサリンガス  
空も青海も青ああ涸れるダム

川西市 氏林 洋敏

水のないダムへ納得して帰り  
年金はもらいたくないもらいたい  
借金をしたことないと自慢され  
印相に凝ってるうちは芽が出ない  
猫の子を貰って小さな義理果す

松山市 宮尾 みのり

大ごとになる手はじめのほつれ糸  
三割引すれば正体見えてくる  
有名になって金借る手紙など  
父母逝って他人行儀の客となる  
バーゲンへ鮮度の落ちた顔が寄り

箕面市 椎江 清芳

遺産分け遠い絆の手が伸びる  
信じてた身内が見せた知らん顔  
汗知らぬ金は財布に長居せず  
また来てねなどとは言わない退院日  
一合の酒に目刺しもまた愉快

河内長野市 植村 喜代

つり橋を一緒に渡る人でなし  
人生とはゆっくり押されてところ天  
ボトルの名だけを信じてお水買う  
悩みごとこんなにあっても生きている  
やり直しきかない歳で何思う

河内長野市 井上喜醉

鬼の爪隠した怖い知恵袋

伴せを待つ楽しさがある夫婦

長男のベース親父は影法師

夕顔を眺め食後の竹を踏む

外米を差別はしない炊飯器

芦屋市 黒田能子

いいご趣味よそゆきの服誉められる

素通りの駅に名所旧跡あり

吊り橋を渡る姿勢は崩せない

ボール一枚真実の見え隠れ

屋上に庭園のある都市砂漠

東京都 山口新子

対岸の君よ私は泳がない

都会忙殺夕やけ空をとんと見ず

あした逢うつましく跳ねている乳房

逃避行百三十円で着けるとこ

下りホームの最後部にて人恋し

箕面市 岩津ようじ

駄馬よりも牛が早いというドラマ

うぬばれもカタカナになるナルシズム

昼下がり楽爪切っている余生

若いなああんた還暦前でしよう

取り寄せた骨壺ながら派手すぎる

和歌山市 岩本美智子

まっさきに童話の棚へ足がむく

ナタデココ元の姿をまだ知らず

集団見合い島の男に嫁がくる

炎天にやかれ花芽のでぬ芙蓉

岡山県 二宗吟平

荷が出来た自信が覗く西日本

六〇〇の中の五〇に挑む意地

何も彼も明日へ明日へと暑い日々

白蟻がもう居るそんな模様替え

岡山県 池田半仙

観光バス胸に仲間と言うリボン

旱天に負けず芙蓉は咲いてみせ

窓開ける私と締める妻でもめ

窓際族 四角い天を見る日課

出雲市 石倉芙佐子

再会を約して訣れ秋桜

朱に染まるコスモスもある白い路

秋桜 夕陽の中を見送られ

もう一度逢えば悔いない秋桜

岡山市 花田たけ志

半生の悔いが余生の部屋にある

ほくろから身元が知れる運不運

諺が花を咲かせるタイミング  
反省を支援強化でする外交

和泉市 岡 井 やすお

スポーツも所詮政治の枠の内  
御用心憲法骨粗鬆症化

3Kの職 外人は嫌がらず  
米隠しに愛想尽かして米離れ

大阪府 八十田 洞 庵

山門に阿吽の仁王寺格知る

リストには乗るが大物いつも逃げ  
息子たち継いではいられぬ職に老い

阿羅漢のおそばに居ると亡母が告げ

鳥取県 津 村 八重子

初めて咲いた花に口づけしたくなる

一つ聞き二つ忘れる年になり

子にそそぐ愛は真赤な色だろう

善人の行動まねて生きてます

大阪府 井 上 白 峰

定退後 妻が舵取る夫婦船

うぬぼれが自分の影を見失う

正論を握り潰した多数決

提案が直ぐに纏まる飲む話

豊中市 三 宅 つえ子

あても無い電話を待って雨の午後

彼岸花忘れず咲いて息苦し

赤とんぼ唄う学校通り抜け

刺激が欲しくて残り火を拾う

倉吉市 野 口 節 子

曲想は違うが回る夫婦ごま

お守りを五つ並べてまだ迷う

神前で誓った鎖よく切れる

よく笑う嫁が幸せ積んで来た

鳥取県 田 村 きみ子

ばあちゃんが好きだと言われ有頂天

好きという暗示に弱い鬼薊

跨線橋 娘ちつとも振り向かぬ

夏帽子あの日あの時ありがとう

鳥取県 土 橋 睦 子

無雑作に本音を出して蹴躓く

和裁の手休めて母が梨を剥く

悲しい時も童顔は変わらない

ふる里に残るページが風化する

鳥取県 太 田 幸 枝

祭太鼓ひびいて胎児動き出す

私の心の隅に鬼が居る

賞味期間過ぎた女が爪磨く

危ないと言われた橋が渡りたい

鳥根県 石 飛 水 煙

海青く小石も波と戯れる

海が呼ぶ山の子供も出ておいで

友情で散歩楽しむ車椅子

水不足湖底が深刻物語る

和歌山市 山口 三千子

その話聞いても入る隙が無い

水神が日本列島背を向ける

濡れ衣を着せた相手は気にしてず

鬼の留守命洗濯しておこう

守口市 結城 君子

ひとりごとどうやら私のことらしい

木っ葉みじんにこわれるグラス羨まし

七回忌そうっと姪の皺をみる

重大な質問一番あとで聞く

東大阪市 安永 暁子

平凡な嫁 姑に習うおばんざい

平凡では企業選手は勤まらず

憤慨にのど元に蛇が動きだす

心がけはヤングの気持早い足

川西市 松本 ただし

俗名のある間にしたいことばかり

賞罰のない足跡も淋しいね

体重を黙って支える土踏まず

大安という気休めに溺れるか

大阪市 川端 一步

嵯峨日記読んで落柿舎来てしもた

盗聴も凡人と違うつけどころ

文化予算 未来が枯れるパーセント

花キンは私たちには忍従日

和歌山市 池永 正雄

アクセルを踏めば登れる山もある

輪の中に道化師もあり無口あり

町の子ら路地から路地のコミュニティ

灯が点るだけで団欒とは言えぬ

吹田市 茂見 よ志子

百合の花 病室の香へ拒否される

意気込みの差だろうか負のグラフ

踏み切りは丁度こころでフィナーレ

辞書なしで書けば疑い増す漢字

茨木市 藤井 正雄

先生の病室ハガキ束でくる

熱帯夜シーツは海の青にする

線香花火もうすぐ嫁に行く姉と

使い捨てカメラで覗く春の風

竹原市 古谷 節夫

秋風が吹くと訃報が飛んで来る

追伸の一行楔打ち込まれ

病室に禁酒禁煙見あたらず

休肝日理由をつけて今日も変え

鳥取県 西川 和子

留守番のストレスお菓子またつまむ

Uターン母の暗示が効きました

ふっきたらしい明るい電話口

目をつむれば話の筋がよく見える

倉吉市 最上和枝

温かい涙は手話の指先に

別姓の夫婦同じ釜の飯

空港で頭をよぎる地獄絵図

おばさんが噂話を売り歩く

鳥取市 前田一枝

ワープロも誤字脱字には苦笑する

街角でやっと思示がわかり出す

こうなれば他人舟でも乗って見る

休日も三日つづけばはき出され

交野市 福崎しげお

特売場妻の手足が若返る

正論とほめつつ大臣つるし上げ

反論をやめて抜け目の無い処世

七転び八起き本音で生きている

大阪市 松尾柳右子

頑張りに感心ばかり怠け癖

日だまりをのぞいてモグラ火傷する

日だまりの御馳走蟻は忙しく

妻なれば子育て家計簿 主の世話

大阪市 清水利武

知恵のある女に惚れて騙される

今年また猛暑で戦友五人減る

折角のデート急病邪魔をする

PKO政府の腰が定まらず

岸和田市 三輪通彦

反戦を誓う原爆五十回忌

利害ある話はエゴがつきまとう

空缶といっしょにモラル投げ捨てる

どこからともなく口止めが洩れてくる

岸和田市 寺田甚一

熱帯夜解消月が澄んでいる

戻れない橋を毎日渡っている

結構に暮してますがからが愚痴

日曜日くつろぐ癖がまだ残り

吹田市 瀬戸まさよ

空しさよ一割という戦前派

白髪に真紅の紅を引いてみる

丸い背を叱ってくれるわが娘

勝ちとった椅子に座れば宙に浮く

出雲市 園山かおる

それほどに効かぬ薬を飲んで老い

言い訳がまだありそうな妻の顔

喜ばす話にそつと嘘を入れ

故里を満たして匂う焼きなすび

鳥取県 谷口次男

暇人が人の噂も研究し

お嬢さん政略結婚蹴りなはれ

地球蹴り大きな仕事したつもり

スナックで人の研究しています

和歌山市

田中みね

池田市

岡本吉太郎

初孫を寄つてたかつておもちやにし  
なのに未だ燃す氣になれぬ文の束  
告げ口をしたのされたの軽い口  
毒薬へ興味が湧いてきのうきよう

倉吉市

米田幸子

出雲市

富田蘭水

夏の耳くすぐるような世辞を言う  
孫の顔見たら頑固な父も折れ  
鮮やかに口の刃で切り捨てる  
損得を考えてから手は握る

豊中市

井上直次

出雲市

板垣夢酔

朝夕の海にもあつたラッシュ時  
古はがき候文のラブレター  
毒舌のゲストのうける政治談  
天下り楽々座る深い椅子

岡山県

岩道博友

豊中市

滝北博史

君はなぜ鬼にされても税を取る  
節水をせぬ古井戸がある余裕  
オートキャンプ陽焼けの顔で新学期  
もう少し無職と書くよまだ逝かぬ

鳥取県

乾喜与志

札幌市

瀬尾六郎太

そうかそうかと力説を聞いてやる  
愛憎は星の向こうに飛んじやつた  
肩書がなくて気楽な立ちん坊  
無駄口を利けなくなつた老いの舌

戦後史のベールはがれてむなしさを

終戦のつけ孫の代まで残すまい

あいつよりましとうぬばれ生きている

パチンコ屋 影のない人ばかりいる

聖戦が侵略となるさわぐ胸

一善を積んで心の角をとる

時々は便利な耳で聞こえない

炎天で水の重みを知る蛇口

退院と決まれば居たし天の邪鬼

ニコニコと儲けが顔に出て困る

この部屋でいつかは死ねる隠居部屋

泥水をかけて自動車もうかなた

寝てる間も遊ぶ夢見て子は育つ

案内の矢じるし通り行つて事故

圧力をかけずに自白させる腕

恋人は手前の駅で降りちやつた

自家製粉 水にこだわる技の蕎麦

雪資源 水がめ豊か北海道

サンモリッツ ニセコ探勝尾瀬に似て

日高路の緑したたる駿馬食む

八戸市 島田昭治

鳥取市 岩原喬水

魂のさけび聞いてた今朝の夢  
ままならぬ世をひたむきに生きる術  
気の毒なくらい正直で貧に居る  
親切があだになつてゐる間の悪さ

大阪市 清水絹子

雨あがりきつと手ぶらのお父さん  
大器晩成 母の白髪がふえていく  
今更に母の形見の茶器の艶  
緊急入院 日毎にかかるい箸使い

和歌山市 玉置当代

誘惑に足すべらせている蛙  
童心にかえり海遊館ではしゃぐ  
遊び疲れ欠伸を置いてくる車中  
どんぐりの背くらべして自己暗示

姫路市 中塚遊峰

夢かけて明日の米研ぐ独り老母  
老いてなお悟りきれない気の焦り  
化粧品縁無く生きた寡婦の皺  
月一度仏具磨いて墓掃除

米子市 白根ふみ

日本海わが庭にして大ジョッキ  
湖底渴いてとどめなく浮くドラマ  
楽になる方へ暗示をかけている  
核家族となりの垣根たかくなる

初盆に遺産でもめる顔が寄り  
円高も円安もない金がない  
気配りで母の灯台灯を消せぬ  
儲け口 金が金産む裏がある

和歌山市 榎原公子

孫と夫ずる休みする猛残暑  
丁石に旅の今昔たずねつつ  
石の旅なあがい長いものがたり

加古川市 吐田公一

里帰り地獄の釜の蓋が開き  
陽と浜の匂が好きならぬ干し  
もののふの心を孫に伝えたい

鳥取県 幸家單車

練習を積むとロボットでも踊る  
ふれあいの中で情報ゆずり合う  
箸を持つ所作も別れた夫に似る

和歌山市 北山好笑

破れ帆をまた繕って船出する  
平凡に生きているのに吹矢飛ぶ  
消えた恋あぶり出してるクラス会

十和田市 小笠原敏人

散るまでに退院したい百日紅  
昔人 螢も源平の分け隔て  
稲に色 農家も火照る曼珠沙華

## 新任ごあいさつ

### 志と夢を持って

主幹 橘 高 薫 風



平成六年度の同人総会では川柳塔社主幹に推され、改めて身の引き締まる思いを致しております。

中島生々庵、西尾葉両先

生は、社会的地位、経済力、人間の器量などあらゆる点で秀れておられ、私とは比ぶべくもない大きな指導者でありました。私は、麻生路郎先生主宰の川柳雑誌社の編集見習いを手初めに、広告取り、発送、配本、句会部から編集長までを勤めたことで、言うなれば両先生はオーナー社長、私は小企業の新前社長の存在です。今まで諸先輩のお引立てを受けてきた私は、今後は同人誌友皆さん方の盛り上がるご支援により主幹の責任を全うすべく尽力致します所存です。

路郎先生から受けた薫陶により、私の得た

路郎精神を引き継いで頂けるよう努めたいと思っております。それは川柳社会化には最も大切な作品の充実向上と、同人はすべて平等であるをモットーに、「和を以て貴しとなす」を推進致します。厳しさとやさしさであること申すまでもありません。

それともう一つは川柳の体質の若返りです。今や一般の川柳界も、三十年代四十代の世代が次第に増えてきています。川柳塔では、竹原市の小島蘭幸氏をはじめとして、各地に若い実力者が台頭し、大きな推進力となっている現状です。本社もその趨勢に応じた体制を整えるよう目指したいと思っております。

同人誌友皆さんと、他の柳社諸氏の旧に倍するご支援ご鞭撻をひたすらお願い致します。

### 豊かな歩みを

理事長 西田 柳 宏子



このたび図らずも川柳塔社同人総会における役員改選に当り理事長のご指名、ご承認を賜り、洵に光栄に思ふと同時に、浅学菲才そ

の任の重さに恐懼しておりますが、前主幹並びに副主幹、前理事長の各位を始め同人の皆様方の温かいご支援ご指導ご協力の下にその責を果たさせて頂きたいと思っております。誌寿八〇〇号の輝かしい歴史を刻んだ平成六年、さらなる発展に踏み出す大事な時期に主要なポストに身をおくことの重大さに今更ながらその責任を痛感しております。

顧みますと昭和二十九年十二月、故清水白柳（当時白柳子）先生にお引回しを頂いて、川柳の真似事みたいな句を作り出して既に四十七年の歳月を重ねておりながら、生来の不勉強が幸（？）したのか今日まで厭にもならず続いて参りました。路郎門下の最後尾の不朽洞会員でありながら実に情けない次第です。

新理事長になり、さてと考える時、大上段に振りかぶるようなものもなく、今まで歩んできた川柳塔の歩みを少しでも豊かに、より充実したものにしよう、皆様方と一緒に出来ればと思っております。

同人の皆様、誌友の皆様方にはお気付の点がありましたらどしどしお聞かせ頂き、また鞭をあてて頂いて少しでも反映して、皆様方と一緒に川柳を守り育てて行きたいと思っております。

よろしくお願い申し上げます。

# 自選集

小出智子

わが道を行く友だちの眉涼し  
逝きし人みなこのましい句をつくり  
意地というものをまたない妻の扇子  
炎天を方違いさんに用があり  
八方塞がりから抜けるときと秋

奥谷弘朗

自分のがのったページを先ず開き  
散歩して村の人情知らされる  
なんとなくブームに乗って来たみたい  
一寸だけ本音もらして来た便り  
八十路でも交流のある仲の良さ

金井文秋

美しく老いたき夢は太古から  
ドラマなればこそ離れたり逢わせたり  
旨いものは睨みつけとくダイエツト  
むかしほどの貧乏人はない不況  
ゲーム感覚で万引も殺人も

恒松町紅

幸せは揃う茶碗と鰯二匹  
A型で他人とウマが合うコップ  
暗示には弱い私の血小坂  
渋味もう薄れて男たそがれる  
積みたてていつかは孫の高島田

大矢十郎

理事国へ入会金は高からう  
挨拶が自慢めくころ箸を割り  
帯解けばこんなにもろい札束よ  
そのうちに出る金髪の大銀杏  
家具配置娘らに委せて妻佳き日

松川杜的

たまさかに来たらスーパー今日休み  
長生きもよいが淋しい日がつづく  
政治屋のどの顔見ても腹が立つ  
炎天を郵便屋さんアリガトウ  
この家も留守か回覧板置いてある

藤井明朗

ボランテア積年の徳生きて来る  
陽を拝む散歩へ一日気力湧く  
環境浄化ごみを出さないリサイクル  
隣との仲良し情報網がある  
四島は還らぬ北風は遠吠に聞え

児島与呂志

人々は危険と勝負して迷い  
北風に耐えて根来の坂登り  
正論と一緒に回り道をする  
米の恩 水有難し秋の風  
紅葉の妥協を信じて祭り寿司

工藤甲吉

ここ掘れワンワンここ掘れワンワン考古学  
有って無いような利息に腹が立ち  
ある日ふと葦になれたらなと思ひ  
赤字は赤字 家計簿にはツミは無し  
骨と皮だけになったと腕を見せ

野村太茂津

堂々と掘ってくれてる俺の畏  
行動範囲狭くしていく呆けていく  
ヒビ割れの皿には賞味盛られない  
現実離れの言葉で街うパラノイア  
万人が認めてるから無視しよう

八木千代

相談事を提げて海辺に立っている  
海に出る道で整理券を貰う  
鏡の中の海 荒れている荒れている  
答えを訊くと海も白波騒がせて  
満潮の音ひびかせて老いるなり

正本水客

妻の留守沈丁花だけがにおう  
けつまずいた時自分に気付く  
再出発みんなみんなの気がそろう  
今年はまだ西瓜を食べてないと妻が言う  
血圧の高さ自分でなっとくのゆく日

波多野五楽庵

聞こえますか夏から秋へ移る音  
月の影ならばさよなら言えたのに  
悲しみの涙を包む五本指  
もしかして海に潜ったかたつむり  
向日葵の首に恨みはないけれど

月原宵明

ヘルメット働く顔に笑みがある  
資生堂からは女と認められ  
肋骨を撫でて父権をたしかめる  
携帯電話 男おどけて歩いてる  
発奮は明日から晩酌して眠る

遠山可住

美しい歩幅何する女だろう  
カマキリの斧へしんしん秋深む  
正直の見本財布がやせて来る  
悔いのない汗来年がある若さ  
ガン一つ除けば丸い絵が画ける

辻 白溪子

露天風呂部屋から見えて人が居ず  
麻雀に残り二次会棒に振る  
雑談にかわりお酒が美味くなる  
待たされた時間短く言うておく  
秀才の兄を家業が当てにせず

有働芳仙

膝つき合わして利害もつれ出し  
叱つてその瞳の奥を見抜かれる  
峠を越す一夜が永い水枕  
逢いに来たなどと本心打明けず  
吊橋の真ん中辺で忘れ物

久家代仕男

潤沢な水もないまま秋に入る  
夫婦家出 父の山葵が効きすぎた  
友来たり老舗をくぐる出雲そば  
お浄土は西と決めてる赤トンボ  
豊作だそんな都市では米ばなれ

小西雄々

談合をいくたび聞いた青畳  
火遊びは見えて見ぬ振りの花時計  
檀山行きのレールが街に敷いてある  
半分も過去が切れない鉄もつ  
雑学に長けて村では知恵袋

野田素身郎

席ゆずられてそんな歳かいなと思ひ  
焼香の正座の背中泣いている  
精農家も万策つきたこの日照り  
渴水対策所詮は雨を待つばかり  
割り勘では損と分かっていて出かけ

小林由多香

人形が内緒見ている聞いている  
休日の朝はゆっくり犬も食い  
学歴がなくて越せない壁に会う  
緊張を軽いジョークにほぐされる  
何事もなかったように顔洗う

藤村 女

玉砂利へ母の挽歌が埋めてある  
哀しい過去あり音もなく秋動く  
炎天の汗がみのった穂が揃う  
一山百円の茄子秋の陽に並ぶ  
故郷の情けに出合う赤とんぼ

黒川 紫香

豊年の稲に頼ずりしてゐる孫  
秋深むひとりぼっちの旅をする  
連絡船来たので港活気づく  
押すだけのポットを置いて去ぬ女中  
留守電へお金を貸せと言いにくい

高杉 鬼遊

暑い夏だった永い夏だった  
コシヒカリ三等米の貌をせず  
九階を数えて高いなと思つ  
ゴキブリが消えてこおろぎ静かなり  
銀いろのおとめが路地をぬける秋

西田 柳宏子

塾帰り母の夜食が待っている  
慌てるな他人より自分に言いかけ  
こんな溝ぐらいを見事跳び損ね  
お袋の味 思い出す弁当箱  
珍しく大門開けた鯨幕

橋高 薫風

酌ぎかわし而立と古稀は一瞬ぞ  
千代紙にはや好きな色孫娘  
政治家の臍を比べてみたくなる  
ダイエツトとてご先祖の飢餓の食  
乃木さんに似た人と会うひとり旅

川 柳塔 (追加)

綿菓子（堺市近藤豊子）のふわりふわりと夢を巻き  
わた菓子に紅提灯の灯がこもり  
綿菓子屋 踊り太鼓の外にいて

各欄担当の選者について

川柳塔社では役員改選に伴って各欄担当の選者を次のとおり決定しました。新担当者による選句は、11月15日締切・平成7年1月号発表分からとなります。よろしくお願い申し上げます。

川柳塔 橋高 薫風

水煙抄 高杉 鬼遊 (平成7年度) 交替

渺湖抄 (銀河系改め) 西田 柳宏子 (同 8年度)

茴香の花 小出 智子 3頁に縮小 西出 楓楽 (平成7年度) 交替

初歩教室 八木 千代 (同 8年度) 吉岡 美房 継続

川柳塔社

川柳太平記 (198)

川柳の群像

田 辺 幻 樹

東 野 大 八

『回想の田辺幻樹・嶋田扶実雄』（川柳研究社昭和55年7月刊）という小冊子がある。

田辺幻樹とは、戦前の『川柳研究』誌の黄金時代、主宰者川上三太郎を支え、師三太郎から門下随一の詩川柳家と囑望されながら、37歳の若さで肺疾患のため死去した作家の名である。本名清司、明治41年3月10日東京生れ、会社員。昭和5年ごろ、初号清幻で川研一筋に打ち込み、幻樹と改号するやたちまち柳界の俊秀として衆目を集めた。師の三太郎は、この愛弟子の死を痛惜して、つぎの悼文をこの一冊に残している。（全文）

悼 田辺幻樹 川上三太郎

幻樹仏 薬光はなち恍と散る（悼句）

幻樹が死んだ。闘病十年よくも耐えていた。いつかは来ると彼も私も承知していたが、そ

の日は昭和十九年三月五日だったのである。二日の夜、東北旅行を終えて高円寺の彼の家に行ったときは、既に蓬髪鬼相だった。

辞して去ろうとする時、私を見上げた彼の眼と私の眼は、永訣の一瞬の凝視であった。

私は往来に出てから泣いた。以来、三日四日と彼とは会わなかった。如何にしても死別は私には耐えがたいのである。然し、五日朝十時、私の手の指はまたしても一本ボキリと折れたのであった。行年三十七歳、可哀相な幻樹、彼の句作生活は必ずしも長いとは言えぬ「十年」、それは私の四分の一に過ぎぬ。だが彼の作品と句作行動は、確かに私の四倍に値する。

あの銀の皿の上で、蒼い蠟燭を燃やすような句柄は、今後そつは現れぬであらう。彼の

端正にしていんぎんな態度も、ややもすれば埒を越えたがる若い川柳作者としてよく長幼の順を弁え、先新の別を弁えさせた。殊に私のためには心身を粉にした。有難う、幻樹。それにしても、その幻樹に追悼号も出してやれない。追悼句会も思うようにしてやれないのだ。こう考えこんでくると可哀相で仕方がない。鬼畜必誅―その日まで幻樹よ。

石にも説く 田辺 幻樹

「僕は石に向つても句を説くのだ、説くぞ石に向つても―」

先生の心はボロボロ泣きながら川柳を語つて居られたに違いない。

先生の蓬髪は更に銀を加える。この心を心とせぬ限り、何んで門下生といえよう。私も病弱な身に鞭ある限りいっばいに受けて、川柳が国家と俱に進む流れの中に、今まで先生から頂いたあらゆるものを打ちまけて挺身してゆくつもりである。

川上三太郎先生！

先生の十七字の心は、既に日本を基に、大東亜に先発して参りました。門下生も新しい誓いと共に起ち上つております。

―母の背中で小さい手で―

もう大分ふるくなりましたが、先生の大好きなこの「日の丸行進曲」を、足りぬであり

ましようが微醺とあらば、また両手をボタンボタンと振って、豊かに歩調をとってお歩き下さい。私たち直系門下生百十余名もまた、一生懸命口をあけてこの唄を合唱、そして、しっかりとつまでも先生をお護り致します。

いつまでも健在なれ——大東亜の川上三太郎先生『戦捷三年一月十一日払暁（『川柳研究』第百六十四号・絶筆）

昭和七年頃から川柳界にデビューしたときが、昭和十四、五年から死没までの間は、現役作家の第一人者であったといつても過言ではあるまい。作家としての彼の作品の上から詩精神の上から、或は作品態度の上から見て、これまでの川柳作家が持たなかつたものを持っていた。既成大家に、われわれが抱く不満は、詩精神の貧困と作品態度の怠慢さにあつたが、中堅作家としての彼は、われわれのこうした不満を一掃してくれた。また、彼の作品理論は、色々の批評もあろうが、理論の乏しい川柳界においては、ずば抜けていた。そしてその理論を完全に作品化する実力を持っていたことも珍しいことである。

こころはや狂ふに果てし冬の濤  
去りて指折らるる幾日神に告ぐ  
ふす肌は百夜の秋をもてあます

幻樹

冬を逆に見上げあばらがボコンと鳴る

手枕に朝日はあつき胸の癒え

合掌に光りめくれて母子の膳

振りかえるものなき朝の床つすし

風かなと咳く足の爪が伸び

（『わだち』34号後記・山口冷朗）

「彼が、わずかに元気であり得た最後の晩——三月二日川上三太郎先生と相生笑菊氏とが彼を訪ねたとき、彼は謎のような一言を吐いた。

「僕も今月中にカタをつけますよ」

「カタをつける」それは何んであつたか、そういう幻樹と先生の眼がぶつかったとき、先生は思わず深い吐息をもらされたのである。（中略）三日の晩、彼の一番信頼し恐れていた医者が来た。

「先生助けて下さい」幻樹が珍しい一言をあえぎながら言った。「よし、助けてやる。

だが、お前今度はやり損ったな」医者はそう言ったが、見送つて出た笑菊氏に、先生は撫然として告げたそうである。

「いいところは一所もありません」

実際よく闘つた幻樹である。若くして病を得てより二十数年、咯血幾十回、そういう闘いの一方には、より並々ならぬ川柳との闘いがあった。また過敏なほど神経質な自己との

闘いがあつた。闘つて闘いぬいた——よりよき生への為の、それはすべての闘いであつた。闘いぬいて遂に逝つた幻樹に私は頭を下げるのみであつた。（『わだち』田辺幻樹追悼号）昭和19年32号・渡邊蓮夫）

母の語るわが生立ちち蝶遠き

この彼の遺詠にみるとおり、彼は粹と張り誇りとした純粋な神田つ子である。清幻の初号で飄然と柳界へきた当初は、やはり旧来の川柳調にひかされていたものだが、その下町っ子の性格に合致せねばならぬはずの句の雑踏から脱けて、何故に別な作品境地を彷徨しはじめたのか。最近の彼をみれば完成された作家幻樹の存在として別に異とするべくもないが、その川柳の生い立ち、性格から観察すると一つの課題が呈示される。（同 熊澤車山）

以下遺句抄より

振り返るものなき朝の床つすし  
病者字を書かず漠たる春の穴

病む唇を拭うに早き春の羽根

ペン持つて今こそ遠き文字の数

散葉のひとつこ光りたざれる

幻樹

▼次号は「久門 薩城」

# 柳籠裏三篇研究(二十三〜二十四丁)

瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人  
八木敬一・七久保博・岩田秀行  
紀内恒久・西原 亮

鈴木倉之助 故岡田 甫

300 花咲と文でけいせい告る也

間々

瀬川||春の花、仲之町の桜見物にいらしてく  
ださいという女郎の無心文。

あすから花が咲きんと文がくる 四六18  
ちりんせんうちにと文を八重に出し

六二8

佐藤||賛。鶯や杜鵑が、その季節の到来を告  
げること擬したのであらう。

八木||謡曲「鞍馬天狗」に「花咲かば告げん  
といひし山寺の」とあり、文句取りとはいえ  
ぬまでも、語調は取っているようだ。

西原||八木氏賛。完全なる文句取り。

鈴木||同。八木氏お手柄。一茶の句にこの仲

の町の桜を詠んだものがあります。

花咲と直に掘らるゝ桜哉 (年代不詳)

岡田||賛。謡曲文句取りを見つけられたのは  
お手柄。

301 雪隠へものをいふのはきうな事 五秀

瀬川||便所にはいつている者に、わざわざ言  
わなくてはならぬ用件とは、余程、急のこと  
なのであらう。普通なら出てくるまで待つ、  
そんなに長くかかるものではないから。

青木||賛。

男湯を女の覗く急な用

岩田||賛。

急用と見へて湯どのへ持て来ル 玉10

鈴木・岡田||同。

302 熊坂が死にきつてから吉次出る 狐声

瀬川||熊坂長範は美濃国青野が原の強盗の首  
領。金売吉次が黄金を積んで奥州に下ると聞  
き、これを奪おうとして一行を襲ったが、吉  
次と同行の牛若丸に散々に討たれて、遂に命  
をおとした。

吉次は、熊坂が死に切るまで物陰に隠れて  
いて、それから出たことであらう。

吉次が来るで熊坂ひるねなり 三一26

七久保||賛。謡曲「熊坂」に詳しくあり。

牛若が居ぬと熊坂大仕事 六15

鈴木・岡田||同。

## 二十四丁

303 くどきかかれバもふよしと下女承知

青木||川柳で「相模下女」と言えは好色が通  
念になっている。七・五・五の破調で中五の  
「もふよし」の勇ましい口調から海浜育ちの  
娘を彷彿させる句。

くどかれて相模お安い事と言ひ 明七信3  
相模者すてっぺんからあいといふ 明六松4

岩田〓賛。『そんな七面倒な事など、もうよし…』

西原〓礎稿の鑑賞に敬服。

鈴木〓賛。

岡田〓江戸時代、なぜ「相模」が好色女の代表であつたか、そこまで調べられたし。

304 春秋を周倉眠りながらきき、 如雀

青木〓「周倉」は関羽の臣。大力で水練に達していた。「春秋」は五経の一。魯の史官の手に成り孔子が筆を加えたといわれる史書。

主人関羽の愛読書「春秋」音読を傍で聞いていた周倉、何時の間にか、こつくりと居眠りをしたであらうとの想像句。

春秋を周倉よほど聞き覚え

四一 12

馬の耳に風周倉に春秋

二一 37

佐藤〓賛。周倉は武辺一点張りで、読書などに興を示さなかったことを諷す。

鈴木〓岡田〓賛。

305 是より先きは道もなしもらひ坪 美徳

青木〓難解不問句。ご明示下さい。

駄労解を試みれば、素人の丁半賭博でおけらになり、外に法もないので、自分の番ではないが、回り胴（順次、壺を振ること）をゆ

ずってもらつたと言つてはなからうか。

佐藤〓不明。主題句が賭博句とすれば、礎稿の解も一理ある。「胴をもらふこと」を「もらい壺」といったとすれば、私にも別解があるがこの用語を知らないのて詳説を避けたい。

八木〓不明だが、駄労解を一つ。土地の端が崖とか沼地になつていて、どうにも利用しようのない所は売買の際、おまけとしてつけてやつた。取引の坪数の計算に入れない。それを「もらい坪」といった。従つて、そういう所は道をつけようのない所なのだ。

坪と壺は、かなり混乱して使われたようだが、博打の句とすると難しい。

西原〓八木氏の解でよいのではないか。

鈴木〓分からず。しかし、八木氏のお説も一解。

岡田〓八木氏の説に賛。山麓や池沼など、出入りの多いところは「谷地」と称し、坪数などの計算が面倒、それで免税としたのです。年貢がかからない。

さて句の「もらい坪」は、「これより先は道もなし」ですから「谷地」を指していったことと思ひます。年貢がかからないから、「もらい坪」と解します。

なお、「これより先は道もなし」はやはり文

句取と思つ。お探しあれ。そうでないとい句がつまらなくなる。

306 猿をぶつかと思つたらバ附木屋 五扇

青木〓附木屋は附木突とも言い、附木を作る職人。松の材木を薄く削いで両端に硫黄を塗る。

松の薄片を薄く削ぐ時に発するキツキツという音が猿の悲鳴に似ているのであろう。

附木突腰におとけた拍子あり

一 5

猿をぶつやうな音のする附木突

五四 25

附木屋は腕にまかせてギツクギク三〇五

紀内〓賛。但し実物を見聞きしていないので逆に想像している始末。

鈴木〓同。その格好がおもしろいので柳句多し。

岡田〓賛。

## 京都塔の会 吟行

とき 11月20日（日）午前10時半集合

ところ 地下鉄鞍馬口駅②番出口地上

行先 擁翠園―京料理飄亭（昼食）―御霊神社（句会場）

課題 煙・掃く・融通・当日雑感  
会費 5000円（当日）

# 秀句鑑賞

同人吟 土橋 螢

10月号から

川柳塔社編集部から秀句鑑賞を頼むと、私のような者に回ってきた。『川柳塔』も『傘』も毎月読んでいたが、みんな秀句ばかりで十人十色の川柳観で並んでいる。それを更に秀句鑑賞となると大変なことである。私は若い頃から俳句を嗜ってきたので、今でも俳句のような川柳、川柳のような俳句を作っている。季語の入った川柳が多いのも季感を大事にしたいからである。川柳塔の投句が活字になるのは二か月後であるから、九月には十一月に想いを馳せる。そしてなるべく五七五、七五五のリズム感を肝に銘じている。いつも初心者である。秀句のまた秀句鑑賞なんてできるはずがない。どうしても私の主観で鑑賞してしまう。ほんとうの川柳はこれだという自信も、川柳観を持っていないので、川柳塔秀句鑑賞の適格者でないことを断っておきます。

すでに秋のち見つめる昼の雨

西村 早苗

誰かを待っていると雨が降りだした。いい

雨だなあ、生きているんだとおのれのいのち  
に秋を知らせる共感の秀句。

一日一個 梅干し食べておく暑さ

小島 蘭 幸

今年の夏は格別暑い夏だった。今日も暑くなるぞと梅干しを頬張りながら、塩分を氣にする奥さんの心遣いに感謝する。

忘れたらあかんあかとまた忘れ

田中正坊

忘れたらいけないと思っても新しい発見をしたり、着想の変化に大事なことも忘れてしまふのが人情。その時、これだけは忘れぬと、百円玉の裸銭をスボンのポケットに忍ばせたらどうですか。

どうしよう重ねた嘘の後始末

吉川 寿 美

嘘をつくことは、何時でも誰でも簡単にできる。嘘も方便ともいう。しかし、嘘をいつたことに、その結果はどうなるかと思索して自分本位に後を繕うことが大切である。それが自分を可愛がることだ。

酷暑でも敵弾の来ぬ安堵して

堀江 正朗

灼熱地獄の匍匐前進。敵弾に倒れた戦友を想いながら平和な世の中に安堵する。平和に馴れ過ぎて、これがあたりまえだと思っていけない作者の鋭い晩夏の思いがある。

美人には真つ白がよいバスタオル

野村 京子

ピンクよりもブルー、ブルーよりホワイト、真つ白いバスタオルに包むと、とても美人になる。もっぴとり私の私はとても美しい。

妻帰る息子も戻る灯がともる

小澤 幸 泉

核分裂してゆく家族関係への諷刺であろうか。三世代同居はとても難しいことだ。灯がともるしあわせ感。みんなこうなつてほしい。拝啓と書いて昨日も今日も過ぎ

島崎 富志子

手紙を書く、葉書を書く、その返信ならなおのこと億劫になる。その時に書いてしまわな  
いと日が経つにつれて書き難いものですね。  
こぼれ寂わしになができたらう

木 本 朱 夏

人は分相応、何をしようか、何ができるか。自分を叱咤激励する時、鏡を見て朱夏と呼名したら？きれいな萩が咲きこぼれるだろう。

裏町の木は耐えている水不足

宮 西 弥 生

太陽は燦々とふりそそぐ。裏町の木は人に緑陰を与え、緑の葉っぱの同化作用によって毛根から水を滴らすという。人間も水不足に耐えねばならない。

コーヒーが冷めて時計が止まらない

小 寺 花 峯

いつまでも待つています。人生の間のとおり方をよく心掛けていらつしやる。時の流れに任せる自然体、それは臨機応変の受け身でもある。ゆつくりと珈琲を飲んで待つのはよいことだ。

挨拶がきちんと出来る子と出会う

中 山 雅 城

オハヨウゴザイマス。コンニチワ。サヨウナラ。あいさつをいつもこつちからかけるのに、はつきりと受取らない人もいる。でも、この子は偉い。確かにあいさつを受取ってくれた。

放埒の果ての千振買いにゆく

江 原 とみお

あまり捨て鉢にならないようにしてください。千振は何処にでも売っております。いっそのこと、山に採りに行って陰干しにして飲んでみたら。とても苦いですよ。

いのちありてまた日まわりと背くらべ

さ え き や え

今日もまた生きていた。生かされてゆく人生、太陽に花の向きをかえてゆく向日葵と背くらべして、このいのちを慈しむ。

詫び状を書いてゆつくり眠りたい

岸 桂 子

詫び状を書くほど悪いことをした訳ではないんだが、何か書いて、何か読んで、今日のしめくくりをしないと眠れないような気がする。眠れないときは、指を動かして数えると眠れますよ。実験してみてください。

せつせつせつと金木屋をいつくしむ

柴 田 英 王 子

金木屋が香を放つと松茸まで顔を出すという。菊の花も蕾をつける。せつせつせつと花を愛する。その香りをいつくしむ女がいる。「いつくしむ」という動詞が金木屋をつまく咲かせている。

消しゴムで消されてしまふのがつらい

池 森 子

着想が消えてしまふ。私はいま何をしようとしていたのか忘れてしまふ。そんな消しゴムを持っている。消したらなくなってしまう。でも、消しゴムで消えるものは消して、消しゴムで消えない清記をして次へ。

違ひに行く一番近い橋を行く

吉 岡 きみえ

急がば回れということもある。橋を渡るのが最善で最短距離なら結構だ。逢いたい人が待っているのか、先に行つて待つているのか知らないが、文芸にはよくでてくる橋である。

あきらめへ女一人の午後しずか

黒 田 くに子

最愛の夫と別れてしまった。あきらめるよりしかたのない女がひとり、昼さりのテレビを見ていると雨が降ってきた。テレビの音も聞こえないほどの雨が、そして止んだ静かな午後である。香の匂もするようだ。

あの人の陰では少し物足らぬ

西 川 和 子

あの人がいる限り、この人もいるだろう。所詮女は陰になる。大きな蔭より片蔭を拾つて歩くのも風情である。見えなくなるほど隠れる蔭は精いっぱい尽くす人の陰のことだろう。そうだ、あの人の陰は小さいぞ。

父さんの歩いた道を避けて生き

青 枝 鉄 治

父のうしろ姿をみて歩く。父の時代は貧の時代、苦難の道だった。感化体得してうしろ姿が父に似ているが、父の通つた道を避けて迷わないように進んでゆく。

# 水煙抄

黒川紫香選

写経にも似て憧憬の句をうつす

寝屋川市 森

茜

脇役になりたがらない会議室

バスタオル裸身すっぽり罪がない

素直とも無知とも女ついてくる

美しく咲いて花びらこぼれるよ

和歌山市 古久保 和子

時々是不通にもなる糸電話

冗談を混ぜた本音が通じない

花嫁の父が泣くから絵になる日

貯金箱 時々振って確かめる

冷や奴ばかりを食べて夏が過ぎ

熊本県 岩切 康子

話し合い ためた涙に気がゆらぐ

4 B に生きて人生面白い

平々凡々H B が愛される

再会へ刻の流れが短すぎ

ボリウムを上げてひとりの怖さ消す

引き出しの貝が濡れてる雨催い

宝塚市 永田 暁風

ざくろ裂けて地球の未来覗かせる

敵前でゆっくりページ繰っている

秋風に錆びたナイフが目覚ます

過去帳から抜け出したいと亡妻が言う

名古屋市 藤井 高子

夕顔の開きそびれしままに秋

残り少ない暦を乱す秋の風

まだ少し想い残して置く受話器

半分も聞かずに走る太郎冠者

てにをはを替えれば動き出す気配

尼崎市 山本 すみ

入道雲夏野は白くなるばかり

晴ればれと結ぶ佳き日の袋帯

汚染した雨とも知らず飲む小鳥

子も犬も泳ぐ故郷の川温し

野次馬去り花束だけが事故現場

和歌山県 杉山精子

情念を溶かす女の硯箱  
掌の内の「歩」が守護神に変わる攻め  
丁寧な夫の小言かみ砕く  
涙壺乾いてからの風の向き  
破られぬ掟 娘へ三箇条

熊本市 宇野照代

早朝の散歩が騒々しく通る  
人形になり介添えに身をまかす  
就職が決って世界が回り出す  
さりげない顔で海外赴任聞く  
わる者になっておくよと言う笑顔

今治市 塩路よしみ

故里の夢は消えない遠花火  
不透明な心 写経の筆洗う  
饒舌な光に弱い胡蝶蘭  
そこはかと悲しいものよ秋の風  
陽が沈む女は別なこと思う

西宮市 牧 渕 富喜子

吹き溜りおしろい花が咲いている  
愚かにも爪きり過ぎて秋に入る  
母親に戻るとバカになるわたし  
海峡をまだ越えられぬ旅一座  
水涸れて行方不明の子が帰る

富山市 島 ひかる

雲行きが悪くて月に話せない  
ふぞろいの野菜が救う台所  
臆病なおんな目刺を食べている  
娘と旅をしてフルムーン憧れる  
食べ放題の蟹に今宵はうなされる

富山県 高 島 五月

初恋のお方の墓に薦からむ  
タイ米はどうなる豊年コシヒカリ  
唯一の贅は我が家の朝の風呂  
廃線を歩けば汽車の音がする  
お寺さんも街へ移転の過疎の村

尼崎市 田 辺 鹿 太

街路樹が黄ばむと母に手紙書く  
可憐さを残した嫁の口答え  
霧囲気に甘えて酒の度が過ぎる  
指先でなぞる恋人からの文  
お喋りのインコに口を盗まれる

摂津市 木 下 道 子

消毒の手に初孫の柔らかさ  
眉は母 目は父に似る気の配り  
母と子の信頼乳が溢れ出る  
飲み足りた顔に何にも欲はない  
くっしやみで家族みんなを呼び寄せる

広島市 流 奈美子

豊中市 石 川 勝

以心伝心 電話のベルよありがとつ  
こんなにも心を癒す山の景

ささやかなスリル テレビのサスペンス

大根の白さよ平和続いてる

星降る夜 亡母との会話長くなる

熊本県 大 川 幸 子

おきまりどおりのケースになって来た

思いきり世の中変える脳移植

何げない振りして影がついてくる

魅せられてしばし夕陽を追いかける

身動きが出来ぬどちらもある恩義

尼崎市 長 浜 澄 子

気まぐれなグラス淋しさから逃げる

話合う余地を残して梨を剥く

旅は楽し 私に帰る家がある

流れ星少し弱気になっている

悪友が来て風穴を開けていく

静岡市 沢 田 き ん

さまざまな風がよぎった恋の道

口先がなんと不思議にまわる人

ニコニコと医者が頷く心電図

空耳か雨戸を叩く風の精

もう一度やり直そうと辞書を持つ

寂しいとひよいと手が出るハーモニカ  
秋になったらジョーク拾いに町へ行こ

シナリオにやらせがあった猿と蟹

独楽コト地球のとまる日のように

今治市 野 村 清 美

炎天へじつと耐えてる庭の石

美しく咲いてはかない遠花火

黒ずんで過去物語る桐箆箆

色付いて夕陽を抱いた秋の山

藤井寺市 高 田 美代子

雀おどしに案山子居眠りから覚める

紫の座布団を敷き敬老日

よう言わんことはノートに書いておく

犬の餌だけは夫が買ってくる

尼崎市 森 安 夢之助

肩たたき孫の野心は一〇〇円だけ

新妻に送られ門を出る夜勤

見栄を張った寄附がトップに書いてある

尼崎市 野 瀬 昌 子

平気ではいられぬ別居する話

ほどの良い眠り覚えた粗大ゴミ

ほどのほどの距離で親子の仲保つ

自販機の前で一缶飲んでいる

尼崎市の場 十四郎

起死回生 郵便箱は玉手箱  
遠くても里の墓参は家族連れ  
趣味が合い夫婦そろって同好会  
走らねばライバル先に旗を振る

尼崎市 尾宮弘治

又かいな母が笑うて工面する  
知恵の輪で頑固な夫に負けて勝つ  
赴任地の便りに妻の目がさとい  
ビールしか無いがと誘う夏祭

今治市 渡辺南奉

新時代おしめも皿も使い捨て  
洗濯は乾くが洗う水がない  
諸行無常 明日の約束などしない  
バーゲンに弱い女で憎めない

島根県 三代朝子

ご無沙汰のそれから長くなる電話  
幼顔 笑い合ってるクラス会  
早い秋 主婦いそがしい冬仕度  
おばあちゃんと言われ年金に辿りつく

島根県 武島ちよえ

はたいたと言え小銭に笑われる  
造花には明日に炎える彩がない  
そっくりの人に会った日暮れ道  
親離れさせて子離れ出来ません

田辺市 大峠可動

曼珠沙華 狐の恋の炎かな  
風きらら砂漠のうたも華やげり  
風のうた刻の間に間にあわわと  
寒がりて結ぶ妥協もあるだろう

芦別市 斎藤房子

気が付けば蝶もトンボも消えて暮秋  
生き下手でいつも転んでばかりいる  
サルビアに炎えろ炎えろと励まされ  
吞むはなし決まり一抜け二も抜ける

香川県 辻上よしみ

満天のきらめく星に夢を追う  
この夫に従い越えた浮世坂  
濁水が続き気になる野菜の値  
流れ行く雲に我が身を振り返る

今治市 越智青園

握手する力加減に負けている  
せんべいの歯切れよい音日本晴れ  
足たらずリフト冷たい風をよぶ  
洗濯好きの妻を困らす水不足

香川県 堤くに子

伝言へ私の意見少し入れ  
医学書を枕に父はガンと決め  
母性愛くすぐる恋でジレットタイ  
一芸に秀でてチームの星となる

米子市 足立由美子

他人事でないと悩みを聞いている

他人だが妙にびったり息が合う

自己暗示かけて問題解いている

他人様と違った彩で明け暮れる

兵庫県 倉垣恵美

言い勝って大根おろしの辛いこと

口ばかり達者になって老いました

安住の場へころがったまるい種

頼られて我が身一つの置きどころ

新潟県 高野不二

まだ来ない見舞待ってる一人ぼち

風邪ですと自己診断で医者に見せ

忘れないはずでも余る呑み薬

旅先へ水かげん聞く妻の留守

大阪府 尾崎黄紅

花はそう思っていない花言葉

若者と酌み若者に戻ってる

還れる日のバンザイだけは忘れない

この町の坂田三吉惚けたまう

寝屋川市 富山ルイ子

師のお供行く先ぎきの温かさ

口から出た言葉元にはもどらない

話し手の心が見えている言葉

ひそやかな風のささやき聞く独り

松江市 佐野木みえ

頂上に小石を積んで山守る

哲学の道を散歩しましたねお母さん

お隣の風呂の水音 午前二時

人並に帰りを急ぎ独り住む

熊本県 高野宵草

言い訳は眼鏡拭きふき聞いてやる

職場での堪忍袋 家で開け

肩の荷を降ろして呑んだ二日酔

掃除機でときどき造花生きかえる

和歌山市 森口美羽

幸せは白いごはんとお茶でいい

しばらくはだんまり決めている蛙

いつだってあなたばかりを思ってる

イメージがくずれて私らしくなる

和歌山県 藤井春子

ひと夏の青春を渚へ埋めておく

軋む日も冴えた日もある夫婦坂

口げんかしているようでいい夫婦

転がった輪から童話が生まれでる

池田市 金崎峰子

慎重なようで深みによくはまり

大阪弁北と南でやや違い

妻の愚痴聞いているようなふりだけで

いいプランきいても実現できぬ家

生意気な奴だ頼りになる奴だ

旭川市 朝倉大柏

曲がり角どう曲がるかで運不運

金のあるうちは出来ない親離れ

叙位叙勲の中で聞いている

宿毛市 岡村千鳥

腕一本で築いた城を子は継がず

脱線もいいくすりだと気に止めず

雑魚でよしそれなり明日の夢はある

あの人の視野にわたしを置きにゆく

兵庫県 西井つや子

他人皆達者に見える日のあせり

茄子漬の色がおいしい嫁姑

私を沈めた波を忘れない

花火より一雨欲しい熱帯夜

河内長野市 大西文次

お隣も自分と同じ恐妻家

次々とメロン見舞にやって来る

ぼちぼちと墓の広告目にとまり

昼喧嘩 夜あつさりと仲直り

熊本市 遠山夏生

三つ四つバツジ持ってた頃がある

取りあえず祝吟一句箸袋

愛情が冷めると価値のない指輪

平等にゆかないものに靴の裏

運命の神はなかなか意地悪で

泉南市 坂根流水

好運は一度のがすと二度来ない

他人より身内がにげる身の不徳

その上は天に委せて目をつぶり

東京都 清原悦子

心配をされて自由が規制され

身から出た錆は元にはもどらない

宝くじ買って私も夢ができ

留守電へいつもの自分の声が出ず

枚方市 前たもつ

玉子まだ高級品と思う歳

母に出すハガキにルビをふってます

顔の爪痕みんな孫だと言っておく

古本屋漫画並べて世相とか

寝屋川市 北岡波留吉

非力だが他人の世話が出来る幸

近づいた時効に焦る刑事部屋

二度の職決まり安らぐ台所

夕べの傷痛いと言わず伏せておく

西宮市 亀岡哲子

背もたれがあつて居眠りしてしまふ

棟上げの屋根より淡い月あかり

贅沢は売れぬ億ション借りて住む

発車ベル背中を押してくれた人

西宮市 山本義子

わき道で秋待つすすきゆれている

茶一つそれぞれ家風あるくらし

京北山 湧き水のあるありがたさ

廃工場 夾竹桃の赤悲し

福岡市 井崎ミサ子

言葉ならたつぷりあるのに出ぬ言葉

あんれまあ自分のいびきで目が覚める

笛吹かれ踊らず反乱起した日

怒る事止めて笑顔を呼び戻す

鳴門市 八木芳水

女って不思議泣きたい時泣ける

パチンコを高い遊びと悟ります

ユニークと言って個性をかばってる

ボールペン嬉しい時はよく走る

茨城県 加藤権悟

鎮魂の声かも知れぬ蟬時雨

無器用な父は地固めなど出来ぬ

脱穀の汗へ農夫のみな多弁

火と燃える魔女かも知れぬ曼珠沙華

高槻市 江原秀夫

主人主婦あるじが二人居て平和

テレビにも飽きてジョギングシューズ履く

いつもいつも贅沢してます妻の味

こんなにも女性の多い夏の午後

貝塚市 池田寿美子

奥入瀬に行きたい宿が秋を待つ

二十一世紀へ先生の子も塾通い

手鏡に正直な顔映してる

西宮市 菊池トミエ

反抗期言えば言うほど背を向ける

気楽さと背中合せのひとり旅

炎天に心も洗う髪洗う

羽曳野市 芦田絢子

返り討ちに会うかも知れぬ爪を研ぐ

シナリオの狂いを糺す秋の風

家に居るから留守電にしておこう

河内長野市 印藤智子

迷路からなかなか出られない私

右左海外旅行の友ばかり

家計簿のからくり夫に覗かれる

羽曳野市 安芸田泰子

曖昧な言葉並べて身を守る

妥協しておいて闘志を貯える

人助け地獄に落ちた日の為に

河内長野市 柏本靖子

バーゲンへ走る女の別の顔

正座などしない世代の脚線美

山の彩塗り替えにくる秋の風

鳥取県 美浦 美代子  
いい日記書けると思う朝である

おでことおでこつけて体温母計る  
信仰心厚い人だが不倫する

兵庫県 森脇 和子

逢いに行くあなたに貰った鈴つけて  
ひとり立ち出来ず人真似多くなり  
いい返事まだかとポスト叩かれる

西宮市 古谷 ひろ子

おはようが洗い流したわだかまり  
あのをときを大樹が話す炎える夏

鳥取市 田中 友子

強がっていいよよ本音いいそびれ  
一旗を揚げると言って出たつきり  
仕上がり義母に味見をしてもらい

佐賀市 古川 かずのり

感動をペアで受取るフルムーン  
便利さを使いこなせぬ老いの愚痴  
虹を描き少年ハードル超えてゆく

尼崎市 湊 修水

万作だ二百十日も日本晴れ

闇米屋 穀象虫に食われそう  
夕焼けが一とき詩人にくれる

松山市 丹下 美津子  
台風を当てに思惑みな外れ

うす紙を剥ぐようきざし見えはじめ  
平家の流れ住む山里にソバの花

宜野湾市 杉谷 一栄

台風に会いに来たよな娘の休暇  
花の香を人に言われてから気付く  
系図言う身内の者もいなくなり

寝屋川市 井上 すみれ

敬老日座布団の朱色よく似合い  
長旅の帰れば隣家のゴミも掃き  
相次いで喪服しまえぬ夏はげし

尼崎市 岩倉 キク子

遅おます覆水盆に返すには  
滝壺を覗いてみたいナイヤガラ  
悪事千里 風も無いのによろ走る

茨木市 島元 ふみ

海の見える家で余生を送る夢  
中年の息子他人に見えて来る  
礼状をちゃんと書かせる嫁が居る

兵庫県 酒井 靖子

生きざまの本音を詩にして満つる  
口下手の温い心に酔わされる  
べんちゃらはよそう心が冷えてくる

友情の給水船の来る小島

島根県

森

茂美

一瞬を逃れた蠅が手をこする

女房の寝言のなかに母在す

静岡市

小

木

久

子

ジェット機の速さで噂とび始め

いつだって本気で生きているつもり

慈雨とまで行かぬが舗道濡れている

宝塚市

飯

西

ミ

サヲ

又の日は無いかも知れぬ障子張り

天高くサンマも空を飛ぶ時代

ついそこで名句が生まれもう消えた

鳥取市

植

田

一

京

掌の中の鬼がなかなか眠らない

見栄と言うつっぱり棒で立っている

近道に躓く石も坂もあり

大阪市

勢理客

ト

ミ子

米と水じっくり見つめ直す秋

日本の良いところ探す旅に出る

朝顔に告げるさよなら風さやか

羽曳野市

西

村

り

つえ

約束が多い十月のカレンダー

新幹線富士が見えずに損をする

雨雲よ重たかろうが早く来い

言訳は止そうと決めた帰り道

台風の間とは知らない青い空

わたくしの後ろ姿に母がいる

寝屋川市

籠

島

恵

子

喫水線でストレス溜めている私

企みがあつてイケズに耐えています

あれもこれも欲ばりすぎていた若さ

吹田市

馬

淵

光

子

二〇〇〇年季語狂い出す温暖化

不足して無駄を学んだ現代っ子

一〇〇歳が珍しくない日本人

岡山市

中

嶋

千

恵子

女には過ぎた度胸と惜しがられ

軽いうそこぼして潮時待っている

古希が来て夫婦の絆しかと縫う

尼崎市

吉

永

伊

三郎

人妻と時々出逢う秋の午後

親切なナースに出逢う通院日

彼岸花咲く頃亡母の七回忌

尼崎市

中

澤

向

西

この辺で一雨欲しく天仰ぐ

万灯会帰りは孫に手を引かれ

新車買う隣ゆとりがありそう

息抜きにマンガの続き読んでいる  
十和田市 阿部 喜久江

他人事になれば見て見ぬ振りをする  
過労死がいやで仮病使ってる

高槻市 傍島 克治

慰安でも研修旅行と貼紙し

子の世話になって標札小さくし

孫達の行事に合わせてスケジュール

高槻市 芦田 静江

名月おぼろ私もおぼろ亡母おもつ

遣伝子のいたずらと知る花の彩

役員更迭 喉元たしかよい流れ

八尾市 生嶋 ますみ

子が巣立ち殺風景になった壁

善し悪しも理解しあつて老い二人

食欲の秋で進まぬダイエット

今治市 村上 久美子

土壇場になると他人は目をつむる

嘘だつて好きと言われる方がよい

寝たきりの目線に合わす花の壺

岡山県 伏見 すみれ

問いたです子供の瞳澄んでいる

いろいろの顔を持つて芸達者

どの家も向日葵咲かせ夏さかり

お隣は子無し向かいの子沢山  
たこ焼きへ小走りで行く阿弥陀くじ  
旧姓で呼ばれた出会いマーケット  
松江市 安食 友子

農業一休み温泉に家族連れ  
いい趣味にいい友があり若返る  
文化祭近くプランも楽しみに

島根県 安部 美恵女

近道にどきどきさせるものがある

長男の立場で物を言うている

お茶漬けの味金婚の夫婦かな

兵庫県 円増 純子

美しく老いたく今日も鏡見る

何一ついいことの無い妻の留守

同じ雨なのにいい雨悪い雨

兵庫県 安達 厚

大きめの音で威かす癖を持ち

良い事があつたらしいぞ靴の音

きつとねと一人合点の返事する

羽曳野市 酒井 一壺

夢を買い夢に酔つてるジャンボくじ

蟻の列目的が有り脇見せず

同姓の多き村行くハイキング

富田林市 欄 智久

広島県 森川 拔智  
万歩計わたしは千歩計でよし

胃を取った妻の方がよくたべる  
長電話女のあとで待たされる

和歌山市 吉村 さち子

見舞い客紳士淑女で気疲れる  
玉葱の訳も聞かずに泣かされる  
落ち込んで自棄に鼻歌口に出る

池田市 木村 一 笛

窓開けて女子は話そらしてる  
町内の世話役噂まき散らす  
なん回も指切りをする小さい子

静岡市 大村 正 雄

お上手の言葉 裏あり表あり  
新党という名でタライ回ってる  
湧き水が商魂と組む水飢饉

岡山市 山 磨 行 子

雲行きを見ながら静かに茶を注ぐ  
息殺し話していたのに壁に耳  
散り際をきれいに飾る身嗜み

尼崎市 萩 原 しげる

延着の乗り換え駅で走らされ  
頻繁に息継ぎをして登りきる  
なだらかな喜怒哀楽に明け暮れる

寝屋川市 宮崎 菜 月  
草の花忘れし人のありにけり  
黒ずんだ縋帯ほどく久し振り  
愛に飢え一日愛の項を引く

尼崎市 河津 正 治  
のん気そうに見せて切り札胸に抱く  
ランチタイム世界の米を試食する  
針仕事上目使いで指図する

愛媛県 久保 良 子  
満ち足りて女不倫の夢を追う  
すぐ顔に出すので輪からはずされる  
町営バスお医者に通う客ばかり

唐津市 山 門 幸 夫  
トンネルの窓の鏡で羽繕い  
遠い耳老婆の話はよく判り  
想い出を無限に語る白い行

唐津市 山 門 タ ミ  
頑固が好きで嫌いで親父さん  
泣き笑い寛美はあの世も渦の中  
価値観で仕分けされてる上手下手

岡山県 土 居 ひでの  
浴衣地の縫い目の先に亡母が棲む  
ゆとりある歩幅は先を競わない  
水の和音求めて長い蟻の列

天理市 飯田 昇

石一つ遠くへ投げて捨てる欲

片言の孫に手綱をさばかれる

焼き芋をたべる婦長の笑い皺

唐津市 市丸 晴子

施餓鬼僧バイクになびく墨衣

早魃に知らない地名教えられ

ジグソーの最後の一つ決まらない

福岡市 森 志げる

芒野の果てから民話抜けてくる

秋そぞろ勲章欲しい老いの果て

眼鏡越し本音はとうに読まれてる

寝屋川市 瀧本 八十八

寅さんは大真面目ほど生む喜劇

生き残る技術に縋る小企業

口下手が泥鰌掘いで場を沸かす

大宮市 新井 圭二

幸せを求めて並ぶ籤の列

盆の夜一人寂しく母想う

娘と歩き昔の妻を思い出す

高槻市 小林 一閑

ふたつなら静かな方を選びたい

折角の苔むす石碑洗ってる

終戦日電灯のつく安堵感

尾張旭市 三浦 きぬ

小粒だが総身に知恵が回らない

真夏日が解消二十九度九分

年寄りの冷や水もよし鉄アレー

寝屋川市 後藤 黎之助

大木の陰に鉢植え寄せておく

職退けば何をしようかビルの陰

昔松下今吉本が継ぐのれん

岸和田市 井齋 一齋

私の夢助走ばかりで消えてゆく

うっかりと喋って小骨喉を刺す

同病で慰め合える痛み分け

静岡市 永倉 柳華

東京の暮らしに母は長居せぬ

竹べらでけずって遺跡拂らず

焼石に水 深刻な水不足

枚方市 濱田 良知

身に覚え妻がずばりと突いてくる

終電は働き蜂の仮眠室

向こう意気強いが逃げるのも早い

寝屋川市 太田 とし子

お言葉に甘えた車エンコする

小盛りを探して回るレストラン

なにもかも無視して旨いこしひかり

人生のバズルを探る深い霧  
砂川市 武田正美

甘え過ぎへそよ風のラブコール  
辛い日は辞世の歌を繰返す

鳥取県 武田照女

若いから堪忍袋が縫えません  
地藏盆 仏も秋の彩を抱く  
朝市で花の素顔を買って来る

岸和田市 亀井皎月

老いが来て定食となる冷奴  
梅漬けて健康家族へ思いやる  
手折り花 蝶も一緒に持ち帰り

唐津市 浜本治幸

ゴミの日を野良猫ちゃんと知っている  
散水の花より雑草意地で伸び  
万が一ということもあり宝くじ

相生市 中塚礎石

同じピラ帰りの駅で渡される  
よろこびも悲しみも知る岬の灯  
男の子惚れた弱みに奢らされ

高槻市 執行稲子

もう終生脱がせられない亡母の足袋  
女の子でしょ掴みあいなど止しなさい  
朝な夕な夫婦茶碗が良くしゃべる

気にかかる言葉をふっと飲みこんで  
花束が静かにゆれる過去の海  
静岡市 中西雅

ようやくに聞こえた軒のチチロ虫

唐津市 松本圭一

単身赴任 家事全般を修業する  
鯖食べず酒だけ飲んで帰る客  
キリギリスもバツタもないドームの芝

大阪市 乾哲静

ライバルの視野に我が家の狭いこと  
新米の声に平和の有難味  
いつまでも亡母が生きてる隠し味

静岡市 宇佐美寿美

渋滞の小わきを抜ける小気味よさ  
追伸に心の底を覗かれる  
赤を着る何かいいことありそうで

伊丹市 樫谷郁子

内定の孫の小躍りする電話  
街路樹の悲鳴が聞こえ枯葉散る  
鈴虫の声に誘われ秋が来る

兵庫県 北川とみ子

一人居の愚痴が多くて病んでいる  
数珠の手に望みいっぱい祖母の夢  
いい夢を見たく小さな旅に出る

鳥取県 権代康女

円くした心に敵の影が消え

再会は一年先の従兄弟会

静岡県 片平静代

満ちたりて亡母が夢には出てこない  
言い分が有ってどちらもゆずれない

浴衣着た踊り上手な娘に見とれ  
お習字の上手な孫が二人いる

大阪府 中田あい子

河内長野市 水谷笙子

朝市の売手の声が亡母に似て  
ふか爪を切るたび想う母のくせ  
名作も古典も漫画で読む時代

握り飯もろた嬉しさ忘れない  
孫ほどのナースにえらい叱られる  
善人の匂 子犬がついてくる

河内長野市 橋本弘美

大和郡山市 柳原慧心

ただちよつと転んだだけにレントゲン  
さりげなくハワイで日焼けしたと言う  
バカンスにベットのホテル高くつき

OLの笑顔の裏に武器がある  
上役の歩幅に合わせ蹴つまずく  
方角のわからぬ妻を駅で待つ

宝塚市 嵯峨根保子

今治市 渡邊伊津志

口癖が昔どおりでなつかしい  
美しき人はほほえむだけでよい  
壺買うて出れば時雨か陶の郷

理窟ではそうだが道理の方が得  
干潟消え貝の怨念溜まり出す  
実らない恋と知ってる桜貝

和歌山市 和田美寿子

尼崎市 軸丸勝巳

宝船貧乏神も乗っている

貯水ゼロ天に届かぬ水心

幽霊の心みたいにかよわない  
老いの身に神経痛も住みついて

台風も雷も好き水不足  
関空開港先人地下で見えますか

大洲市 中岡錬三

島根県 松本聖子

生きるのに便利楽天主義でゆこ

音痴だがカラオケやたら好きですよ

晩学は老眼鏡が必需品  
人生の匂はどうやら今らしい

赤トンボ去りゆく夏が恋しいか  
宍道湖の落日黒いシルエット

八尾市 村上剛治

足下にある爆弾に気付かない

治らないから体質にしてしまふ

肩の荷をおろしてホツとうまい酒

米子市 小塩智加恵

お隣の孫も寝ばけるくせがある

折角の旅に台風当りそう

説教をすなおに聞いて生きてみる

島根県 福岡博利

平凡に行こうとしたのに役もらい

口喧嘩してます妻も元気です

おもしろい切り語ってくれて楽になり

寝屋川市 坂上高栄

つぎはぎの出土の壺の滑らかさ

雨乞いの祈り届かぬ青い空

雲海を見下ろす朝の駿河湾

河内長野市 妹背尽呂久

夏痩せを隠す苦心のネックレス

霊柩車を尻目に飛ばす救急車

深すぎるお辞儀をされてうろたえる

鳥取県 山本正光

大臣の実家の近くに僕がいる

ひと言の医師の言葉にうろたえる

鈍行で妻と道草しながらに

米子市 鹿島蘭

隣にも吹く風ならば我慢する

サンマ焼くと親子の猫がやってくる

大阪府 今西静子

近道は抜けられますと書いてある

矢印は勝手に来いと書いてあり

唐津市 山口ふさ子

髪結って出てゆく当てもない独り

盆過ぎて猛暑優しくなってきた

有田市 生馬芙美子

百点を貰ってから溺れぎみ

庭の石囲むと話弾み出す

熊本県 増田一乗

入院で裸のつきあい猶つづき

盆栽のその後の話に一時間

愛媛県 中居善信

これも見栄花をつけてるねぎ坊主

真相を聞けば黙秘権にあう

鳥取市 杉本孝男

野次馬の中に校長ひとり居る

一杯の水 山頂で飲むうまさ

和歌山県 村中悦男

逝った父見習いたいと思う齡

ため息のわけを日記に書く孤独

尼崎市 向井末貞一  
長ながと無駄な会議で夜が白む  
直ぐ都合付けて悪友揃う

姫路市 服部一典  
終わりそうで終わらぬ女立ち話  
無職でも畑仕事をしています

和歌山県 中村君枝  
妥協癖ついてしまった気のゆるみ  
もう犬は飼わぬ淋しく哀しい夜

岡山県 富坂志重  
ゆっくりすぎて昨日の嘘が浮き上がる  
添寝して童話の続き読んでやる

堺市 吉本菁風  
三年の努力代打に起用され  
大阪を人種が違うように言う

唐津市 福島紀一  
方言で酌する女飾らない  
つくばいに青竹のある涼がある

綾部市 藤田芳郎  
故郷の山に民話と神が住む  
せっかちの居る焼芋で穴だらけ

和歌山県 木村親路  
首切りの最短距離は管理職  
病院の梯子でやっと生きている

枚方市 森本節子  
吹き上げる風こちよい山の寺（あね一周忌）  
焼香にいうこときかぬ正座の足

高槻市 守先伸子  
迷ったら森へ入ってみるもよし  
耐えてきた亡母が愛したこぼれ萩

鹿児島県 大山舞鳥影  
リハビリにダンスは如何モボにモガ  
土壇場で他人に戻る顔ばかり

大阪市 一本勇太  
ひとかどの齡が泣いてる縄のれん  
老残の背に燃えた日の彩がある

大阪府 原美恵子  
くたびれた札自販機に嫌われる  
掌中の玉がボチボチ親離れ

羽曳野市 大澤夏秋  
ネクタイが気の毒になる燃える道  
秋風がすくない髪をそつと撫で

松江市 松浦登志子  
悪役の仮面はずすと子煩悩  
気がつけば牛乳しっかり飲んでいた

高槻市 小林紀美子  
子には子の論理しかない待つしかない  
雨乞いのおとき話がひしひしと

羽曳野市 徳山 みつこ

も一人のわたしが聞きたがる噂

涼風をくれる見出しが欲しい朝

広島市 中村 要

その次を言うから電話長くなる

鼻柱折られた夜は寝付かれず

島根県 菅田 かつ子

どうだっていいわとふんわり妬いてみる

お化粧をしたらむずむずしてきたよ

岡山県 清水 悠貴女

爪みがく敵は一人もない余生

ふつくと御飯が炊けている平和

羽曳野市 麻野 幽玄

電話帳繰っても出ない探しもの

怖くって読めない本もある書棚

神戸市 向井 泰子

朝顔と記念写真を撮っておく

樹の下で話上手をとり囲む

鳥取県 高尾 京

明日死ぬと思わないから生きて居る

梨送り孫の便りを待つて居る

徳島県 安宅 美代子

百円ライター固い約束などしない

ばれそうな話題でお茶も入れ替える

思う事母ははっきり言い過ぎる

人生を何時か打算で動き出す

米子市 永井 三津子

顔の効く男が歩く裏通り

勝ち急ぐ男はいつも勇み足

兵庫県 玉田 三重

簾枕の型付けている昼寝顔

特攻兵は征きしままなり秋の空(江田島旧海軍兵学校)

姫路市 福島 姫女

錆びついた頭に時間空回る

天国と地獄この世にたとある

田川市 松元 寿永

仕合せな風をつかんでいる平和

湧水の神に祈りを忘れない

島根県 槻谷 仲子

うちの猫私の顔色見て強請る

ストレスへ我慢はしないことにする

鳥取県 橋谷 静江

まだ役に立つから祖母はよく持てる

惜しまれて散りたい花がする化粧

和歌山県 中後 清史

内の家減量せんともちまへん

内の庭狸のそばに鶴がいる

鳥取県 橋本孝原  
ふる里の海を泳ぐと気が晴れる  
スポーツで心身きたえ地味つくる

千葉県 大川晚翠  
水不足雁字搦めに括りつけ  
停年は犬ものんびり散歩する

泉佐野市 稲葉洋  
夏帽子うちわがわりの立ち話  
告げ口の出処たどれば我が身内

東京都 松本冬虻  
窓際の眺め恋しい昨日今日  
勉強は塾でお願いいたします

大阪府 和田和風  
靖国の母と呼ばれてからの鬱  
軍歌聞くやはり悲しい歌ばかり

静岡市 増田扶美  
寺の寄付 法話の中で匂わせる  
自問自答縛れた糸を解いている

鳥取市 谷口侑里  
大漁の船を繰出で出迎える  
夏の恋線香花火と共に消え

宇部市 中村三良  
満点の話がどうも気に入らぬ  
人間臭い街でラーメン大盛りを

姫路市 小井里兆  
今日もまた三度の食事美味かった  
雨無しの子報欠かさず聞いて秋

吹田市 西岡豊  
止まり木で串を数えてもう一杯  
生活によいしょこらしよとリズムつけ

八代市 松岡ミツオ  
記念の木 大樹となって我も老ゆ  
母の勘 指で測ってほぼ同じ

静岡市 三浦つね  
私を磨いてくれる友がいる  
農園に器量のわるい茄子胡瓜

静岡市 柳沢たま  
遺産分け本気で涙拭いている  
口喧嘩自由にしてと捨て台詞

静岡市 佐藤次枝  
居眠りの出来そうな席確保する  
隠してもだめよと迫る彼女の目

海南市 谷口義男  
顔が利く理由で会長押し付ける  
返盃へ本音も併せ注ぎ入れ

高槻市 乙倉武史  
本心を晒す親しい酒を酌む  
豊作の米に案山子も胸を張り

出雲市 浜 圭三  
灰皿がなくてタバコを引込める  
手土産へきまり文句の札を言う

高知県 百田 サチ  
変化球投げて反応みる夫

それなりに生き甲斐があり井の蛙

青森県 諏訪 明雄

雑草も長い残暑に火傷する  
蟻にだつてぐうたら野郎いるようだ

八尾市 平川 幸枝

宝くじ当りそうなの選んでね  
犬小屋の犬も寄り添う星一つ

香川県 高橋 たみ

散歩してなじみがひとりふたりで  
今朝のナス ボトルみたいで酔いました

大阪市 中橋 恵美子

チン一つ鳴らしお供え下げてくる  
河内音頭の輪が逃げてゆく俄雨

藤井寺市 楠 昭子

いたわりの形で歩く影法師  
一つ屋根お茶とコーヒとミルク住む

岡山県 国米 きくゑ

色眼鏡はずし平和に暮す日々  
窓際の机を今日も磨いてる

米子市 木村 春枝  
古里に大きい虹を期待する  
夕焼けに下駄をとばした日の遠く

流山市 神田 治  
一汁一菜 豚にならないようにする  
ダンス入門新たな友を開拓に

八尾市 村上 ミツ子  
金儲け下手でも心あったかい  
長電話肝心なこと言い忘れ

福岡県 本田 忠男  
恵み雨 水番足が軽くなる  
久しぶり軽いことばに愛がある

岡山県 福原 辰江  
和やかな母の扇は開けっ放し  
こだわりを流す水なら汲んでやる

岡山県 福原 悦子  
その先を無口で耐える母が居る  
和解する距離が重たい倦怠期

唐津市 野田 旭恒  
金釘であった亡父の住所録  
コンテスト何れが菖蒲かきつばた

和歌山市 山根 めぐみ  
病室で全身耳に嫁を待つ  
香水を変えて若さをとり戻す

岡山県 大石 あすなろ  
祝盃へ敵も味方も輪の中に  
誰よりも小まめに動く割烹着

河内長野市 木太久 正 一

甲子園に校歌流れて故郷へ  
ドヤに住む一人ひとりに深い訳

大阪市 川 原 章 久

五十年半分消えた戦友の会  
都合よく曲げたニュースは内地向け

八尾市 與 田 明

回り道しても道路工事中

戦争も平和も知って古希の坂

島根県 岩 田 三 和

ソウメンにわさびの香りそえる涼

たけ筒の中にしまっている宝

唐津市 入 江 喜久亭

魂胆を見ぬかれ青くなつた友

無器用な男が踏めぬ段梯子

唐津市 江 川 青 琴

タクシーをがまんした分肩がこり

チャボにさえそれぞれちゃんと個性あり

和泉市 加 山 よしお

もう寝るよとおやじの酒も弱くなり

パーティーへ着てゆくものがないと言ふ

静岡市 浅 子 まつゑ  
頼りないような人だが義理堅い  
別れ際次の再会誓い合い

交野市 山 川 日出子

絵の隅にへたな川柳書きそえて  
猫よけにペットボトルが大流行

箕面市 木 村 天 弘

好きだとは言えずいけずの少年期  
任期解けすぐ緊張の糸切れる

樺原市 西 本 保 夫

好感が持てる真面目さ書くカルテ  
リハビリへ話しかけたは未亡人

大阪府 澤 田 和 重

ふんわりと抱かれて寝たい絹蒲団

熱帯夜きみの寝姿みたくなる

豊中市 田 中 道 胤

その上に琵琶湖の水が何センチ

無理をしたホテル食事は外で取る

羽曳野市 山 本 たけし

打水の溜りを呑んでいる雀

初恋の私の胸にある貴女

鳥取県 中 西 智恵子

生きるとは耐える事なり亡母の声

借金を新車に乗せて走ってる

和歌山県 上岡正直  
援助にも頭下げてのアジア行き  
店主から銭別届くご常連

富田林市 山原昭水  
あのとくに叱られたのがよい薬  
心電図恋の病はわからない

鳥取県 奥谷彩子  
旅の空夫への土産地酒買う  
他人の出世話で夫婦げんかする

泉佐野市 河原崎礼子  
朝刊はテレビ欄だけ見て登校  
松葉杖はじめの一步ゆっくりと

鳥取市 近藤秋星  
三人三様 秋の夜は更ける  
一歳になって覚えた人見知り

出雲市 川島和歌子  
月も冴え友呼ぶ虫の長い夜  
花火師の苦勞を知ってる月見草

豊中市 みきわきみ  
さげまんのままでこの俺停年に  
五十年経った たそがれて喜寿傘寿

豊中市 岸田知香子  
鈴虫に猛暑の疲れいやされる  
夏休み孫に点数かせぐ祖母

唐津市 岩崎實  
産業戦士夜の国道走り抜く  
朝顔を咲かせて路地の奥に住み

鳥取市 津村静枝  
窓際も勤め制服今日限り  
甦る夢もう一度埋めもどす

兵庫県 中野とよ子  
がまんして今日が明日はと鳳仙花  
近道をすれば出会える花がある

明石市 小川酔月  
酔うても帰る我が家は忘れない  
友の死に早速バリユウム飲みに行く

出雲市 荒木恵美子  
あの世までロマンスもって行く男  
良き友に支えられてる果報者

八尾市 井上しのぶ  
凡夫婦地図には迷い道だらけ  
忙しい人に仕事が寄っていく

米子市 服部朗子  
病なしと暗示をかけて峠越え  
制服が割烹服と家の嫁

松江市 浦辺静江  
制服を脱げば脱いだで気を配る  
名も聞かず挨拶だけの散歩道

米子市 池 尾 保 子  
 思いきり泣きたいドラマ読んでみる  
 折れ釘のように曲った老母の背

鳥取県 藤 山 弘 子  
 リフレッシュ上手にしている昼休み  
 一大事ふところ勘定間違えた

鳥取市 山 口 しげる  
 人脈を遠近法で解いてみる  
 神だのみ慣れて終生無為無策

泉佐野市 大 工 静 子  
 子沢山一個団体初施餓鬼  
 師の葬儀喪服のままでクラス会

大阪市 池 田 一 男  
 廃車まだ新車のつもり五十歳  
 惚けた目に同じパターンの時代劇

大阪市 平 井 露 芳  
 お経上げてから大木切り取られ  
 新空港十二時過ぎて暗くなり

東大阪市 松 山 隆  
 老い初め友欲しくまたわずらわし  
 裏話 噂の種は身内まき

お願い 本欄への投句は、本文末尾に綴じ込んだ  
 投句用紙でお願いいたします。

## 川柳塔鹿野みか月大会

と き 11月20日(日) 午前9時開場  
 ところ 鹿野町営国民宿舎 山紫苑  
 (JR浜村駅からバス15分)

兼題と選者(各題2句・午前11時締切)  
 「簡単」 橘 高 薫 風 選  
 「木」 寺 尾 俊 平 選  
 「占う」 森 中 恵 美 子 選  
 「畳」 浜 野 奇 童 選  
 「劇」 内 田 久 枝 選  
 「輝く」 政 岡 日 枝 子 選  
 「動く」 江 原 と み お 選  
 「絵」 野 沢 大 漁 選

会 費 2000円(軽食・発表誌呈)  
 投 句 11月10日までに投句料1000円を添えて下記へ

〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野  
 1279 中原 颯 人 方  
 川柳塔鹿野みか月事務局

## 大阪文化祭川柳大会

と き 11月19日(土) 午前11時開場  
 午後1時出句締切 同2時披露  
 ところ 大阪市中央公会堂中集会室  
 (地下鉄「淀屋橋」「北浜」から歩5分)

宿題と選者(各題2句)  
 「豊か」 梶 川 雄 次 郎 選  
 「風船」 宮 園 射 月 芳 選  
 「絵」 谷 口 光 穂 選  
 「ぬれぎぬ」 永 田 帆 船 選  
 「時事雑詠」 柏 原 幻 四 郎 選  
 「遠い」 野 島 満 寿 巳 選

席 題 当日2題発表

会 費 1000円(作品集代を含む)

主 催 大阪府・大阪府教育委員会  
 大阪市・大阪市教育委員会

# 銀河系

## 河内天笑選

吹田市 山本 希久子

敗北にあらず蛙は冬眠中  
私の癖よく知っている自転車だ  
きつと咲く約束がある花時計

鳥取県 江原 とみお

丁寧なことばで蹴とばされました  
右往左往して悪人になり切れず

米子市 林 荒介

制服に約束が多すぎる  
灯台のエリアを舟は出て行った

青森市 工藤 甲吉

興奮をしてガブガブとお茶を飲み  
呑助に妻が保険をかけている

鳥取県 新家 完司

無言電話きつと埋めた女から  
一緒に死んでくれる女が見つからぬ

米子市 青戸 田鶴

他人から見ればおかしな夫婦だろう  
深い赤まんじゅうには影があり

香川県 川崎 ひかり

まん丸い月が言わせたあの台詞  
大変だ河童の皿に水がない

豊中市 石川 勝

肌寒いコンピュータで鳴る神楽  
なに願う妻よ祈りが長すぎる

尼崎市 春城 年代

何を捜しに開けたふすまかさえ忘れ  
敬老の二人でおすし巻いている

松原市 小池 しげお

風鈴が鳴って巨人が負けている  
忙しい一日でした手の輪ゴム

岡山県 矢内 寿恵子

戦争の話で愚痴のように聞く  
陽が落ちて水銀柱もほっとする

岡山県 小林 妻子

百姓に休日らしい雨が降る  
水不足祭り太鼓は弾まれぬ

西宮市 西口 いわゑ

電話口最後は水のことに触れ  
仁王さん暇な時間は笑ってる

香川県 辻上 よしみ

子の育ち悩みもでかくなりました  
ボールペン使い果した味のよさ

綾部市 藤田 芳郎

飢えそうで分厚い辞書を買ってくる  
気をつける資格不問と書いてある

堺市 高橋 千万子

世を捨ててから西成でヒゲをつけ  
金持ちのぐち聞いている貧乏人

今治市 渡辺 南奉

失敗の多い男で目にとまり  
今に見ているがしばらくで黄昏る

和歌山市 村中 悦男

助手席で妻ゆっくりと化粧する  
台風を待つほど欲しい天の水

大阪市 北 勝美

白黒をつけて残ったわだかまり  
無を極めそれからすこし楽になり

静岡市 小木 久子

瞑想か居眠りなのか議員さん  
疲れてる顔へ相談ひっこめる

大阪市 藤田 頂留子

なやましい炎にやけどせんように  
勝気ほど情けに弱い涙つば

海南市 三宅 保州

乾杯も万歳もない酒が好き  
天国へ行き着くまでの底合い

兵庫県 北川 とみ子

極楽の切符は妻と二枚要る  
大阪府 津守 柳伸

大阪府 津守 柳伸

憎んでも根まで引き抜くことはない  
今治市 矢野 佳雲

ライバルが磨きをかけている音だ

米子市 木村 富美子  
鳥取県 鈴木 公弘

本当のことしか言わぬので怖い

砂川市 大橋 政良

標的が竹馬の友の背で揺れる

和歌山市 山口 三千子

奥様の家出は連鎖反応する

米子市 新 正子

いつ見てもバツと咲いてるお友達

鹿児島県 大山 舞鳥影

さりげなく顔から脚へ男の目

米子市 茂理 高代

あれだけの中で他人の顔で会う

熊本県 高野 宵草

掃除機がちよっと途絶えて唄う声

米子市 金山 夕子

懲りもせず鬼のパンツを洗ってる

米子市 石垣 花子

打ち寄せる波さえ四季の顔を持つ

鳥取県 田村 きみ子

何気ない言葉で夫を奉る

鳥取県 土橋 睦子

珈琲を飲みませんかとうしろから

岸和田市 古野 ひで

ひと言の多い男につむじ風

米子市 中井 ゆき

イエスノー簡単だけとなやみぬき

錯覚で結ばれ誤解して別れ

唐津市 山口 高明  
米子市 澤田 千春

好奇心わたしをいつもときめかす

唐津市 仁部 四郎

さけ苦い日の顔色を子等も読み

河内長野市 水谷 笙子

振り向かぬ父の背中は許してる

羽曳野市 吉川 寿美

生き下手の銭勘定ど昼の月

出雲市 久谷 まこと

平凡な日々突然を忘れてる

倉敷市 田辺 炎六

暑がりの妻とは別に寝ています

鳥取県 乾 喜与志

我慢に我慢重ねたら老けちゃった

鳥取県 石谷 美恵子

三日ほど行方不明になってやろ

鳥取県 さえき やえ

半額のみせできのうの客と遭う

大阪市 本間 満津子

夜店で買ったタイヤとうちに言うておく

茨木市 藤井 正雄

骨拾う約束反古にする左遷

名古屋市長 藤井 高子

国訛りのあたりに少し根が残る

旭川市 朝倉 大柏

雨が上がって話半分おいてかれ

氷壁へ挑む男によぎるもの

八尾市 片上 英一  
倉吉市 米田 幸子

深追いは止そう今夜は星が降る

泉佐野市 河原崎 礼子

クーラーの部屋でいったり来たりする

藤井寺市 高田 美代子

正念場妙な力が湧いてくる

横濱市 菱田 満秋

ふりむきもせず亀の子は海目指す

岡山県 福原 悦子

聞き流すことにもなれた妻の舞

唐津市 田口 虹汀

ひと月も臥すと崩れてくる自信

鳥取県 土橋 螢

情念を鎮めるお茶を飲んでる

鳥取県 土橋 はるお

父つつあんが箸にかからぬ事を言う

大阪市 中橋 恵美子

コンピュータミシンで雑巾ばかり縫う

和泉市 西岡 洛醉

嘘ひとつごろごろ坂を駆け出し

和歌山市 堀畑 靖子

おびやかすように詰め寄る膝頭

米子市 小西 雄々

火を跨ぐ男としてのいちページ

岡山県 福原 辰江

どん底に天使の妻が居てくれる

茨木市 島 元 ふみ

二人して下手な人生やり直す

寝屋川市 籠 島 恵 子

手抜きした分言い訳が冴えている

西宮市 奥 田 みつ子

失敗も人並みにして恙無く

鳥取県 岩 崎 みさ江

風を呼ぶことを火種はまだ知らず

姫路市 中 塚 遊 峰

傷ひとつ持って女は強くなり

河内長野市 橋 本 弘 美

自画像はうんと美人に画くつもり

鳥取市 西 原 艶 子

胸のしみごしごし洗うても落ちぬ

和歌山市 桜 井 千 秀

化け癖がついて自分を見失う

川西市 氏 林 洋 敏

人見知りしてますネコもわたくしも

鳥取県 美 浦 美代子

手切金ないので離婚あきらめる

箕面市 岩 津 ようじ

足るを知る男も時に見てる夢

姫路市 本 上 まさ子

思い切り井戸水を汲む里帰り

唐津市 岩 崎 實

階段を登れば健康ついてくる

岡山県 江 口 有一朗

また少し老いた感じの兄に会う

鳥取市 植 田 一 京

踏み込まぬ線を守って仲がよい

寝屋川市 堀 江 光 子

その先は愚痴になるよと酒を注ぎ

岸和田市 三 輪 通 彦

口止めが洩れて不協和音つる

米子市 光 井 玲 子

その時は心の鬼をなだめよう

和歌山市 池 永 正 雄

縁台へ縮みのシャツで座りたい

枚方市 海老池 洋

いい人はまだかと母の文しきり

和歌山市 古久保 和 子

落書きが喋り出したら愉しから

奈良市 米 田 恭 昌

恩情を受けて人生やり直す

青森県 諏 訪 明 雄

血の絆逆手にとって駄々をこね

姫路市 北 条 てる代

サングラス掛けた夫が他人めく

岸和田市 田 中 文 時

公園に野宿している三輪車

弘前市 佐 治 千加子

大浴場羅漢の首が並んでる

鳥取市 前 田 一 枝

艶のない膝から猫も下りてゆく

大阪府 澤 田 和 重

お時間は取らせませんと待たされる

有田市 生 馬 芙美子

不整脈わたし気遣う音で打つ

岡山県 荻 野 鮫虎狼

晴れた日の檜山行は似合わない

倉吉市 野 口 節 子

果せない夢の続きを子に託す

和歌山県 西 口 忠 雄

婿選び娘の手の内を信じよう

和歌山市 山 根 めぐみ

ノーメイク胸に小さな不発弾

広島市 森 田 文

トライアスロン負けても価値のあるゴール

和歌山県 中 後 清 史

無味無色代読されるメッセージ

香川県 山 地 マツエ

金魚の糞で終る一生かも知れぬ

静岡県 藺 田 彥 杏

旅先の町で夕日を浴びている

岸和田市 井 齋 一 齋

やる気ないくせにあれこれ横車

大阪市 板 東 倫 子

炎天に血をたぎらせる祭好き

弘前市 中 山 雅 城

大仏を阿吽の息で守る門

米子市 小 塩 智加恵

旅先で家に留守電入れている

和歌山市 田 中 み ね

言いたい事あるなら直に言っつね

愛媛県 久保 良子  
糖尿食ああビフテキが食べたいな

大阪市 一本 勇太  
話し相手がほしい浅漬け茄子のいろ

鳥取県 乾 隆風  
安物の器に鯛が落ちつかず

今治市 塩路 よしみ  
お互いに傷つくことは口にせぬ

愛屋川市 江口 度  
病院の花屋鉢植え置いてない

岡山県 清水 悠貴女  
花咲くも散るも掟という訣れ

唐津市 久保 正剣  
屋根裏で少年夢を組み立てる

鳥取市 杉本 孝男  
迷惑をかけて涼しい顔で逃げ

羽曳野市 芦田 絢子  
意気投合肩組んで出る縄のれん

尼崎市 春城 武庫坊  
哲学を抱いて屋台で飲んでいる

川西市 松本 ただし  
奇麗ごと並べる鬼の歯が白い

唐津市 野田 旭恒  
恩讐を越え九条を使いわけ

河内長野市 植村 喜代  
思わせぶりの雲が通っていっただけ

唐津市 山口 ふさ子  
人間のエゴでペットも成人病

唐津市 江川 青琴  
喜んでばかりいられぬ高齢化

倉吉市 奥谷 弘朗  
次の椅子狙う早業見せられる

今治市 月原 宵明  
下駄箱の上が落ちつく四季の花

今治市 渡邊 伊津志  
あめんぼうはなればなれに日が暮れる

鳥取市 小谷 美ツ千  
口笛が上手に吹けて秋が澄む

青森市 漆戸 凡凡子  
雀追う爆音ホツとする捻り

愛屋川市 宮崎 菜月  
銀杏をはたき祭りのたたずまい

岡山県 池田 半仙  
夏草にフル回転の草刈機

兵庫県 玉田 三重  
風鈴に一句吊るして音色さく

弘前市 岡本 花匠  
千天の慈雨だいこんの種を蒔く

唐津市 浜本 ちよ  
朝顔のうなじの白さ妬ましい

倉吉市 最上 和枝  
十薬を陰干し酷暑やつと去り

出雲市 園山 かおる  
全開にならぬ蛇口が無念がる

和歌山市 玉置 当代  
関空の島へ渡ってきたとんぼ

米子市 林 瑞枝  
瓢箪は腰のくびれのいい美人

愛屋川市 岸野 あやめ  
友の計よ殊更紅き曼珠沙華

吹田市 栗谷 春子  
朝がおの花はすだれを上げて見る

和歌山市 宮口 克子  
居酒屋の德利リストライ聞き飽きる

鳥取県 林 露杖  
炎天下子連れで宗教売りにくる

広島県 中村 要  
ままならぬものにロケツト水不足

守口市 結城 君子  
 Gum 涸れて現われましたミス터리

唐津市 山門 タミ  
熱帯夜何でも来いと開けて寝る

流山市 神田 治  
グループ交際はイヤ人妻に囁かれ

東京都 清原 悦子  
子が果立つまで母親演じ切る

米子市 永井 三津子  
人らしく生きた証を刻みたい

豊中市 田中正坊  
巻寿司の端食べている大阪弁

香川県 新川 マサエ  
一番鶏鳴いているのにまだ迷い

大阪市 尾崎 黄紅  
満州の寒さ偲んで熱帯夜

和歌山市 福井 桂香

和歌山市 野々 圭子

午前三時本気に寝たいと焦ってる  
豆をむく子供はみんな出て行った  
逆立ちの向うに桃源郷ありや  
ゆるやかな坂を選んでいる自由  
道連れの十人十色 観て飽かず  
座布団のくぼみは我慢した証  
決断が早い女ってさみしいね  
泥臭さが身上 自由形でゆく  
生きていく泉がほしく童話読む  
父に似た男に逢えるまで待とう  
ふたりからひとりになっておもうこと  
助っ人が多く自分を見失う  
糸切れとマリオネットが叫び出す  
笛へすぐ踊る両手を持て余す  
妻恋いのまったなか鳴き止まぬ  
ポケットの中で握っている内緒  
キュッと鳴る茄子の輝き亡母遠し  
みえぬ目をかこむ家族の目がぬくい  
亡父の樹を育てて森のシンフォニー  
いい夢の見える枕をして眠る  
梅らっきよ漬かつて母の祭りかな  
背を伸ばせもつと伸ばせと野の仏  
かくれんぼ少しの間姿消す  
どの彩に変えても秋の絵に戻る  
それなりのジャンプ私も出来そうだ  
しあわせに背を向けて来たさらいあり

|      |       |    |
|------|-------|----|
| 羽曳野市 | 芦田    | 絢子 |
| 米子市  | 茂理    | 高代 |
| 倉敷市  | 小野    | 克枝 |
| 米子市  | 金山    | 夕子 |
| 堺市   | 山本    | 半銭 |
| 米子市  | 寺沢みど里 |    |
| 弘前市  | 肥後和香子 |    |
| 鳥取県  | 羽津川公乃 |    |
| 和歌山市 | 岩本美智子 |    |
| 鳥取市  | 小谷美ツ千 |    |
| 和歌山市 | 宮口    | 克子 |
| 吹田市  | 栗谷    | 春子 |
| 岡山県  | 矢内寿恵子 |    |
| 鳥取県  | 石谷美恵子 |    |
| 米子市  | 鹿島    | 蘭  |
| 茨木市  | 堀     | 良江 |
| 米子市  | 中井    | ゆき |
| 鳥取県  | さえきやえ |    |
| 岡山県  | 土居ひでの |    |
| 米子市  | 足立由美子 |    |
| 羽曳野市 | 吉川    | 寿美 |
| 富田林市 | 片岡智恵子 |    |
| 芦屋市  | 黒田    | 能子 |
| 和歌山県 | 小倉    | アサ |
| 米子市  | 木村富美子 |    |
| 西宮市  | 秋元    | てる |

綾とりのうまい夫婦になりはてる  
何度でも洗い直そう堪忍袋  
かぞえ歌 十でまぼろしまだ消えぬ  
ライバルは自分自身と闘志むく  
点数をかせぐ姿勢を低くして  
歯がゆらく心が揺れているように  
影だけがヒタヒタ私を追ってくる  
蝶とんぼ話しに來てよワンルーム  
逡巡の手紙ポストへ音もなく  
走ったら風の心が見えますか  
五十年私の中の木が育つ  
あれ以来爪に残っているショック  
あつけらかんの私を産んでくれた母  
しわくちやになっても笑顔美しい  
招待状欠席と出しすねている  
ときめきを忘れてからのグイエット  
幸せか不幸か長生きする手相  
輪の中にいて真実が見えてこぬ  
敬老日母がこんなに美しい  
ゆたかさに溜め息ばかりついている  
一一九に電話をしたい我が家計  
原爆の火の消ゆるなく秋暑し  
いじめなどよしなあんなに澄んだ空



投句について 1月号掲載分から選者が西出楓葉に交替  
します。投句は柳箋に3句を書き、川柳塔社事務所へ。

|      |       |
|------|-------|
| 西宮市  | 門谷たず子 |
| 米子市  | 石垣    |
| 弘前市  | 佐治千加子 |
| 京都市  | 山海    |
| 有田市  | 生馬美美子 |
| 和歌山市 | 玉置    |
| 枚方市  | 森本    |
| 愛媛県  | 久保    |
| 大阪市  | 板東    |
| 八尾市  | 村上ミツ子 |
| 米子市  | 光井    |
| 寝屋川市 | 平松かすみ |
| 和歌山市 | 田中    |
| 唐津市  | 浜本    |
| 堺市   | 高橋千万里 |
| 大阪市  | 津守    |
| 大阪市  | 本間満津子 |
| 鳥取市  | 植田    |
| 姫路市  | 丁坪サワ子 |
| 貝塚市  | 池田寿美子 |
| 有田市  | 松井かなめ |
| 姫路市  | 福島    |
| 宿毛市  | 岡村    |
|      | 千鳥    |



## 花 紀 行

小 倉 ア サ

秋風が匂いはじめると、誰からともなく旅のプランを持ち寄る女四人。行き先を巡り何度も喫茶店を梯子しながら決めるのが楽しみのひとつでもあり、また、笑いの渦の中、楽しみを倍加させる喜びでもあり、そんな旅どころが大好きです。

この四人、何らかの形で文芸に触れていて「大伴家持大賞」で見事、入選を果たす者、「歌会始」に挑戦する者、俳句の世界で光り輝いている者、その中によりよち混じっている私。よくもまあ、個性派四人がまああるくつないで来られたと、感心する事も時々あります。我が道を語ると決して妥協しない個性達だけど、何よりも八つの瞳を通してしっかり見つけ合ってきた賜でしょうか。血を分けた絆よりも深く胸を占めております。

年に一度の一泊か二泊の小さな旅ですが、人間に戻るひと時を秋風と共にゴ。今では

恒例になっていて、家族の協力あればこそ手を合わさずにはられません。

海の蒼さに包まれて、四人が横一列になり水平線を見つめるこの時は、言葉は要らぬ朱の刻でもあるのです。幸せに浸りながら、改めて横糸の貴さにも触れる大切なひと時でもあります。

人間に戻った笑顔で互いに紅の引き方を学びつつ、来年の旅行プランを持ち出している今こは、高知の夜。

花紀行の締め括りは尽きることない校歌と、そして次回への健康をひたすらに。

## 孫に追われて

### 川柳を追って

光 井 玲 子

男の子を二人、そして忘れた頃に娘を授かって、やっとの思いで嫁がせた時は還暦間近。そのあとの心の中にぽっかり空いた穴を埋めてくれたのは、川柳との出会いでした。前々から大先輩の千代先生からのお誘いを頑なに首を振りつけていた私ですが、ある日、近くの公民館で川柳教室が開かれる事を知り、恐る恐る参加したのでした。ベテランの方々、

また、柳友の皆さまに圧倒されながらも早速に兼題「猪」に何も分からないままの、ときどき、まごまごでした。

「猪のえとに似合わぬ氣の弱さ」で入選し、びつくりしたことが昨日のように思い出されます。それからと言うものの、毎月欠かさず教室に出席して先生方のご指導の下に床についてからもハツと五七五と指折って拙いながら今日までついて参りましたが、まだまだ壁にぶつかり、答を求めつづけております。

その間、嫁いだ娘は三人の桃太郎をつぎつぎと授かり、育児戦争に突入しまして私まで巻き込まれて、度々の東京滞在を余儀なくされ、句づくりとおさんどんと悪戦苦闘の日々が何年も続きました。その桃太郎たちもやっとなが離れてはつとしながらも、一抹の寂しさにそつと手を添えてくれたのも川柳。来年も「亥」の年、孫と作句とに駆かけつこのうちに千支一まわり、充実はしていたと思いがらも、子の成長と比べ私の句の歩みはなんと遅々たることだろうとしみじみ感じるこのごろですが、これからも若い人に混じって時には胸をときめかせて精いっぱい爽やかに川柳の的を追いながら、残り時間を生きたいと念じています。

今過ぎる時間にはつと迫りすぎる 玲子

— 水煙抄 —

# 秀句鑑賞

— 10月号から —

吉村 一風

豆腐屋が抜けた路地裏なつかしむ

藤森 小雅子

さらりとした句で好感が持てます。私も豆腐が好きで、飲む時は一番先に冷奴、悪酔いしないと誰言うとなく、よく言われています。

昔は、リンカラッパを吹いて路地裏まで来ました。なつかしいですね。「トーフー」と言う声がどこからか聞こえてくるようです。

岸の向こうの妻に見せたい目玉焼

永田 曉風

たまに料理しておられるようですね。上手な目玉焼を見て、向う岸で奥さんも安心しておられると思います。さあこれからは料理と共に健康づくりにお互い励みたいと思います。

この辺で泣けば私の勝ちになる

長浜 澄子

「この辺で泣けば」が印象的です。泣くのは女の武器とか、昔からよく言われています。

しかし、泣けば周囲の同情をもらい、何事もそこでとまってしまふような気がします。夫婦でも子供でも、また、どんな時でも前へ進めるためには、じっくり考え、出来るだけ泣かずに…。

お経のように暑いあついと言うてたが

高田 美代子

言葉通りの句で、お経のように暑いあついと言う表現が面白く、本当に今年の夏は炎天続きで雨も降らず、全国的に水涸れ。喉元過ぎれば何とやらで、水の有難味を嫌と言うほど知らされました。絶対に忘れぬようにします。

会社でも家でも尻を叩かれる

田辺 鹿太

人のいい貴方の姿が目には浮ぶようです。これも人生あれも人生、歳をとればよく頑固になります。それを思うと上手に泳ぐ事も楽しいくらしの秘訣だと思います。お互いに長生き出来る秘訣をみつけないと愚考いたします。使い途まだあるらしい呼びに来る

前 たちつ

なかなか職にありつけないこの頃、結構な事です。人間取り得があつて呼んでもらえる。それだけ貴方も立派な経験実績を持つておられる訳。呼んでくれた方にもよろしく。

出たまんま戻つて来ない福の神

森 安 夢之助

「出たまんま」で笑った句。貴方には福の神が来て出た訳ですが、まだ一度も福の神が来ず、唯ただ待っている人も多い事を忘れてないで下さい。人間チャンスは三回あるとか、私も福の神の来るのを首を長くして待つております。

来てみればやっぱり金のある話

大西 文次

いつもどこかに転がっている話の句。小さいか大きいかで、本当にお金がよくついています。事によりけりですが、「金の力借りるとどこか漏れてくる」思慮分別、お互いによく考えて大切にしたいと思います。

そろそろと憎まれ役の出番来る

谷口 義男

いつの時でもずばずば言う人が居られて、物事にけりがつくものです。貴方も立派なお人よし、誰かに憎まれるのを承知でそろそろとお出まし、辛い事です。よろしくお願い申し上げます。

夕立が少し豊かな夜にする

富坂 志重

いつからか聞き分けのよい夫と居る

小塩 智加恵

息

原 さよ子選



息ついでついで六十路にさしかかる  
期待されすぎて息抜くひまがない  
もう秋になつて風息  
わたしの溜息盗む窓の月  
息つぎをする場所がほしい八合目  
鼻息が荒い勝算あるらしい  
老優は息も間もよし泣かせ処  
ため息の本音は妻に知らさない  
洗濯機息切れしそつ子沢山  
息災の母の便りに胸開く  
悔いのない一日だった深呼吸  
ちちんぷい痛みを癒やす母の息  
息継ぎが下手でもぐつてばかりいる  
二人三脚息の乱れは悟らせず  
面接の息ととのえるドアの外  
やつと嫁に息を合せるコツ覚え  
息詰まる思いが続く一点差  
友だちと息が合つてゐる縄のれん  
うつとりと美女のため息聞いている  
息抜きに診療室へ行く仮病  
息抜きの一泊妻が従いて来る  
値段見て思わす息を飲むタイヤ

希久子 日枝子 芳水 虹汀 洛酔 英千子 高夫 タミ 時弘 宵草 シマ子 二南 狸村 圭一郎 正雄 可住 通彦

海女の息さざえあわびをつかんでる  
息づかいまでも聴える糸電話  
息詰まる顔顔顔の受験場  
お喋りへ一息入れた虹の橋  
やすらかな寝息がそばにある安堵  
あしたへの希望持たせる子の寝息  
溜息をついて女はドラマめき  
息荒く男に曲げぬ意地がある  
鼻息の荒い女の泣きばくろ  
許す気になれば息まで軽なり  
虫の息まだ責める気の遺言書  
大任を果して父は太い息  
儲かまつかばち息をしとります  
ゴツアン荒い息です勝ち力士  
縄のれん男の溜息聞いてやる

實 艶子 愛論 鉄治 富美子 俊子 大柏 克枝 遊峰 白光子 旭恒 勇太 美代子 杜的 明水 ちかし 隆 正子 四郎 保州 重人

嘆

仁部四郎選



不景気を税務署員に嘆かれる  
嘆き節屋台の酒が加勢する  
四捨五入の辺りにある嘆き  
エゴ一つ流せば嘆き軽くなる  
嘆くこと無くなつてから怖くなる  
嘆くより笑い飛ばして運が向き  
嘆くまい時の流れを我慢する  
嘆くのは止そう明日の虹を織る  
メルヘンの嘆きを知らぬ空の青  
村の嘆き沈めたタムが乾ききる  
開発の噂を聞いた森の精  
野の花は嘆きを知らぬ赤い色  
嘆かせた同じ理由で子を嘆く  
乱世を嘆いて孫にうつまれる  
長男の嘆きは最初に叱られる  
嘆くまい嫁をもらった子との距離  
逆縁を嘆く絆の万灯会  
千の手で千の嘆きを聞く仏  
義務という鎖に登校拒否が増え  
尻尾振り嘆きは言わぬ宮仕え  
嘆きの壁は常に火種を持つている  
白骨が道標となるニューギニア

満秋 美代子 高栄 芳郎 一壺 多賀子 杜的 彩子 重人 洛酔 舞鳥影 倫子 愛論 黎之助 サワ子 高夫 凡々子 雄々 富喜子 幸夫

忠魂碑母の嘆きはまだ消えぬ  
孝行の文字に出遇った嘆願書  
過疎嘆く議員の子らは都市に住む  
若い子はタメと二十歳の子が嘆く  
三流の政治を嘆く物価高  
米びつの中でも嘆き合っている  
私が笑うと嘆く人がいる

竹光の嘆きが鞘を洩れてくる  
友逝きぬ約束みんな反古にして  
盆栽を枯らした父の動かぬ背  
嘆いてもやはりお米を研いでいる  
少子化をきつと未来は嘆くだろ  
為政者に嘆き疲れた虫の声  
渇水を憂い雨乞い夏祭り  
豊作をくれる暑さを嘆くまい

引き算を嘆いてばかりいる老後  
背かれた嘆きが重い土踏ます  
調査調査で届かぬ支援嘆いてる  
核アピールなんべんしてもまだ作る  
タイ米がボンボン菓子になる嘆き

世の移り嘆く質屋の御下賜品  
玉砕の風化を嘆く草の虫  
一言の助言を今にして嘆き

新聞を読んで嘆いて愛国者

あずま

明水

鉄治

正子

武史

日枝子

螢

保州

あやめ

晴子

ミツ子

寿恵子

正剣

旭恒

東雲

俊路

ただし

たもつ

大柏

めぐみ

俊子

久仁於

松下たつみ

いびつ

小寺花峯選



青りんご少しいびつのままでいい  
未成りでいびつのままで生きる瓜  
真っ直ぐをいびつの箱に押し込める  
このつばは世界に一つのいびつです  
丸を画く何度画いてもいびつです  
両親の遺伝がなせるいびつ顔  
賞められたいいびつな壺は焼き損ね  
桐箱が付いていびつが誉められる  
ピサの斜塔瞻の角度を変えて見る  
いびつには成り切れず居る影法師  
ある野心いびつな風も受けとめる  
一歩さがっていびつな脚を立て直す  
中立がいびつな火種抱いている  
いびつな名器に秘める歴史悲話  
まんまるで生れいびつな子に育ち  
どの子にもいびつにならぬ蓋を置き  
負けそうになるといびつな鼻の穴  
笑い過ぎ顔はいびつな寄席帰り  
手作りのいびつな夜のフロログ  
黄昏はいびつな夜のフロログ  
いびつな絵をまともにかいてピカソとか  
天の邪鬼いびつの心聞いてやる

富喜子  
めぐみ  
一壺  
とよ子  
智加恵  
悦男  
晋  
芳郎  
ツネ  
洛醉  
重人  
夕子  
英千子  
克治  
虹汀  
久仁於  
しげお  
一齋  
さち子  
里兆  
雅城  
たもつ

又一人逝つていびつになるかごめ  
学校と塾にいびつな橋があり  
手術後の身体いびつを持ち歩く  
罪一いついびつな刻に居るひとり  
歳月がいびつな石を丸くする  
肩書がついていびつな顔になる  
陶器展いびつな茶碗喋りだす  
景気低迷いびつな円を描きつづけ  
原型をもう留めない厚化粧  
炎天のいびつなりンゴ無視される  
不自由な足で踏ん張る老母の日々  
偏差値がいびつに比例して困る  
無位無冠いびつな鶴を折っている  
蟻の死がいびつな白い砂糖壺  
別姓でいびつに回る夫婦独楽

あずま  
狸村  
希久子  
とし子  
和重  
四郎  
富美子

# 初步教室

題 — 雲

吉岡美房

時期的に見てきのこ雲、水不足、いわし雲  
および雲行きなどに句が片寄ったため、出来  
ただけ違つた着想の句をとるようになした  
が、苦勞しました。それと作者の存在が見え  
ない上滑りの句の多かつたのは残念でした。  
第一着想は捨てるくらいは勇氣をもつてもら  
つて、作者の心に見える句を期待しています。  
それでは添削句から発表します。

高らかに竿売りの声雲動く

フク子

(竿売りの声爽やかに雲動く)

白い雲Tシャツ干す間は動かない

瑠美子

(白いシャツ干すペランダに白い雲)

雨雲も水瓶滋賀は避けて過ぎ

太一郎

(水瓶の琵琶湖雨雲避けて行き)

雨の雲讃岐の国を忘れてる

宅

(雨雲に早の讃岐忘れられ)

雲遠く水瓶枯れていく炎暑

あすま

(雨雲の機嫌水瓶避けて行き)

入道雲を待ち焦がれてる水不足 嗣静子

(水不足雨になる雲待ちこがれ)

雨雲さんゆっくりしてはいかがです 俊一

(雨雲に勝手な願い届かない)

夏雲に雨を乞うてる水不足 武春

(雨雲は遠く雷鳴つただけ)

雨雲をいじめた夏の高気圧 志華子

(雨雲の気まま降つたら多すぎる)

雨雲のただ待ちこがれ待ち焦がれ 幸子

(雨雲をひたすら待つて田が枯れる)

きのこ雲消せない過去をひきずらせ 友子

(きのこ雲消してはならぬ過去を持つ)

人間が人を危めたキノコ雲 黎之助

(人間が悪魔になれるきのこ雲)

八月のあの日の雲を忘れない 絢子

(きのこ雲忘れてならぬ忌がめぐる)

衣食住足りて平和ないわし雲 八重子

(衣食住足りて感謝のいわし雲)

水たまり雲の上ゆく赤トンボ 君江

(雲写す水面かすめてとぶ蜻蛉)

投げキッスワクワクさせるいわし雲 三重子

(送られて見送る空にいわし雲)

たなびける雲の彼方に遠花火 美寿子

(うろこ雲運動会の昼花火)

鯛雲やと食欲湧いてきた 仲弘子

(ダイエット決意にぶらす鯛雲)

白い雲うれしい知らせ青い空 トミエ

(いい知らせ届けてくれたいわし雲)

青空をひとり占めして飛行雲 勝巳

(秋晴れをひとり占めする飛行雲)

雲間から明月待つ子等に邪魔な雲 一乗

(仲秋の月待つ子等に邪魔な雲)

腕組みの中に雲行き変えて見る 三重

(腕組みをして雲行きを読んでいる)

雲行きが悪いと子等は座をはすす 侑里

(雲行きの悪さを子等に読まれた)

雲行きのあやしくなった黙秘権 一壺

(雲行きのあやしい妻へ黙秘権)

雲行きが悪くなれば子はおらず 一典

(雲行きを見てその辺に子は居らず)

雲行きを見ながら静かに茶を注ぐ 行子

(雲行きを変える会議へお茶を出す)

雲ゆきが変れば父が肌を脱ぐ 忠男

(雲ゆきが変つた父の応援歌)

雲つかむような話に縁がない 三千子

(雲つかむような話に騙される)

茜雲悟空とびのり蓬来山 日出子

(蓬来山へ悟空の乗った茜雲)

雲見上げ孫がドーナツ所望する 幸雄

(湧く雲の子らには菓子に見えららし)

過ぐる雲喜怒哀楽のまま生きて 義子

(夏雲は喜怒哀楽の貌を持つ)

たくましく生きているなと思ふ雲 辰男

(たくましく生きねばならぬ雲の峰)

雲見てて面白いよと亡姑が言う (尙) 正子

(亡き人の面影追えば雲の峰)

ゆく末は紫雲の来迎弥陀のひざ フク子

(御来迎きつと紫雲に乗るわたし)

流れ雲亡父母を偲んで手を合わす 文子

(亡き父母を偲べば浮ぶいなし雲)

仏様いづく雲形慈悲に満ち 方子

(雲形の仏包めば慈悲だらう)

一破乱有るかも知れぬ黒い雲 義男

(次々に黒い雲湧く永田町)

期待せしキリマンジャロに憎き雲 克治

(期待したキリマンジャロを包む雲)

満月が見えかくれて雲いきる 孝原

(満月に雲の遊んで見えかくれ)

カップルに月が恥らい雲隠れ りつえ

(大胆な二人に月も雲がくれ)

寝たきりの窓に雲の貌かたち とし子

(寝たきりの窓なくさめる雲の貌)

雲見つめめざすはプロの子報官 (團) 弘子

(気まぐれな雲に手古摺る子報官)

雲行きがちよと気になる露天商 ますみ

(風まかせ雲行き次第露天商)

雲だけは私のひみつ知っている ミツ子

(雲に皆夏の秘密を知られてた)

一番機雲なき空を突進す (尙) 静子

(雲一つなき閑空の一番機)

むら雲は乙女の恋に影をさす ツネ

(順調な恋に試練の雲かかる)

逆らつて何処へ行くのか千切れ雲 よしみ

(わたしかも知れぬ気ままな千切れ雲)

いたずら雲月を出したり隠したり ミツオ

(満月も雲の都合で見え隠れ)

雲覆うバス停母が傘と待つ 美津子

(雲行きを眺めて母の迎え傘)

快適な暮しに感謝の西雲 ふゆ子

(一日の無事を祈った西雲)

長年の雲見る勘で綱を解き 隆

(出漁へ雲見る勘は狂わない)

閑静な所で雲がよくも見え 悦子

(閑居して晴耕雨読雲まかせ)

雲間より月出て歩く弾み倍 姫女

(雲間から月出て弾むもの貰う)

雲の切れ間月見の盃の月を飲む 彩子

(盃の月を隠した流れ雲)

### 表現・着想ともに立派な句

孫悟空乗っているよな雲走る タミ

ちっぽけな今日の善意に西雲 志重

雨乞いの空を引き裂く飛行雲 高栄

ちぎれ雲僕には僕の道がある しのぶ

雲切れる明日に望みを賭けている 碧

地下街を出れば真夏の雲が湧く 半畳

雲流れ出合いと別れ繰り返す 絢子

父母恋し故郷へつづく西雲 芳水

浮雲に乗ってあなたを追いかける 美羽

笑おうと泣こうと気まま千切れ雲 笑

母のことばかりを思ふ流れ雲 艶子

草に寝てわたしひとりの雲を見る キヨエ

あかね雲わたしの胸を朱に染める めぐみ

綿菓子子の郷愁そそる白い雲 章子

七変化雲は魔術師八変化 克治

きのこ雲昨日のような五十年 ふさ子

玉音の耳底にあり雲の峰 さち子

浮雲に五十回忌の機影見る 幸夫

ビルを這う雨雲迫る夏期講座 幸枝

内定の通知我が家の雲が晴れ 黎之助

焼夷弾もつ落ちません飛行雲 君枝

かくや姫五色の雲を身に纏う 郁子

私の句

何故雲が浮くのか孫に科学され

かたつむり角振り上げし雲の峰



題「鏡」 11月15日締切り(1月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(47)

橘高薫風

川柳について

父の子として

河盛 純子

私は川柳を作る才がありませんので、川柳を作りません。作りはいたしません。が川柳とはどんなものかということ位は臆気ながらわかって居ります。曾て私の父が短詩或は新短歌の名称で川柳革新に没頭いたしましたため従来の川柳家たちから異端者呼ばわりをされていた事がありますが、今日それ等の句は立派に川柳として専門家の間に迎えられるようになっていきます。然るに、或る教科書を見ますと、川柳を説くことが単に古川柳のみにとどまり、其後の経路について何等の知識も与えていません。のみならず、川柳家の最も忌避する狂句なども時には例句として混合羅列しているのを見ますと、今も猶三十年計画のもとに、新川柳社会進出のために家族の衣食を削り、自分の作句熱さえも犠牲に供して奮闘努力を続けている父の子として、川柳普及のあまりにも遅々としているありさまを慨嘆せずにはいられません。

私は今、事新しく川柳の起源を述べようとするではありません。伝統的な殻を破って自己の心境を詠うようになった近代川柳の姿に一瞥を投じて頂きたい抱負を以て淀みながらも語ろうと思っています。

古川柳の真随この項は概略のみ薫風記この項では古句三句を例に挙げ、『川柳雑誌』に書かれた路郎の評釈を紹介し、古句の多くは客観的描写によつて、人情の機微を穿ち、当時の風俗習慣を披瀝するの、滑稽、諷刺、洒脱を忘れなかったことを述べる。

模倣時代より改革への曙光

明治年間の作句者は此等の古句を典型として句作三昧に耽っていました。所謂模倣時代でありましたが、大正に移ってから句風は改革を加えられようとする曙光が見えて来ました。穿ち味は軽妙に、滑稽、諷刺は漸く原色を脱して間色の淡白さに変ろうとする傾向がありました。或は穿ちを除外した純感じの句や純写生句さえ見るようになりました。

大仏の鐘杉をぬけ杉をぬけ

五葉

蟬の声右も左も石畳  
などの句は、

松原の茶屋は煙が景になり

の古句に比べると、同じく自然をあつたてているではありませんが、前者は感じの叙景句であり、後者は作句者の理智にうったえた穿ちの句であります。叙景川柳はよほど気をつけなければ月並俳句となり、純写生句はややもすると「そうですか川柳」となる惧れがあるとは父は言っております。

異端視された新傾向

果太鼓今や鰻を裂かんとす

日車

髭刺ると言えは事々しき水よ

〃

信濃路にて

うれしくも町の半鐘が見ゆるかな 路郎

宵は酒浅間の煙今朝見たり

〃

妻や待たん靴音を高めんか

〃

素肌素足眼が熱うなる桜

〃

遅桜汽車の音ばかりきこゆ

〃

簾節に男のちからからる、

〃

右に掲げた句は大正四一六年の頃尖端を切っていた月刊誌『雪』に発表された句であります。父は既に明治四十二年頃より句の革新を志し、柳誌『轍』『矢車』によつて句の向上を計ろうと努めていました。勿論この当時でも多くの作家は依然として古句の足跡を辿

つていたのでありますが、此等の二三の人々によつて投げられた覚醒の石は、大きな波紋を描いて柳界へ響いて行きました。異端者扱いをされたのはこの『雪』時代が最も激しかったそうですが、文壇殊に俳壇の先覚者からは驚異の眼を以て迎えられていたそうです。『雪』が廃刊になってから『土団子』を出し、続いて『後の葉柳』を発刊しましたが号数僅かにして倒れました。

#### 川柳の社会進出

此時父は考えました。川柳の文芸的地位さえ疑われている今日に、柳壇的に川柳の革新を叫ぶのみでは到底その主義主張を徹底させることが出来ない。それには先ず第一に川柳の真髓を広く社会に知らしめる事であると、父は日夜東奔西走して、教育者に、操觚者に或は青年団に今日の誤れる川柳観を説き、余暇を作つては、本島は申すに及ばず、北海道、四国、九州までも足を延して其使命を果していました。私達兄弟は殆んど父と顔を合はすことのない程忙しい体でありました。今、住吉区平野西之町へ川柳雑誌の事務所を置いて発行を続けている『川柳雑誌』は川柳の社会進出と初心者指導の目的で大正十三年に阪神の鳴尾からその創刊号を出したものであります。その頃、私は鳴尾の小学校に通つてい

ましたが私の家では朝から晩まで毎日川柳家の方が訪ねて来られ泊つて行く人さえ珍らしくありませんでした。『川柳雑誌』の発刊と同時に父は尖端的な筆先をおさめて『週刊朝日』『キング』『講談倶楽部』などの大衆向きの誌上へも依頼されるがままに句を送つて来ました。それは従来父としては心苦しい点が少なくなかつたようではありますが、ひとたび意を決した第一計画の完成を急ぐためには一時忍ばねばならぬ事であつたと思われ

#### 新川柳の句境

川柳はいつまでも遊戲であつてはいけな。少くとも自己の生活を基準としなければ嘘であると考えるようになりましてから、つとめて自己の心境を詠むようになりました。川柳はもう社会のあらさがしではなくなつて来たのです。滑稽、諷刺、皮肉は川柳が必ずしも具備せねばならない条件ではなくなつて来たのです。勢い女学生には女学生の川柳が生れ少年少女には童心の現れた句を見るようになりました。次に『川柳雑誌』から父やその他の人々の句を抜萃して句風的一端を示すことにいたします。これらの句は現代の川柳として最も新しい傾向のものであります。君見たまゝえ渡菰草が伸びている 路郎

くびきりにまがうかたなき父の御名 路郎

大正天皇を悼み奉る

草莽の臣かなしみの炭をつぐ

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

ふと眼をやれば煙突に煙なし

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

秋さらり銀のふすまのもののおもい

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ

秋風にすゝきもわれもさからわす 緑雨

冬の抒情詩のボブラやボブラ

雲よ散れちれうちも隣も赤ん坊 山雨楼

飛行機は流れるせなの子は達者 葭乃

への字くの字の字の子等の中へ寝る

人と鰯鰯は油したたれり 平八

貨車の牛神戸をさして急ぐなり 新水

瀬戸火鉢想いはめぐりめぐり消え 雅幽

蛙ふくれるな埋めてかえずよ 石竹

以上は川柳変遷の概略であります。一日も早く父が主張する新しい川柳の境地を、

世上一般の人々に味わつて頂きたいと思つて

おります。(昭和七年二月稿)

河盛純子さんは路郎先生の長女。この原稿

は学校の教科書で川柳に接したとき、たまた

ま父が川柳人であるところから川柳について

所見を求められ書かれたものである。



毎月25日締切・30句以内厳守  
編集部

打吹川柳会 奥谷 弘朗報

豪快に笑い押売り追っ払う  
野の花も薔薇に劣らぬ自負がある  
咲き誇る花にも限りある命  
ゆく秋を銀杏は踊りながら散る  
思い切り永田舞台に踊りやんせ  
あの橋を渡る勇気が消えたまま  
母の日の母に捧げる五七五  
綿あめの上にさくらが散っている  
無限大の欲 神木へ吊ってみる  
散りざわの花と余生の話する

川柳塔みちのく(前月分) 小寺 花峯報

かみさんを水着の柄で探す浜  
冷房のない三流へ靴を履く  
終電車仮面ポリと音をたて  
寝転んだ水着で海が火傷する  
茶がわりに出せる夏の缶ビール  
小さめの水着が誇る両乳房  
飲み放題遠慮しがちの七杯目

和枝 よしえ 節子 玲子 幸子 孝恵 とみお 雄々 弘朗 螢 雅城 井蛙 ツネ 花峯 生恵子 一光 妙子

クーラーの下で動かぬ石となる  
煩惱の疼きを冷やすかき氷  
枝豆にビールのような間柄  
名水で冷やしたビールの喉の鳴り  
明日という行き先になる終電車  
冷房車降りて故郷のうまい風  
仏壇が追っつきそうな終電車  
終電車赤ちようちゃんも乗ってくる  
クーラーに負けぬ緑の風に遭う  
ほどのよい酒こ回った終電車  
無防備な脚を広げる終電車  
年寄りものぞきに來てる水着ショー

川柳東大阪 森下 愛論報

牙のある鬼は過労死などしない  
お多福の妻が時々牙をむく  
帯きりり結んで牙を寄せ付けず  
ブレイキを確かめて押す車椅子  
ブレイキの音にも慣れて坂の家  
ブレイキを妻が握っている安堵  
大胆に借りるお金で苦勞する  
八月の海は老人から借りる  
敗北の背に友情の借りが出來  
毒舌の刃の借りは返さねば  
湯上りの浴衣に旨い妻の酌  
ダイエットまた考えている浴衣  
いつもより空は水色浴衣映え  
夜市での形見の浴衣母に似る  
灼熱の肌に吹き出す白い汗

五楽庵 花匠 和香子 明雄 黙人 彩人 蛙痴郎 順三 善保 茂作 一花 甲吉 文秋 晋吾 東雲 孤舟 潔 たもつ 真柳 元紀 愛論 章久 太一 度 恒明 隆 勝美

白い目で見られたからと逆恨み  
白扇を構えて武士の顔になる  
自由化へ不安リンゴの白い花

岩美川柳会 羽津川公乃報

想いだけ深く実らぬ恋だった  
低血圧はちばちば起きるつらい朝  
手の内をばちばち見せておどそうか  
午後六時はちばちば帰る夫を待つ  
手伝いもせずにはちばちせよと言  
帰省した孫にはちばち疲れたす  
ばちばちにやってますかと腹探る  
霊柩車をばちばち恋しがりだした  
リハビリの灯はちばち見えてきた  
人並みにばちばち盆の掃除する  
ばちばちと坂は越えよう明日がある  
知恵袋ばちばち底をついて來た  
墓地買つてばちばち遺書の墨をする  
ばちばちと親孝行がしたくなる  
ばちばちと貯めたお金が減る怖さ  
老いの坂ばちばち自我の帆をおろす  
佳い眺めばちばち行こう八十の坂

川柳塔きやらばく 政岡日枝子報

鶏卵を食べない神話の町がある  
追憶はひとりブランコ漕いでいる  
逢う人を福神と言う人に逢う  
富士の山雲間の出逢い手を合わせ  
これも御縁出逢う乙女がいとしくて

頂留子 湖風 信治 孝原 嘉津江 睦子 隆風 照女 きみ子 はるお 孝男 螢 一京 芳江 忠良 公乃 大漁 美恵子 喜与志 八重子 瑞枝 寿々子 のり子 朗子

浪花の色に出逢う小春は熱くなる  
あの本に出逢って海が風いでくる  
父母の出逢えるのかも森の奥  
つかの間の出逢いでもいい逢いたいな  
牛の眸とあう売られていく朝  
月参り仁王と出逢う楽しみが  
仏縁で出逢うはずですあの方に  
産湯から出逢いがであい生んでゆく  
鬼にでも出逢いたくなる長い道  
白百合のような出逢いに甦る  
道標に出逢い森から抜けだせた  
出逢いからもれる笑いの数々を  
出逢ったからお嫁さんに貰った  
息つめて明日の出逢いを待っている  
出逢っても神だと言わぬから困る  
ふじの花くぐって出逢う過去のひと  
かりそめの出逢い雀の知らぬこと  
表と裏の鏡出逢うとおそろしい  
何となく頭を下げるひとに逢う  
あと何度逢えよう心こめて逢う

# 川柳クラブわたの花

片上

英一報

夕子 玲子 千春 高代 日枝子 保子 紫布 恵子 ゆき ふみ 花子 亜弥 荒介 春枝 富美子 てい子 晶子 天雀 千代

シマ子 美津留 一風 隆 弘直 剛治 英一

ぶつとんと会話途切れてぶどう食べ  
均等に切れて西瓜を盆に出す  
切ったはず下で連なる刻み葱  
一時二時読み切る本と夜を明かし  
スイッチを切り切らした孫の食事中  
途中から歩幅が狂う西瓜割り  
切れ味がよすぎて指まで切る恐さ  
ご先祖へ丹精こめたダリアです  
長距離へ切りたくないのに切る電話  
地図見れば遠いふる里奥のさき  
役人は規制の壁にあぐらかく  
ビールでも飲もかも夫婦仲が良い  
星空に愛をささやく大ジョッキ  
大ジョッキ重ねた友も便り来ず  
輝やいた目に囲まれて切るメロン

# 川柳塔わかやま吟社 宮口

克子報

春子 幸枝 君江 トシエ 道子 明子 実希子 雅恵 朝子 初子 龍 しのぶ ますみ 友甫 鬼遊 めぐみ 精子 紀久子 克子 ダン吉 武春 輝子 寿子 二南 柳宏子 保州 高夫

野暮用でない鏡が見抜いてる  
二の矢三の矢男を軽いものにする  
だし抜けに矢が飛んでくる恋敵  
拔擢の椅子に吹き矢がとんでくる  
反乱の矢は味方から出る謀反  
折れた矢を握って長い坂辿る  
靴下も破れ女もよく泣いた  
矢面に立つ父の樹に守られる  
愛の矢が彼の胸まで届かない  
一本の矢から洩れていた秘密  
すでに矢を放ったあとで知恵が出る  
出掛けようと思う矢先に客が来る  
炊事当番パパ会社から矢のように  
破られるための記録と軽く言う

# 佳句地十選 (10月号から)

谷口次男

結び目を手抜きはしない母の糸  
しんがりの汗の辛さを忘れない  
横文字のカルテに伏せてあるいのち  
歯ごたえが満足そうな音で鳴る  
さよならが言えず海鳴り聞いている  
もひとつの顔が日記にじみ出る  
足跡は残さぬように金儲け  
こっそりと近道ねらうかたつむり  
落書きをやめるとヌード貼りだした  
裏表つなぎ合せて夢を追う

佐代子 萬的 豊太 鉄治 呑天 紀美女 晶子 千寿子 信子 稚代 好笑 年子 三男 十四郎 瀧小 清吉 公乃 勇次郎 信博 とみお 静生 保子 度

破られる宿命背負う新記録  
ライバルを破って男泣きをする  
約束破る訳を知ってる花時計

### 三幸川柳教室

三宅

保州報

しがらみへ赤い模様を入れ添える

移り気の見本にされる空模様

友禅に描いてみたい夕茜

地模様を喜怒哀楽で染め上げる

一幅の模様の中にいる安堵

辻が花枯れた心に夢くれる

あなたとの恋の絵模様ならピカソ

愛別離輪廻で綴る絵曼陀羅

主義主張二の次にして泳ぎ抜く

折紙の金魚も泳ぐ藤越し

絵の中に君と泳いだ夏がある

泳がないあなたに投げる浮き袋

妻の掌に泳ぎ疲れた戦士たち

泳がせておこう私の良い噂

先頭で抜き手切つてた白日夢

奔放に泳いでみたい影法師

生きているのが楽しいリンゴ丸かじり

許す気にさせたメロンの贈り主

貴方には真ん中取つておく西瓜

思い切り怒つたらしい柘榴の実

完熟の果実不埒な夢を見る

暫くは会話をやめて皿の柁柁

文句言いながら終着近くなる

正博  
和重  
英子

芙美子

正雄

美智子

信子

昭枝

圭子

満洲子

初子

義男

美子

靖子

当代

朱夏

百合子

茜

章子

親路

さち子

町子

和子

公子

めぐみ

千秀

三千子

たんまりと殺し文句をためて待つ  
文句無し勝てる相手に虚をつかれ  
木簡の謎の文句にあるロマン  
文句なしの嫁と世間へ褒めておく  
墓石に花と文句をあげてくる  
エンドレスステープのような妻の愚痴

### 岸和田川柳会

田中

CMのおかめにつられて買う納豆

政策を捨てて政權握る党

バスの旅マイク握つて歌手気分

鍵握る犯人像へする推理

ひと握りの愛をいただく赤い羽根

慰安婦と言つ過去握る放されぬ

社の秘密ひとり握つた女秘書

握り返す手が温かいボランテア

抜け穴へちよびり心揺れている

抜け穴は無いかと芝居打つてみる

抜け穴を探しにかかる負け戦

ライバルに抜け穴だけは伏せておく

抜け穴で肩身が狭い思いする

よく見ると抜け穴だらけの俗世間

抜け穴を知つていつから慌てない

勲章を貰い値打に箔をつつけ

憲法の値打九条だと思つ

人事課の値踏み正しい初任給

納品をせかせが嬉しい好景気

納品へ家族総出の小企業

円高で納品単価下げられる

かなめ  
高夫  
鉄治  
みね

桂香

保州

文時報

富志子

朝一

昭二

けい子

ひで

蛙城

一弥

浪速子

美恵子

洋

呂万

さよ子

二南

勝晴

狸村

甚一

ダン吉

白光子

京

一齋

通彦

納品の中味いたわる丁寧さ  
川柳岩出  
小倉アサ報

匿名で書く私と私が背のびする

水不足晴れた空にも雲捜す

なじませた味は秘伝という宝

この橋をわたるとなじむ里の彩

路地裏のなじみ入道雲に足が向く

ひと雨を呼ぶ入道雲が仁王立ち

いさぎよく匿名する勇氣はし

おなじみの店お馴染みの椅子が待つ

おなじみの顔が揃えば虎談義

すがすがし朝の一筋飛行雲

不況風馴染の客に支えられ

匿名のハガキが語る悩みごと

雲晴れて出足が軽い外出日

伸び切ったゴムになじんで来て夫婦

ちぎれ雲風の流れに逆らわず

馴染めないもの一つに外来語

ロボットになじむ男は負けている

匿名にするときりぎりまで話す

### 南大阪川柳会

金井 文秋報

翳のある美女背景に謎をもつ

わんぱくが描くと美人のお母さん

這入るやすい家やと空果知つて

間違つても越えてはならぬ壁がある

わんぱくがべそをかいてる母の留守

社は安泰バックの睨み効いている

東雲  
幸子  
綾子  
春子  
保子  
ふみえ  
悦男  
神一郎  
正義  
重徳  
正直  
千鶴子  
英子  
アサ  
愛子  
和子  
忠雄  
与呂志

楓楽

重人

柳宏子

章久

淳子

文秋

裸婦の絵の前でうとうと夢をみる  
背景はどつあれ兵は動かされ

腕白も注射となるとかしこまり  
人がひと裁く間違ひだつてある

水一ぱい飲んでわんぱくもつけない  
間違つた出逢ひを感謝する二人

裸婦像の指先あたりにある羞恥  
裸婦像に主人が眼鏡かけなおし

背景の動き筋書読めてくる  
朱を入れる責任の重き手が震え

やすやすと生きてゐるのが不思議です  
やすやすとつかんだ金は身につかず

背景が素人芸を引き立てる  
野仏を背景に撮るハイキング

背景に選挙の匂する会議  
背景に見えない敵を意識する

返済はやすやす行かぬ資金繰り  
ひと言も喋らず間違ひ電話切れ

抽象の裸婦説明がむづかしい  
やすやすと酒の上での約束で

母居ます故里の山背景に  
遠州の庭背景が生きてゐる

やすやすと握つた金がすぐ逃げる  
やすやすと

### 京都塔の会

松川

杜的報

黙々とこころの旅はまだつづく  
黙々と明日着る浴衣縫う夜なべ

黙々と夜行軍した暗い過去  
黙々と一杯の飯食べ終る

百合子  
波留吉  
薫

智子

白洋

萬的

勝美

頂留子

真砂

寿美

秋子

悟郎

東雲

信博

二南

志華子

三男

シメ子

柳伸

智久

庸佑

千梢

トミ子

公一

久峰

黙々と歩む背中についてゆく  
黙々と運命線のまま走る

山越えて谷の深さも知りました  
ひとり来て不安が募る谷になる

愛情の谷間で苦い酒を飲む  
なんや知らん怖い病気が増えてきた

危険球ときどき妻が投げてくる  
保育園訪へる唯今昼寝中

電気代怖くなるよなクラー漬  
昼寝して夢見る美女の膝枕

医者通ひ母の昼寝が長くなる  
何よりも人間怖いかも知れぬ

物が満ち心の餓えが怖くなる  
新築の怖さへ医者不勉強

怖いものありますかいなこの年で  
昼寝とめるとガンバ大阪負けている

金婚ヘトータルすればいい月日  
顔の汗ふきふき今日も医者通ひ

台風にお願ひ雨だけ下さいな  
ねむるのが下手で盗み酒をする

花しようぶ思ひ出だけをあふれさせ  
川柳塔鹿野みか月

夜鳴きする野犬の群がいて困る  
涼しさの演出に困つてばかり

困つたと言へば私の負けになる  
こまり者ひとりを識っている内助

ごみ捨てる場所に困っている地球  
横向いて返事に困る彼岸花

土橋

葉子

真柳

紫女

巨詩

求芽

正坊

杜的

栄

圭坊

芳子

庸佑

英一

ただし

福子

武庫坊

てる

笑女

達子

年代

水客

螢報

保子

富久江

房子

風人

喜与志

三千代

困つたらちよつと逆立ちしてみよう  
八起きめの爪を信じてぶらさがる

災害の爪跡癒えず 村を去る  
胎動に母へ目覚める赤い爪

爪役の爪を死ぬまで研いでいる  
終戦五十年わが家の爪跡は消えぬ

稲の穂の重さに汗も苦も忘れ  
名月にまた会うように穂が揃つ

鶏頭のいのちは燃える穂先まで  
火の粉払い母は受け身で子を守る

釜たてる朝晴れやかに水を汲む  
流れの淵に咲いた野菊はむらさきに

人生を変える決断踏み切れず  
人生に悔いはないよとコップ酒

人生を透かして見れば金と欲  
人生の嵐に負けず下り坂

人生のラストはせめて花で埋め  
闇王といわれた人も院号に

闇雲に走つた頃が花だった  
暗闇でねずみが爪を磨いている

不夜城は闇を歩いた俺の夢  
けんかしてくやしい爪を噛んでいる

燃えつきた夏の日焼けの跡がある  
川柳塔唐津支部

久保

正剣報

宣子

智恵子

かつ乃

美恵子

きみ子

茂

はるお

八重子

睦子

陸風

幸枝

汲香

明美

実満

節子

百合子

久枝

くに子

武子

弘子

富恵

孔美子

香菜

螢

ふさ子

紀一

喜久亭

ヒナ誕生子供のようにはしゃぐ夫  
 万が一ということもあり宝くじ  
 傷は浅いぞマジナイで治った児  
 野良猫に庭の木蔭を貸してやり  
 穢りよし音高らかにコンバイン  
 蚊遣り火のしっぽ象書のように舞い  
 呼ばれても行くのは止そう亡父の傍  
 息つめて貼る金箔の伝統美  
 若鷺のまま帰らぬ飛行雲  
 お稲荷へボンと口あけ御酒供う  
 海の果て一年ごとに遠くなり  
 子や孫の笑いはみ出す夏休み  
 子授けの湯宿無口な女達  
 古里も都会も同じビルが建ち  
 入歯にも感謝ブレンド米を噛む  
 遣伝子に触れると神が鬼になる

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

札束が踊ると仮面宙に跳ぶ  
 仮面など持たぬ男の厚い胸  
 建前も本音も知っている仮面  
 面接の仮面に紅は薄く刷く  
 私の仮面にぬげる気のゆるみ  
 風呂敷に仮面包んで里帰り  
 検査は浅い顔しか似合わない  
 浅い喉間かせてもらうビール注ぐ  
 浅いど女は北の生まれとか  
 金持ちが浅々と出す同じ金  
 染めかえてもう一度着る浅好み

青琴 治幸 ちよ 弘 幸夫 虹汀 旭恒 晴仁 久仁於 實 四郎 タミ 高明 圭一 朴竜 正剣

肩書がついてネクタイ渋くなる  
 折返し点過ぎて開けた青い海  
 半分は妻の名義で登記済み  
 半分は税金という酒が好き  
 どうしても半分出来ぬものがある  
 半分の月に願いがかけてある  
 人生の半分過ぎて思うこと  
 無視されたショックかくせぬ流れ星  
 受話器置きショックで一瞬無我となる  
 ショック受けた顔と鏡も知っている  
 ショックから立ち直るのに要る時間  
 ガン告知またかとショックなど受けず  
 ショックショックとオーバーにいう男  
 元氣よく弾んだ毬が毬に落ち  
 口だけは元氣な指図動かない  
 鶏頭の赤さに元氣づけられる  
 食欲は元氣な証握食へ盛り  
 爽竹桃元氣私も元氣出す  
 声だけは元氣な母の電話口

川柳ささやま

酒井

靖子報

与根一 みえ 蛸 茂美 清江 邦代 静江 文子 桂子 佳江 鶴丸 太泡 友子 知恵子 静恵 寿美子 町紅

果せ得ぬ夢いつまでも待ちぼうけ  
 母ひとりいざに備える合言葉  
 日記帳の白紙は多くの転んだ日  
 一億の保険があなたに掛けてある  
 蹟きに備えておこう太い杖

川柳後楽吟社 従野 健一報

相討ちのその日にとっておく炎  
 妥協せぬ少年の瞳を信じよう  
 靴脱いだ足が本音をしゃべりだす  
 戦いに挑む男の眼が光る  
 僕の駅がのつとる地図と旅に出る  
 わからない迷った末の右ならえ  
 明日もあるくもりガラスを磨いてる  
 秒読みに入って何故か恋しくて  
 年金の葉書が来たが無策の日  
 老骨を鞭打ちに来る帰省客  
 足許に秋のドラマが忍び寄り  
 PKO・JTなどJRだけ判り  
 淋しゅうて争う火種ひとつ燃え  
 鉛筆が削れた子供の竹トンボ  
 あふつ金色堂の夕茜  
 立ちふた金色堂の夕茜  
 ありふれた女が夜叉になる時間  
 夫しか知らぬ所にあるほくろ  
 犯人も見た吊り皮のモニタージュ  
 スタミナは食後の梅干欠かさない

城北川柳会

吐田

公一報

ヒサ子 和子 芳郎 可住 靖子 草風 拓治 正秀 桃風 道博 柳五郎 玉水 青銅 博友 たけ志 哲郎 佐加恵 金吾 吉則 幸季 秋月 鯨虎狼 照路 行子

アメジスト女心がゆれてゐる  
祖父という静けさに居り蟬の声  
宝石はないがやさしい母の指  
お祈りがまだ届かない宝くじ  
一日の汗をかう生ビール  
夕焼けがこんなに憎く思うとは  
痛い所過去物だと笑える日  
微笑んで女は胸に核を抱く  
蟬しぐれ記録やぶりのこの暑さ  
朝市の方言野菜生きてくる  
ある時は心を鬼に子をしつけ  
惚れ薬試してみよかなと思ひ  
優しさに惚れた遺影をじつと見る  
ほつとする指輪が光る娘の手  
怒る時つい方言が出てしまふ  
方言が取り持つ縁の呑み仲間  
晩成の亀は焦らずマイペース  
美しく老けて涅槃のデスマスク  
もりもりと雲に急かされビール党  
蜚見に帰つてこいと仮名便り  
惚れっぽい女の性にスキャンダル  
色柄にぞつこん惚れて値にふられ  
他人様の口出し無用惚れてます

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

静子 春蘭 頂留子 澄子 トヨ子 政子 佐津乃 昭子 登美子 典子 一枝 史風 秀夫 久留美 八重 倫子 白峰 達子 柳影 あい子 満津子 公一

夢之助 向西 末貞一 尚利

ひねくれた形で焼けるいかの足  
焼きものを添えて亡母の七回忌  
来客が有つて休戦する夫婦  
親も子も休みが下手な蟻の干支  
休ませてやりたい妻を旅に連れ  
閑だから休んでくれという上司  
お泊ちよ散歩に休日無いかい  
ああ着いた我が家が一番休み床  
さわつたら買えと言われて嫌になり  
誓つてもすぐうずき出す浮気の虫  
川柳ねやがわ 江口  
だしぬけに結婚すると言う娘  
予告して来る悪友に身構える  
予告もせず妻が荷物をまとめてる  
予告変更たしひとり蚊帳の外  
棘のある言葉は使わない予告  
予告せんとうれしい話くれる友  
予告など要らぬ二人のテレパシー  
解らない明日楷書で生きているだけ  
人を恋い愛を探しに行く砂漠  
歯車が狂い家族にある砂漠  
誤解から砂漠ひろげていた無言  
夫の出費は丁寧に付けてある  
小遣いをくれる女とくらしめる  
へそくりが孫の遊びに呼び出され  
童宮であそび歳月奪われる  
遊ばれていたのはボクの方らしい  
叱られて風と遊んでいる私

紫香 十四郎 歌子 弘治 定人 鹿太 幸代 美々 ミサ子 勇次郎 度報 吉之助 たもつ 波留吉 庸佑 英王子 頂留子 光子 黎之助 柳子 亜成 洋 冬 礫 とし子 菜月 時弘 藍子

遊ぶこと知らず晩年ばけてくる  
遊ぶこと知らぬ母さん太い指  
働き蜂上手に遊ぶすべ知らず  
石橋をたたく遊びはつまらない  
かるたとり母はきかれたい声で読み  
週休二日遊びを知らぬ父の靴  
リテーナーに遊び上手がちゃんと居る  
わが極もこうかと送る夏の葬  
一つだけ種なしぶどうにあつた種  
いつからか母の勝手に慣れた父  
悪友は手頃な店も知つてゐる  
穿きやすい靴だ靴だと老い進む  
写経するその日その日の墨の色  
倉吉川柳会 谷口 次男報

文秋 一途 勇太郎 度 シマ子 一風 小路 弘直 かすみ 恵子 博泉 雅文 次男報 とみお かつみ 荒介 菩句 玲子 美由紀 節子 サカエ 康子 美智子 和枝 秀峰 御前 螢

異議が出て会議だんだん曇り出し  
鏡曇って私をつつしてはくれぬ  
ここに来て一人歩きの地図曇る

次男 日枝子

子報官一時曇と色付ける

天雀

曇り空へ争い事は遠慮する

雄々

曇った顔を一度も見せぬいい嫁だ

瑞枝

広告のダイヤの首輪子がくれる

智人

婆さんの首の飾りがよく似合い

秋人

おもちやだ雲間に見え下界とは

弄満湖

人間の体に五つの首がある

独歩

高気圧強く猛暑に雲は浮き

小生

首回り五十センチに苦勞する

よしえ

### サークル檸檬

小林

一夫報

秋風に体の箍を外しけり

楓 楽

疲れたのもう風に身をまかせます

喜美子

百済風の頬やわらかく秋の風のぼる

薫

うかつさに気付いてからの自己嫌悪

房子

土用波人はあやまち繰り返す

希久子

机の前にとっかと夏が居座って

智子

ビール溢れる惑星の一つから

千代

振り向かぬ道へわたしの影を置く

智恵子

あるがままの自分をさらし秋に佇つ

みつ子

水一本買って涼んで終りの日

雅子

向日葵よ挽歌は秋を昏くする

たか子

落日を絵にすることは出来ぬなり

いわゑ

落しもの他人の顔でもどつて来

あずき

幸つすき女の小さきてのひらよ

正坊

眼をとじてきいているツクツクボウシ

一夫

人生は二幕三幕ほどがよい

### 尼崎尾浜川柳会

前田いわえ報

急にまた貞女になって肩が凝る

向 西

裏山へ森林浴とシヤレてみる

修 水

胸に飛び込みたくおぼろ月という

正 治

杉良に現の妻が可愛らし

弘 治

回り道して小さな秋と対話する

す み

同権になつてそれから強い妻

六 浦

役得に慣れて薄れる罪意識

末 貞一

役得に埋もれブライド錆びて来る

澄 子

役得と易者美人の手を握る

勇次郎

役得の母へ味方の子が育ち

十四郎

役得を半分欲しい靴もち

夢之助

今だから言える役得だつてある

歌 子

野次馬の中に我が子が交じつてる

昌 子

舞台より客席沸かす野次が飛ぶ

尚 利

野次馬も少しは混じる蟻の列

鹿 太

月が出て野次馬すこしずつ帰る

紫 香

新空港電車も舟も走り寄る

いわお

### 川柳大阪

川端

一步報

この健康亡きふた親の置きみやげ

かよこ

知覧から平和を祈るメッセージ

まつお

吠え過ぎた男が苦い一人酒

美津留

たつぷりの時間かけてる老いの日々

与呂志

さりげなく内助の功は笛を吹く

希久志

平和の灯通天閣も守つて

敏

育児から親の有り難さが判る

我 勝

薫 風

育児するママの二の腕太くなり

一 介

子育ての夢や喜びわが宝

美 花

哺乳瓶大人になったらビール瓶

醉 照

子育てをやつと終えれば父母の世話

美世子

育児書に書いてなかった反抗期

鉄 心

長い目で見てぬ育児に子は荒れる

笑 風

子を産んでお伽噺をしてあげる

信 男

この暑さ息切れしそうな時もある

末 坊

息切れの鮎取り替えて友を釣る

太 元

負けて分かる稽古不足で息切れる

雅 巢

予算案福祉もやもら息切れる

川 童

息切れがわかつているから走らない

重 人

夫婦箸まだ息切れはせぬつもり

本 蔭 棒

息切れの背に容赦なく鞭が鳴る

金 太

息を切らして幸せよ駆けて来ないか

比呂志

息切れはさせまい車軸の下で汗

しげお

定退の祝膳鯛の目も赤い

青 道

鯛一尾釣った原価は尋ねまい

洛 醉

嬉しい日鯛の目玉が生きている

柳 昌

鯛つかい心をこめて離乳食

柳 弘

結納が届く佳き日のにらみ鯛

河 南 子

鯛据えて祝いの席が出来上がり

一 步

一生に一度や二度は鯛の役

一 步

### 川柳塔とつとり

武田 帆雀報

毎日が休日なのに暇もない

崇

休日も定年もない農に生き

多可志

休日が増えて女房に疎まれる

黙 光

シナリオが休日前に狂いだす

一 京

休日は防弾チョッキ陽にさらす  
 休日の朝は起こさぬのに起きる  
 病棟に休日はないうめき声  
 休日も関わりのない薬漬け  
 休日に出世せぬわけある  
 打ち上げ花火ドンパン戦時思い出す  
 熱帯夜花火の音が誘い出す  
 花火の夜は孫に曳かれてアウトドア  
 会者定離手花火消えるまで見つめ  
 初恋は線香花火のようでした  
 手花火を囲み兄弟仲がよい  
 うつとりと花火浮世の憂さ晴らす  
 大輪の花火の中にいるわたし  
 手花火よ落ちるな幸が逃げそだ  
 御先祖と酒盛をする盆の月  
 お盆には亡母に逢えると墓洗つ  
 掃省客去つてふるさと盆休み  
 包丁一本握りお盆も暮れもない  
 雨乞いの似合う今年の盆踊り  
 暑い盆アイスクリーマー差し上げる  
 昆虫の墓をつくるに盆終る  
 送り火の向う仏の背が丸い  
 成人式お盆帰りで花ざかり

# 川柳若葉の会

## 宮崎シマ子報

俊路 静生 喬水 大漁 友夫 和歌子 楊芝 千秋 艶子 由多香 孝男 粗粒 圭一郎 山人 侑里 明美 帆雀 輪多朗 一 枝 蛭 日枝子 孝原

清芳 留吉 弘直 光子

両方の祖母が口だす育児見方  
 それぞれに神いらつしやる信じよう  
 遊びだと思えば気持楽になる  
 若者の遊び上手や終戦忌  
 銭湯も遊びがあつて生残り  
 遊びから帰つてほんと仕事する  
 尼崎いくしま川柳会 春城 年代報  
 クララーの嫌いな祖母と猫の部屋  
 クララーは強 連載をせかされる  
 朝の茶のうまさに秋を感じます  
 病室に秋は画面を通り過ぎ  
 青柿に小さな秋のシンフォニー  
 今日もまた晴れて不快な暑い秋  
 秋風に『きく六号』は星となる  
 頰杖にひとりの秋がしのび寄る  
 ひと一人救えず秋の樹を叩く  
 この齡で見てはいけなない夢を見る  
 シナリオに無いが見せ場は心得る  
 面倒見よすぎて噂流される  
 その先を見抜いた駒の指しどころ  
 大屋根に登ると遠い日が見える  
 悲しさが抜けたら眠くなる瞳  
 風鈴が小さな秋をキャッチする  
 年だとは言われたくない女傘  
 断水に台風雷 何でも来い  
 母老いぬ唯にににににににに  
 見栄切れれば財布の底が笑い出す  
 腹の虫とときに牛耳られてはならぬ

シマ子 千枝子 欣史子 田実子 香住 あずき 紫香 石舟 萬的 正子 伊三郎 鹿太 薫 諷云児 正治 栄 澄子 智子 智女 すみ 芳子 ミサ子 杜的 福一 求芽

鈴虫の聞こえる辻で立止まる  
 トンネルの長さをボクは喋らない  
 蛍飛べした青春の青い蚊帳  
 ままにならぬ女に拗ねている男  
 朝顔が健康に咲いて残暑中  
 浜風も鳶にやさしく夏終る  
 雨の日は猫の魚も焼いてやる  
 矢印を見てから足が緩くなる  
 橋のない街で情けにうとくなる  
 高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報  
 賞味期限切れた老妻フテ寝する  
 観光の寺でがっかりした法話  
 あざなえる縄だ一喜一憂などしない  
 終点に置いて帰ろう影法師  
 終点で急ぎも慌てもしない下車  
 八月のはなし終点はきのこ雲  
 終点まではあなとの胸にねむりたい  
 終点で妻が私を待つと言ふ  
 終点であわてぬ程度の歩幅とる  
 終点で気まぐれな靴に履き変える  
 仏さんごめんおはき売り切れで  
 孟蘭盆会仏の塔婆増えいく  
 縁談を知らず仏間に灯がゆれる  
 澄みきった青空も欲し水も欲し  
 ゴミ拾い水澄むまでは続けます  
 澄んだ目の子がいて孫がいて嬉し  
 老いてなお澄んだ心になれません  
 澄む瞳このひとならば信じよう

武庫坊 磯 義芳 年代 昌子 まさお 正一 二南 (河) 芳子 太茂津 萬的 求芽 かり 二南 稲子 静江 道胤 伸子 英一 杜的 よ志子 白溪子 模杏 東雲 澄子 彰一 茶の子

澄んだ瞳で修羅を見ている飢餓の子等 (松芳 子  
 耳を澄まして御覽未来の息づかい (閑澄 子  
 自画像を少し明るい彩で塗る あきら  
 やさしさが届いて絆太くなり  
 席譲る心のゆとり持つている  
 灼熱の素肌男に海があり  
 この年になって火遊び未だ止まず  
 生きてきた証実の成る木を植える  
 空缶を投げれば響く秋のかなしみ  
 無農薬虫が一匹つきました  
 馬鈴重ねが一片の詩がまだ詠めぬ  
 シーソーの両端にある夫婦の座  
 川柳塔おっぱひ吟社 木村あきら報

放 任  
 よしみ  
 マサエ  
 正 雪  
 ひかり  
 かおり  
 くに子  
 あきら  
 迷 貫  
 マツエ  
 チカエ  
 文 仙  
 吟 笑  
 いさむ  
 治 延

アニメマンガ子供の世界に夢降らす  
 子に従いて波風立てず余生ゆく  
 川柳たけはら 時広 一路報  
 最高の笑顔と夢をありがと  
 終わらないまだたっぷりと宿題が  
 アイドルにあこがれているうちは良い  
 賀茂川も水の流れを忘れたか  
 すだれから家族の愛がこぼれ出る  
 イライは孫まぬことにあるらしい  
 凡人の誓いは鬼も笑うなり  
 秒針が過去振り切つてゆく速さ  
 ひと杓の水に命をつなぐ花  
 酒たばこ吞まない亡友の通夜に  
 水不足好きな花には分けてやる  
 満天の星に雨乞いする河童  
 青春という火花がいつも胸にある  
 通知表全出席の孫に丸  
 齢の功忘れ上手になつて行く  
 座りだこ母の苦勞をしゃべり出す  
 十五畳一人転んで蟬時雨  
 老眼が進んでいます眼鏡ふく  
 飲める口少し持つてて世が楽し  
 焼メシは二男にまかすことにして  
 太陽に夏の休みをあげたくて  
 あなたの側に小さい句碑を残そうよ  
 許す心が大事なりけり川流る  
 雨不足ついに西瓜も見放され  
 暮まいり風と道連れ老いの足

中1 なみ子  
 ふ み  
 中3 史 子  
 中1 千 枝  
 蘭 幸  
 ヤスエ  
 喜久恵  
 笹 舟  
 のばら  
 静 佳  
 栄 恵  
 蝸 牛  
 淑 子  
 笑 子  
 規 代  
 一 枝  
 喜美子  
 八重美  
 節 夫  
 汎 美  
 年 子  
 寿 枝  
 正 宏  
 夏 喜  
 千年枝  
 麻 代

老いてなお視線は海に向いたまま  
 限界ともこれからだとも古希の坂  
 久し振り寝ながら聞いた雨の音  
 事故車のうえ蝶がゆつくり飛んでゆく  
 二度三度目覚め目覚ましまた鳴らぬ  
 ほたる川柳同好会 井上 直次報  
 人間のドラマが地球汚染する  
 原作者の顔が見えてるメロドラマ  
 ドラマチックに出会い別れるさりげなく  
 一杯のコーヒはドラマ作り出す  
 ドキュメント ドラマを超えろと迫力  
 茶柱が今日のドラマの幕上げる  
 塩味のちよつと足りないドラマです  
 八月の空はドラマを語らない  
 願望をドラマの中に見ています  
 進ませた妻の時計の愛にふれ  
 人類の日進月歩にある疑問  
 夏バテもさんまのおい食進む  
 これ以上進んでならぬ道がある  
 たてまえの裏で上手に鬼を飼う  
 名人と上手のちがひ神と鬼  
 惚れ上手駒出る瓢箪下げている  
 褒め上手軽い嘘など出し混せて  
 上手だが時にスピードおしすぎる  
 ライバルを上手にはめる度量なし  
 小遣いの値上げ上手に孫せびる  
 お上手と義理が絡んだお世辞言  
 上手とは言えない字だが味がある

美佐雄  
 貞 子  
 千 里  
 静 風  
 一 路  
 佳 秋  
 眞 郎  
 蛭 柳  
 一 笛  
 清 史  
 直 次  
 喜美子  
 保 子  
 桂 子  
 福 一  
 吉太郎  
 馬 洗  
 瀧 小  
 明 光  
 博 史  
 ただし  
 純 次  
 方 郎  
 竹 二  
 正 安  
 昭 子

上手上手一匙の粥食べさせる  
甘くない果物日照りのせいに  
子育てになかった甘き孫にみせ  
かくし味甘さがきいて丸い人

みぞくち川柳会

小西 雄々報

農作業終えて川風肌に入れ  
赤とんぼ母なる川へ身を映す  
川の字になって暮した日を想う  
古里へ螢とび交う川がある  
悠久の大河の流れ動じない  
河川敷うまく利用し運動場  
大山のふところ深し泉湧く  
河涸れて雨ごい神事までもされ  
モノリザの微笑の河へ鮭帰る

はびきの市民川柳会 前月分

榎本吐来報

お隣もいつしか音のない夫婦  
満天に星ちりばめて過疎の贅  
残された時間と心中してみるか  
甘口で誤魔化し政治家人気取り  
死に水もままにはならぬ核家族  
氷屋のこぎりの音夏を切る  
天神さん大阪弁が胸を張る  
水取りの喧嘩知らずに米実る  
バスルのようにポストを埋めていく組閣  
敵もなく味方もないお人好し  
駄々っ子の汗が正直だと思つ  
遊けられぬ道と悟つて歩き出す

敵子 祥子 英子 恭子

久子 智恵子 静江 鈴枝 正光 弘子 豊枝 康女 雄々

聡 和風 たけし 昇 一壺 夏秋 悦子 さとみ 絢子 志洋 与呂志 扶美代

迷信と馬鹿にしながら避けている  
縄のれん避けて通れぬボナス日  
答え避けまあおひとつとつぐお酒  
避けられぬ定めて老父に紙おむつ  
沸点を避けて長持ちする夫婦  
宇宙船スターのニュース聞く地球  
大家族うちのスターは孫娘  
スターにもあった悩みの泣きぼくろ  
憧れの僕のスターは原節子  
二十五時酔ってつぶれているスター  
ゲンコツで泣いてる夏の甲子園  
親父から貰った拳固子に贈る  
特価日が済んで退屈そうなレジ  
退屈を知らない器用で貧乏で  
退屈はしない器用で貧乏で  
退屈は知らない器用で貧乏で  
母の手は退屈知らぬ趣味多忙  
退屈の捨て場を探す梅雨の昼

はびきの市民川柳会

榎本 吐来報

晋 敦子 みつこ 六点 かつみ シマ子 キミ子 利武 昭子 美代子 一屯 吐来 岩信 敏 重人 ダン吉 りつえ 泰子

慣れた頃軽口たたく癖がある  
PKO金だけは出す旦那芸  
嘘泣きも生きる知恵です女です  
熱戦へ意気盛り上げる応援歌  
旅先で知らない二人意気が合い  
意気と意地持って迎えた古希の坂  
意気込んで上京したがまだバイト  
ピッタリの靴から意地が湧いてくる  
意気込んだ日もあったなあ万歩計  
ノートには妻のわからぬ略記号  
ノートでは女になっている娘  
悲しみを記すノートにシミの跡  
空白のページ涙の跡がある  
八月のノートはピカとひもじさと  
後輩に花を持たせて職を去り  
後輩の機嫌とりする二度の職  
後輩がなくて淋しい米作り  
後輩を先ず御案内ネオン街  
後輩に馴染みの飲み屋引き継ぎし  
後輩の愚痴を聞いている爪楊枝  
出世した後輩が来ぬ縄のれん

豊中もくせい川柳会

田中 正坊報

扶美代 かつみ 絢子 シマ子 厚子 たけし りつえ 美代子 吐来 利武 聡 さとみ 悦子 みつこ 和風 志洋 岩信 夏秋 昭平 敦子 一屯 圭坊 芳子 福一 つえ子 登代子 瀧小

矢印がないと判らぬ山の家

三の矢を外しあつさり野に下る

八卦見がええ耳してると言つたのに

福耳を信じいいこと待っている

夏瘦せのおんなの耳のやわらかき

補聴器の母に確かな秋の詩

眠つても番大耳を立てている

親馬鹿がまた学校を困らせる

雲行きがそろそろ身辺寒くする

下心あつて珊瑚のイヤリング

おしん見て我が生涯を重ねて

末つ子がそろそろ巣立ちタバコ吸う

癌告知すんで言葉がかかる

カツ井の貴方は主役 一膳屋

ポストまで帽子被つて下駄穿いて

矢も盾もたまらぬ顔は犬もする

涼しさが増してそろそろ鍋料理

そろそろと短くなった導火線

耳掃除 無理やり母がしてくる

わが耳を疑つ計報 絶句する

味方だという耳うちをしています

### 岬川柳会

### 八十田洞庵報

暗い庭そつと水まく気配する

くすり飲む水をおしににがさ知る

名水がレジに並ぶ市場籠

湯水期田んぼの水も分ちあひ

湯水時ホースで打ち水気が引ける

紀の川に鯛が群れる水不足

紫香

萬的

ただし

英子

薫

さく子

慶子

明光

悟郎

メ女

吉太郎

博史

武庫坊

一笛

杜的

薫風

知香子

正坊

菁風

庸佑

真柳

年子

春江

慶之

末吉

いと

とみ

海水浴子らの見張りに疲れ果て

里帰り今日は親子の水いらす

酔いぎめの水のうまさよ左きき

小姑に水をさされた旅プラン

魚釣り欲のない子がチヌをあけ

仲人の言葉に釣られまっしぐら

熱帯夜覚悟の灸に玉の汗

病氣には勝てず引退覚悟する

もつ消せぬ炎二人にある覚悟

### 翠洋会

### 渡部さと美報

向井さん見たまん丸い水平線

水平線還らぬままの別れ秘め

夫の軒リズム正しい午前二時

心身のやすら旅の露天風呂

やすらぎに帰るふる里守る老い

百になるまでやすらぎをとておく

やすらぎがほしくて亡母の森へ来る

小さなやすらぎ花野に秋が満ちている

写経してやすらいでいるのは小筆

老人が網をつくらう里の浜

亡き父の獲物は見ずにつぐみ網

地曳網ねむい観光客起こす

天網を甘く見すぎた知能犯

新妻の網の中から出られない

行先きに網かけている妻のわな

とき時はふるいにかけたい自己嫌悪

脱税の網にかかるは雑魚ばかり

翔べ翔べとはやす夫が網を打つ

庄六

文雄

晶子

淑子

よし子

みつ子

悦子

和重

洞庵

良江

光子

絹子

志華子

さと美

蛙

佳秋

希久子

みつ子

宣司

春子

正雄

久峰

真砂

東雲

登志子

恭昌

ひろ子

家族三人話題ときれぬ夕ごはん

リビングの壁は子供の写真展

家族です離れ離れに暮しても

母の笛家族をつましく踊らせる

騒いでも起きては来ない棺の中

### わかあゆ川柳会

### 松本はるみ報

菜園で雨とかけひきして疲れ

ストレスを笑いとはしてやりました

国一つ潰すかけひきだつてある

真心をかけひきなしで買いました

それぞれに又を約して帰途につく

散る花のかけひきもなし地に帰る

大声で笑う人です憎めない

かけひきも知らぬわが家の独楽の芯

シャッターに催促されたにが笑い

酒のめば山も畑も田も笑う

### 八尾市民川柳会

### 宮崎シマ子報

灯下親しむ夜長父子で漫画読む

ハイキング塔とモミジに迎えられ

虫の声へ残暑も影を薄くする

熱燭で秋を歌っている父子

妻の活ける花から秋の立つ気配

実つても実らなかつた馬の足

一言のセリフもらつた馬の足

一桁の世代実りへ慎ましい

実る日を待つから希望揺れやまぬ

椎の実がこぼれて寺の代変わる

凡子

叔子

正坊

楓楽

鬼遊

かつ子

聖子

好栄

ちよえ

英子

はるみ

鈴江

博利

清泉

白汀

柳宏子

頂留子

たもつ

欣之

竜太

とみお

みつる

美幸

泰

下積み不堪えて大輪実らせる  
 実るのをじっと待つて親の愛  
 善人のくせそでんなそうだんな  
 雑草のように善人しています  
 善人を支えて影法師が疲れ  
 善人が生きぬいてきた低い屋根  
 善人で返ってこない金を貸し  
 善人が集い節水するはなし  
 どんこへ素足になって子がかえる  
 下駄を履く素足昔の音がする  
 目を据えてはだしが護摩の火を渡る  
 叱られて素足で逃げる子の早さ  
 朝露に素足の土がやわらかい  
 ハネムーン婦唱夫随の幕が開き  
 新婚の甘い仕草もきのうまで

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

三男 和子 長生 一風 森子 夕花 ますみ 柳伸 朝子 シマ子 祥一 信博 勝美 弘直

おまつりの音が昔に連れていく  
 残暑にはもううんざりと津軽弁  
 高速へ乗って死の音繰り返す  
 おふくろさん残暑に負けていませんか  
 川柳藤井寺 高田美代子報  
 乾盃へのどがなるなり式次第  
 乾杯の笑顔の中にあるジェラシー  
 天を取り一度乾杯してみたい  
 乾杯に前口上が長すぎる  
 優勝へ孤樽わってする乾杯  
 庄助は乾杯の声待ち遠し  
 乾杯も花道もなく共白髪  
 乾杯の音頭へあくびしたビール  
 老春に乾杯恋の万歩計  
 夕立へ乾杯しよう水不足  
 乾杯する母の涙へありがと  
 ライバルに乾杯ひと飲み直す  
 嬉しいことあって鬼とも乾杯し  
 乾杯だ実り迎える日の落花  
 今日に乾杯嫌いなものは何もない  
 乾杯のグラス嬉しい顔をする  
 愛の賛歌 今乾杯のセレモニー  
 乾杯が起爆となつて無礼講  
 友の幸 会って乾杯したくなる  
 乾杯のグラスときめき聞いている  
 五億円犯人 今ごろ乾杯だ  
 乾杯に男の涙見てしまつ  
 乾杯へグラスを高く高く上げ

隆樹 一花 花峯 五楽庵 三夫 映三子 恒雄 吸江 利武 宗一 志洋 和樹 六點 トミ子 智久 美房 ミツ子 和子 しげお 悦子 キヌ 敬一 剛治 政代 愛子 治子 昭子

乾杯のビールは泡も残さない  
 乾杯は早い話はまだ噂  
 祝盃を乾してちよっぴり妬ましく  
 乾杯も済んで安堵の箸動く  
 乾杯を涙で聞いた友が居る  
 乾杯のグラスにうつる耐えた過去  
 乾杯の酒が炎になつていく  
 二南 晋 史郎 三郎 キミ子 花梢

記念句集『川柳塔』正誤表

誤 正

頁 222 仏壇の前の胃が 仏壇の前の畳が  
 337 子に母の握る飯 子に握り飯  
 424 やんやつてくる やんやつてくる  
 432 慕情……一・二桁 慕情……一・二行  
 443 九留宮明女 久留宮明女  
 444 人生に……校生を 人生に……校正を  
 508 心地より疲れ…… 心地よい疲れ……  
 544 無人駅……がゆれ 無人駅……がゆれ  
 557 春風に……舟一漕 春風に……舟一艘  
 619 墓穴を万倫の愛…… 墓穴……不倫の愛  
 650 塾の靴……教えたり 塾の……教えたら  
 665 聞こえなき素振り 聞こえない……

川柳塔社

# 平成六年度 川柳塔社同人総会

10月2日 大阪市立阿倍野市民学習センター

平成6年度の川柳塔社同人総会は10月2日

午前10時から大阪市立阿倍野市民学習センターで42名が参加して開かれた。

総会は河内天笑氏の司会で開会、西田柳宏子氏のあいさつの後、西尾菜主幹を議長に選出して議事に入り、春城武庫坊氏の会計報告に続いて松川杜氏の監査報告が文書で朗読された。次いで玉置重人氏が別項のとおり事業経過等告を行った。質疑応答の中では会計報告の内容が地方の同人にも周知できるような手だてを考えてほしいという希望、会計・事業ともに前年度の報告だけではなく、新年度の事業計画や予算についても提案すべきであるとの意見が表明された。

今年には2年ごとの役員改選年にあたり、しかも菜主幹がかねてから引退を表明されていたこともあって総会席上、7名の常任理事による指名委員会が開かれたが、その結果が黒川紫香副主幹から発表され、満場の拍手によって承認された後、橘高薫風新主幹が新役員を代表してあいさつ、高杉鬼遊氏の閉会の辞

で幕を閉じた。

## ■事業経過報告

### 〈事業〉

5年10月3日 平成5年度同人総会を大阪市立労働会館で開催

6年1月1日 『川柳塔』800号記念特集号を発行、全国誌上川柳大会の入选作品を発表

同 1月16日 『川柳塔』800号記念川柳大会をなにわ会館で開催

同 5月1日 『川柳塔』300号記念川柳大会（堺市総合福祉会館）

同 5月22日 川柳サークル卯の花10周年記念川柳大会（高槻市現代劇場）

同 7月7日 第30回路郎忌本社句会

同 7月18日 もくせい川柳会10周年記念川柳大会（豊中市立中央公民館）

同 9月6日 西宮北口川柳会20周年記念・黒川紫香会長米寿祝賀川柳大会（西宮市民会館）

## 〈受賞・表彰〉

永田 俊子 平成5年度路郎賞

安平次弘道 同 準優秀作第1席

岸野あやめ 同 準優秀作第2席

児玉 歌子 平成5年度川柳塔賞

原 章峰 同 準優秀作第1席

尾宮 弘治 同 準優秀作第2席

高橋千万里 平成5年度銀河系賞

木本 朱夏 同 茴香の花賞

川島風云児 同 一路賞

柿花紀美女 同 各地柳壇賞

田中 薫 同 月間賞永久保持

政岡日枝子 国民文化祭文芸大会で文部大臣奨励賞を受賞

新 正子 ふれあい川柳祭大会で文部大臣奨励賞を受賞

土橋 螢 NHK学園生涯学習賞を受賞

小林由多香 鳥取県教委から教育功労者表彰

松川 杜の 第3回全国紙上りんご川柳大会で天位に入賞

## 〈句碑建立〉

工藤 甲吉 平成5年10月17日、青森県南津軽郡尾上町猿賀公園内

## 〈出版〉

故植山武助 遺句集『国土無双』

故岸本木魚 遺句集『梵鐘』

野村太茂津 遺句集『野村太茂津句集』

麻生路郎・葭乃夫婦句集『旅人・福寿草』

本間満津子 川柳句集『銀髪』

石倉美佐子 川柳句集『花筏』

合同句集『城北川柳』第5集

合同句集『もくせい』第2集

川柳塔誌寿古希記念句集『川柳塔』

### 〈物語者〉

古市三千代 平成5年9月20日

谷垣 史好 同 10月26日

山根いつを 同 10月29日

岩本雀踊子 同 11月20日

神保 拓生 同 12月10日

松村迷観子 平成6年2月18日

古川覚然坊 同 4月20日

神谷凡九郎 同 6月8日

### ■新同人

上田登美子・川端一步・小糸昭子・山内かずみ・清水絹子（大阪市）指宿千枝子・安永

曉子（東大阪市）藪野ケイ子・寺田甚一（岸和田市）

福岡しげお（交野市）小林一夫（豊中市）

森松まつお（羽曳野市）池森子（富田林市）

世森幸雄（寝屋川市）古川喜美子（吹田市）

八田敏（枚方市）八十洞洞庵（泉南市）

田中みね・堀畑靖子・玉置当代・岩本美智子

池永正雄・榎原公子・山口三千子（和歌山市）

木村貴代子（神戸市）浅田隆樹・一戸ツネ・岡本花匠・中山雅城・高瀬霜石（弘前市）

小笠原敏人（十和田市）島田昭治（八戸市）

森田文（広島市）江口有一朗（岡山県）土橋睦子（鳥取県）

山口新子（東京都）菱田満秋（横浜市）

（横浜市） 37名

### ■新役員

名誉主幹 西尾 栗

主幹 橘高薫風

理事 西田柳宏子

相談役 黒川紫香・野村太茂津

副主幹 高杉鬼遊・小出智子

副理事長 板尾岳人・河内天笑・宮口笛生

常任理事 岩佐タン吉・高須賀金太

西口いわゑ・宮崎シマ子

山下美津留

会計監査 阿萬萬の

参与 塩満敏・玉置重人・辻白漢子

芳地理村・松川杜の

理事 牛尾緑良・新家元司・米田恭昌



### 新同人紹介

〒662

西宮市木津山町3-15

電話0798-72-1613

亀岡哲子

薫風・笑女推薦

〒662

西宮市甲風園2丁目5-15

電話0798-66-0745

菊池トミエ

薫風・笑女推薦

〒669

宝塚市売布東の町13-30

電話0797-86-3155

小倉藍あ

薫風・笑女推薦

〒662

西宮市両度町2-19-515

電話0798-65-0940

山本義子

薫風・笑女推薦

〒591

堺市百舌鳥梅町3-45-1

電話0722-59-5172

山本半銭か

薫風・天笑推薦

平成六年度 二賞表彰

本社 十月旬会

十月二日(日) 午後二時

大阪市立阿倍野市民学習センター

二賞表彰の本社旬会とあつて出席者一〇二名が新会場の市民学習センターの講堂を埋めつくした。披露に先立ってはるばる横浜から駆けつけた路郎賞の菱田満秋さん、川柳塔賞の永田曉風さんらに西尾菜名督主幹から賞状と盾が贈られて拍手を浴びた。初出席は菱田満秋、籠島恵子(寝屋川市)水田秀男・吉村さち子・和田美寿子(和歌山市)の5氏。月間賞は西口いゑるさん(西宮市)に輝いた。(司会)天笑。(記名)ダン吉・月子(受付)しげお・シマ子・智子

席題「空港」 池 森子選

仁徳も目を丸くする一番機  
関西空港 九月の空は広過ぎた  
関空へ今日ご先祖の山を売り  
空港を見に行く服を買いに行く  
空港ができて用もない暮らし  
空港の隅に生れた土地がある

たもつ 武庫坊  
一三三 春子  
鬼遊 茜

円高の驕り空港闊歩する  
空港の広さ一杯入道雲  
隣にまけじと新空港を先に見た  
空港の隅 雑草のひとり言  
空港で泉州弁を引つ込める  
蟹の目に新空港の大きすぎ  
空港に夢ハネムーン フルムーン  
空港の椅子 旅人にしてくれる  
その次のデート空港島と決め  
爆音のだんだん遠くなる別れ  
飛行機は始めて飛行場の母  
空港の風にあたるとエトランゼ  
みんな他人の顔で行き交うエアポート  
新空港で軽い指切りしてしまふ  
空港の島に住んでるきりぎりす  
空港を外れて玉葱よく育ち  
キャリアウーマン今日もタラップ踏んでいる  
新空港で大きな欠伸して帰り  
飛魚も海外便を真似てみる  
空港での決れコスモス真つ盛り  
空港の外は静かに雨が降り  
妻の名を忘れたことがない空港  
空港が近くて妻が翔びたがる  
誰よりも妻には味方する空港  
空港を混み合はりにして猫が住む  
関空の混み合つて来る多国籍  
空港の奇跡のドラマ待つロビー  
幸せは国際線の列に居る  
空港の月も芒にゆれている

美房 愛論 元紀 金太 月子 金太 吐来 希久子 天笑 いわゑ 笛生 武庫坊 楓楽 和子 まさお ベ女 太茂津 満正雄 みつ子 まさお 岳人 さち子 岳人 満秋 雅文 維久子 笛生 元紀

空港島 赤トンボまで旅の人  
空港に英語の妻が降りてくる  
新空港 母を連れ出す車椅子  
関空で国際人の輪をつなぐ  
国際空港 覚えた英語使い果て  
泉州の空ばら色へ飛ぶ未来  
秀  
国籍に飽き空港に紛れこむ  
軸  
一人では飛べない空港のロビー  
兼題「さばさば」 桜井千秀選  
昨日は過去さばさば生きることにする  
さばさばと野菊に語る道祖神  
三日坊主あとは白紙の日記帳  
嘘ばれてさばさばしてる照れながら  
しがらみを捨てさばさばと旅に出る  
さばさばと何も無い掌を見てもらう  
リストラの首よさばさば出来まスカ  
さばさばと秋のおんなは潔い  
全力を尽した負けに悔いはない  
拳骨も飛ぶがさばさば後が無い  
言い勝つてさばさばできるわけなし  
さばさばと平気な顔でいいのがれ  
さばさばと昨日を捨てる砂時計  
離婚後はさばさばとして厚化粧  
金がないだからさばさばしておれる  
さばさばと転機 余生の蛇を取る  
癌の疑い晴れてさばさば妻と酌む

ダン吉 花梢 花梢 友照 しげお 維久子 射月芳 森子 秀男 太茂津 英子 維久子 みつ子 朱夏 金太 森子 楓楽 三男 楓楽 美寿子 寿美 悟郎 落児 武庫坊



二賞受賞者と選考委員

限界を悟りさばさばした夕陽  
 けちゃんですりえさばと煙にまき  
 深刻なことをさばさば言う若さ  
 さばさばした気性に財布泣かされる  
 さばさばと別れたあとの大津波  
 さばさばとはずれ馬券を飛ばしてる  
 さばさば人生 量 枚あればよし  
 さばさばの気分散髪して帰る  
 選択はさばさばとした嫁まかせ  
 持たぬつよみ税の話はさばさばと  
 さばさばと机束敷を直して  
 さばさばと見せてストレス溜めて  
 さばさばと残りの酒をのむ幹事  
 さばさばと失敗談をしてくれる  
 さばさばと今日の不覚を持ちこさず

森子 勇太 三男 いわゑ 東雲 頂留子 笛生 君子 義子 千歩 萬的 天笑 茜

生きてゆく自信さばさば判を捺し  
 ともだちのままでさばさばして別れ  
 白状をしてさばさばと茶漬食う  
 さばさばと他人を肴に飲んでいる  
 洗いざらい話した後のうまい酒  
 佳  
 さばさばと負けを認めて甲羅干す  
 さばさばと駆込み寺へいったきり  
 内緒事はれてさばさばしたレモン  
 肩書が消えてさばさばした名刺  
 Tシャツで来てさばさばとアロポーズ  
 人  
 名も椅子も捨てると眠り深くなる  
 さばさばとネアカの嫁で憎めない  
 地  
 さばさばとした人柄で敵がない  
 天

満秋 紫香 朱夏 重人 良知 良知 洋知 しの 風云児 女 正坊 正坊 勇太 正坊

意けたら体重計が手きびしい  
 意ける気ないが体がついてこん  
 意ける言いい訳ばかり考える  
 肥えたのが先か意けたのが先か  
 急に来た姑にキッチン磨かれる  
 意けるで訳ではないが職がない  
 奥さんの留守には犬も昼寝する  
 意ける気ないのに雨が降って来る  
 金はある今日も明日も遊んどこ  
 貧乏性 意けることを許さない  
 マイペースだと主張する意け癖  
 暑いから寒いからとて意けてる  
 なまくらなひとにこまめな夫いる  
 歩くのを意けてふえる体重計  
 意けものの猫は女の膝が好き  
 意けると往生際が悪くなる  
 意けたい蟻も中にはあるだろう  
 安息日 神よ意けていいですか  
 小姑も姑も留守でひる寝する  
 敬老の日だからちよつと意けよう  
 すこしだけ意けて夏を乗り切った  
 稲たわわ意け心を許さない  
 夢を追う僕を意けてるだなんて  
 列島も少し意けてみませんか  
 時々意けてねじを締め直す  
 私だつてノラになりたい時もある  
 左遷地で意けすぎたと思っても  
 意け過ぎだろか爪がよく伸びる  
 胃袋がこの頃意けたがついてる

月子 楓楽 射月芳 天笑 たず子 白溪子 鬼遊 重人 さち子 千歩 良知 美智子 千秀 狸村 二南 正雄 茜 一風 智子 月子 朱夏 丹吉 丹吉 みつ子 度 正坊 希久子

兼題「意ける」 川島 風云児 選  
 意慢の付けが回っていた賞与  
 意けるなど目をつぶるまで知らぬ母  
 意けぐせついたか薄い足の裏  
 一本が意けて動けない百足  
 時々意けて命長らえる  
 サボりましたの小声になっている仮病  
 意けたい時もあらうに水車  
 意慢を思い知らせる棒グラフ  
 軸

清史 公一 稚代 正子 文子 恵子 絹子 志洋 千秀 正坊 勇太 正坊 正坊 正坊

意けたら体重計が手きびしい  
 意ける気ないが体がついてこん  
 意ける言いい訳ばかり考える  
 肥えたのが先か意けたのが先か  
 急に来た姑にキッチン磨かれる  
 意けるで訳ではないが職がない  
 奥さんの留守には犬も昼寝する  
 意ける気ないのに雨が降って来る  
 金はある今日も明日も遊んどこ  
 貧乏性 意けることを許さない  
 マイペースだと主張する意け癖  
 暑いから寒いからとて意けてる  
 なまくらなひとにこまめな夫いる  
 歩くのを意けてふえる体重計  
 意けものの猫は女の膝が好き  
 意けると往生際が悪くなる  
 意けたい蟻も中にはあるだろう  
 安息日 神よ意けていいですか  
 小姑も姑も留守でひる寝する  
 敬老の日だからちよつと意けよう  
 すこしだけ意けて夏を乗り切った  
 稲たわわ意け心を許さない  
 夢を追う僕を意けてるだなんて  
 列島も少し意けてみませんか  
 時々意けてねじを締め直す  
 私だつてノラになりたい時もある  
 左遷地で意けすぎたと思っても  
 意け過ぎだろか爪がよく伸びる  
 胃袋がこの頃意けたがついてる

月子 楓楽 射月芳 天笑 たず子 白溪子 鬼遊 重人 さち子 千歩 良知 美智子 千秀 狸村 二南 正雄 茜 一風 智子 月子 朱夏 丹吉 丹吉 みつ子 度 正坊 希久子

住

指切りの外は怠けている小指

怠けるようにネジが切れてるオルゴール

怠けると鱗一枚ずつ乾く

怠けたらあかん明日が遠くなる

少年に怠けた春が戻らない

人

怠けたい怠けたい人間の弱さ

地

拝啓と書いて電話をしてみよう

天

怠けてたことは閻魔にだまっとく

軸

貧乏のおかげ怠ける暇がない

兼題「ダブル」

玉置重人選

バーボンダブルでツキを呼び戻す

ハイハイとダブルで妻の低気圧

寝たきりの母と私をダブルさせる

二十年先のわたしを老母にダブルさせる

ベレー帽に詩人の面影ダブルさせる

ご指名をダブルで受ける片えくぼ

ダブルベッド同じ夢はみてません

妻までも何故か娘に味方する

お祝いの品がダブルでばかりくる

一着もダブルの背広つけてない

ダブルプレーそれからツキに見放され

ダブルスを組んでプリンスプリンス

慶びが重なる母の天手古舞

美房

雅文

森子

金太

元紀

金太

親路

いわゑ

諷云児

柳伸

正子

文子

寿美

勝美

文時

千梢

ダン吉

甚一

金太

笛生

寿子

柳宏子

ダブルせたらあかん夫とあの方と

在りし日がダブルの遺影の笑い顔

ミスマッチ ダブルを組んだばかりに

ダブルスを組んで幸せだったのか妻よ

新調のダブルが出世がしらとか

ダブルピンチ コスモスはたうなすいて

いい娘 息子の嫁にダブルさせる

差別語がダブルでベンの先を折る

ダブルパンチへ男の仮面ははずせない

母と妻仲よく僕を攻めてくる

夜遊びを妻と子供に叱られる

私の過去がダブルで叱られる

森へ行く妻に妖婦をダブルさせる

出世頭はむかし入試でダブルだった子

情念のこわさダブルで鬼火飛ぶ

ダブルでどうぞ招待状は花野から

約束の場所に彼女が二人いる

夫婦別姓ダブルベッドに変えてある

面てんびんかけて不覚をとりました

水割りのダブルを啗る日の挫折

やさしさは二重扉の内側に

チャップリンの靴に父親ダブルさせる

いい花へ蝶もダブルでやってくる

住

ダブルパンチへ男海鳴り聞いている

ダブルチャンス好きな女は後で逢う

ダブルスの呼吸で百までフーする

水割りのダブルに愚痴も添えて出し

千秀

寿美

希久子

たす子

君子

恵子

憲太郎

みつ子

寿子

シマ子

一風

文秋

元紀

三男

武庫坊

いわゑ

勇太

しげお

義子

みね

森子

和子

紫香

萬的

豊太

満秋

勇太

言い分を通すダブルのウイスキー

秋の夕陽に女が三人ほどダブル

童話にダブルの母の読み方父の声色

ダブルベッドにミッキーマウスと寝ています

二重奏ときどき妥協したくなる

共通の悩みで長い立話

共通に責任がある茄子の花

夫婦別姓 共通だとは信じて

共通の辞書を持って出来不出来

共通の癖持つ夫婦仲が良い

共通の悩みをもっている絆

共通の話題がつきぬ喫茶店

共通話題セールスはすぐ見つけ

万国共通なにはさておき子は宝

共通のサイン持つて飲み仲間

共通の話題のほしい夜なのに

共通の趣味で平和な縁に座す

共通点あつてライバル仲が良い

共通の大阪弁が多弁にし

秋風が吹くとき共通だった趣味

共通に淋しい時間夫婦にも

共通の話題で弾む国なまり

共通の話題を拾う週刊誌

共通の話題を拾う週刊誌

共通の話題を拾う週刊誌

共通の話題を拾う週刊誌

共通の話題を拾う週刊誌

しげお

元紀

澄子

いわゑ

重人

稚代

正子

柳伸

勝美

天弘

いわゑ

恵子

度

みね

和子

春子

萬的

春子

英子

茜

千秀

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

鬼遊

父と母との共通点はおひとよし

共通の話 姑同士嫁同士

共通の話題でいつも群れている

共通の思い出胸に古い二人

共通の趣味で姑と仲がよい

共通の病氣 元氣に世話を焼き

共通のよろこびダムの水溜まる

共通の趣味で夫婦がよくもめる

共通の敵を肴にうまい酒

親と子の夢 共通でない悩み

共通の悩み夫婦に金がない

共通の知人で和む初対面

共通の話題も弾むバスボート

共通の悩み屋台の酒で知り

共通の悩み一戸建の欲

共通の話 仲人胃が痛む

共通の話題が溝を埋めている

共通の歌があるから仲が良い

共通の視点に立てば九月

佳

共通の想い出長い歴史です

夫唱婦随だんだん共通点が増え

共通の話題も切れて夜が長い

共通の痛み感じている野党

共通で着ておかしくないパジャマ

人

共通の傷があるから許し合う

地

共通の話題ときれてきた別れ

一風

シマ子

智子

正坊

諷云児

美房

太茂津

落児

朱夏

楓楽

シマ子

正坊

雅文

トメ子

笛生

憲太郎

金太

みつ子

隆

たず子

柳宏子

みつ子

萬的

しげお

弘直

房子

天

共通の話題増やしにフルムーン

軸

共通な思い出北方領土見る

兼題「縞」

桶高薫風選

今は昔 手織り木綿の縞が好き

縦縞が似合う小柄な母好み

縞を着て少女が少し大人びる

横縞にお好きな色を入れました

縞柄が似合う美人と河原町

もてるのは縞の財布で僕じゃない

縞模様少し派手だが値が手頃

ストライプまだスタイルが気にかかり

縞もよく似合いですと如才ない

スーツにしました婆ちゃんの縞がすり

縞のセヒロでぎこちないプロポーズ

心の縞 別々に着るベアルック

縞のエプロン今日は夫のフライパン

安物の縞を着こなす妻でよし

牛蒡縞 先祖は平の宮仕え

控え目な座に甘んじる縞瑪瑙

縞をなし美しきかな枚田

ご機嫌の砂丘綺麗な縞模様

みだれ縞砂丘になみだ落ちている

一斉に飛び立つ鶴の空は縞

縞柄が似合ったつぷり女運

幸不幸ところで書く縞模様

縦横に縞織りなして夫婦たり

度

紫香

房

章久

正子

春子

正坊

甚一

白漢子

智子

庸佑

天笑

重人

たもつ

花梢

洞庵

美津留

朱夏

射月芳

柳宏子

義子

吸江

めぐみ

美房

たず子

大好きな縞馬見せる肩車

縞馬よ保護色着たい日もあろう

細い縞 亡母の箴音まだ聞こえ

双子縞 着物に深く亡母がいる

今になお洗えば深くなる縞緋

縞柄の野心を映す朝鏡

縦縞を着ると万事が居丈高

狷介な姿くずさず縞木綿

縞柄の女王役のメロドラマ

縦縞の形見が似合う四十過ぎ

たて縞が似合うハイミス意志まげず

疲れたら着ようと思う縞のシャツ

明暗の縞で織りなす過去未来

蝶の羽根 幾何学の縞美しい

縞の砂 波になり切る龍安寺

佳

バーコード人の値踏みをしなくなる

縞馬は神の芸術だと思つ

縞馬も難民の列など見る

縞のシャツ私の胸の裕次郎

白黒反転 記憶の縞が揺れている

人

人生よ喜怒哀楽が縞となる

哀しみを絞ると縞の跡がつく

地

天

女坂 段だら縞を描きつつ

軸

縞馬の縞のうらやましいけじめ

敏

楓楽

千梢

義子

メ女

吐来

二南

落児

吐来

白漢子

君子

岳人

公子

雅文

洋

隆

美房

トメ子

和子

希久子

みつ子

文子

いゝゑ

薫風

## ■句集紹介

# 『甲吉川柳』と甲吉

## 波多野五楽庵

工藤甲吉さんがいけばん念願としていたのは、句集刊行であった。なんとか成就して上げたい。集まった川柳塔みちのくの編集委員は、甲吉さんの句の収集に奔走することになる。長い柳歴を有する青春時代の甲吉さんの顔が見えてこない。幸いにしてかつて県川柳社の代表であった故中林瞭象さん宅に、当時の柳誌『みちのく』が保存されていた。その中から青春時代の甲吉さんを拾えたのである。東北の荒夷とも言われた小林不浪人にもまれて、甲吉川柳は成長を続けてゆく。

薬局に置けば薬に見える水

せんぶりを飲んだ顔して巡査いる

やどかりが住んでいそうな耳の穴

折あらば玉子こわれてやるつもり

『みちのく』は、戦時統制により廃刊の憂き目を見た。しかし、荒夷の感化を受けた二代目荒夷の甲吉さんは、次に発刊される『ね

ぶた』に参加することなく、中央に道を求めることになる。

三太郎・雀郎と尋ね歩いて理想の師、麻生路郎先生の門下に入る。路郎先生との縁は昭和初期に開催されていた青森県と北海道の海峡親善川柳大会の席上でのことであった。

選者として出席された路郎先生から、甲吉さんは憧れの句であった

その日暮しも軒に雀がこぼるよ

と揮毫された短冊を賞としていただかれた。

甲吉さんは今も大事に大事に、その短冊を保存している。

川柳塔初代主幹の中島生々庵先生も県大会の選者として来県された。勿論、接待役は甲吉さんであるが、生粋の津軽人である甲吉さんの言うことがまるで通じない。度々来県されている薫風様の通訳で話をされたことだろう。その時、先生は

日本語が時々まじる津軽弁

と詠われたが、薫風様の通訳もいかげんなものであったと推察している（御免なさい）。

甲吉さんは最愛の奥様に先立たれ、法要のため、昭和五十五年に永平寺・延暦寺へと参詣し、本社の皆様の歓迎を受けている。その時の生々庵先生は、巻頭で甲吉さんに「大悲無倦」の文を掲げられ、

つぶやきつぶやき甲吉の涙津軽弁と温情あふれる句を残された。

今回の句集に掲載されていないと思うが、生々庵先生は甲吉さんの毎月の投句を見て、悲しみ、案じていらつしやうた。当時の句

蓑虫のように蒲団にくるまるか  
みな忘れさせて枕はありがたし  
まるめるのかおりを亡妻に買ってくる

誰よりも喜ぶ人は地下にいる

特に先生は、

土壇場へ来て釈迦の掌の中と知る

の句に達せられた甲吉氏の人間像に、私ははつきり光背を拝んだ気がした——と書かれている。

二代目主幹の栗先生は、有難くも巻頭で甲吉句集を紹介して下さり、その中で「甲吉氏の句は誰もが真似の出来ない、ユニークな彼独特の風格とユーモアと広い視野で詠まれた珠玉の句」と書いて下さった。

私の好きな句をご紹介申し上げ、ぜひ読んでほしいと念願するのみである。

膝抱いて寝る悔しさを君知るや

みちのくのさいはてこで石拾う

トラバ蟹君とは握手出来んワイ

欠伸するたびに涙が出て佇し

ここにもぶらぶら年金渡世人

# 柳界展覧

★稲畑汀子賛句・直原玉青俳画五十選展が10月12日から18日まで大阪・三越ギャラリーで開催された。

★全日本川柳協会は全日本

★第4回島根川柳まつりが9月4日、93名が参加して出雲市民会館で開かれた。

成績順位は、①林荒介②

松本文子③竹治かし④金

築雨学⑤八木千代の各氏で

次の同人6氏が各課題で天

位句に輝いた。

この海の広さにかける老いの夢 富田 蘭水

散歩道昨日の謎はまだ解けぬ 久谷まこと

続柄 川の匂を覚えてい

る 原 章峰

隣からきた朝顔に起こさ

れる 森田 熊生

仏様にはいつも本音で立

ち向かう 林 荒介

制服に自分の顔が合って

くる 竹治かし

される。当日は神社本殿で建碑奉告祭を行った後、出席者が碑前で献水し、建立を祝って直会が開かれることとなっている。

★第13回鳥取県没句川柳供

養大会は12月11日午前10時

から鳥取共済・五階大ホー

ル(JR鳥取駅下車)で行

われる。参加費1500円

(軽食・作品集)、精進落

しの宴2000円、兼題と

選者次のとおり。敗者復活

吟土橋螢▽美談山本玲

子▽出番岩本十六夜▽お

つと失礼寺谷あづま▽年

末岩田輪多朗▽ビクビク

永井三津子▽絆福田恒

子▽ゼロ桂はな子▽逃げ

足倉益光子。欠席投句は

11月末までに千円を添え

鳥取市東大路64両川洋々へ

★白百合川柳社主催・第29

回岡山県川柳大会は平成7

年1月22日午前9時から邑

久町立中央公民館で開く。

兼題と選者は、洗う白井ミツ子▽噂西口いわゑ▽合掌貞岡信太郎▽幼稚井床芦蘭▽魂土居哲秋▽住所野田素身郎▽席題・特別席題各1題。会費1500円。投句は500円を添え、1月20日までに岡山県邑久郡邑久町山手1116・嘉数幸栄へ。

▽出版△

■『川柳技法入門』山口麦

彦著(飯塚書店刊・B6判

236頁・価1800円)

①添削②推敲③技法④鑑賞

の4章から成り、925句

を引例して川柳を作る方法

と技法を詳説。

■句集『甲吉川柳』工藤甲

吉著(川柳塔社刊・B6判

240頁・上製本・価3000円)10月23日刊。

▽同人消息△

■池永正雄氏(和歌山市)

は去る5月22日に開かれた

NHK学園川柳九州大会で

次の句が全日本川柳協会会長賞に選ばれた。夫婦岩少し離れたたたずまい

■桜井千秀さん(和歌山市)

は第1回さんま川柳全国誌

上大会に応募、秀逸6席に

入賞、福井桂香さん(和歌

山市)も佳作4位に入選。

▽芳志△

■石倉美佐子さん(同人・

出雲市)から句集『花筏』

発刊を記念して金一封を拝

受しました。

▽川柳塔基金△

■江口有一朗・島田昭治の

2氏から提出頂きました。

▼訂正▲

■10月号P2(もくじ)

川柳の群像「伊東静夢」↓

「浜夢助」の誤りでした。

▽おことり△

■9月・10月号小出智子

さんのほとんど同一の句が

手違いにより自選集に掲載

されました。

## 富田林市民文化祭川柳大会

と き 11月6日(日) 午後零時半開場

ところ 富田林中央公民館 2階ホール  
(近鉄富田林駅から徒歩3分)

会 費 1000円(作品集・粗品呈)

お 話 北山泰史先生

宿 題 「約 束」 松原 寿子選

「喜 劇」 土田 欣之選

「踏 切」 片岡 湖風選

「地 酒」 河内 天笑選

「味 方」 中田 たつお選

「ある日」 池 森子選

「久しい」 西尾 栞選

◎各題2句・午後1時半締切

懇親宴 3000円(希望者のみ当日受付)

主 催 富田林市・富田林市教育委員会

後 援 富田林市民川柳会(富柳会)

## 寝屋川市民川柳大会

と き 11月3日(木) 祝日 正午開場

ところ 寝屋川市立総合センター 4F  
(京阪寝屋川市駅から京阪バス・  
総合センター前下車すぐ)

会 費 1000円(入選作品集・記念品)

兼題と選者(各題2句)

「愛」 江口 度選

「生」 河内 天笑選

「住」 小出 智子選

「真」 森中 恵美子選

「善」 磯野 いさむ選

「美」 橘高 薫風選

◎席題なし(出句締切午後1時)

投 句 80円切手5枚同封・事務局へ  
〔事務局〕〒572 寝屋川市春日町9-9

川柳ねやがわ

## 豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝日) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館 1F集会室  
(阪急宝塚線曽根駅東へ200m)

会 費 1000円(記念品・発表誌呈)

おはなし 川柳文学社会長 永田 帆船氏

席 題 (当日発表) 友田 茶の子選

宿 題 「風」 住田 英比古選

「母」 田中 新一選

「指」 竹森 雀舎選

「本」 田頭 良子選

「形」 田中 正坊選

「欲」 波部 白洋選

「顔」 松本 初太郎選

締 切 午後1時(各題2句)

豊中市長賞ほか 各題に賞進呈

主 催 豊中川柳会

後 援 豊中市立中央公民館

連絡先 石川 勝 〒560 豊中市赤阪1-6-9

☎06(854)1990

## 八尾市民文化祭川柳大会

と き 11月13日(日) 正午開場

ところ 八尾文化会館 4F 第1会議室  
(近鉄八尾駅下車西武デパート東隣)

会 費 2,000円(作品集・鉢植花・軽食)

宿 題 「息」 中井 みきお選

「壁」 小松原 爽介選

「闇」 藤本 静港子選

「灯」 大 路 美幸選

「器」 片岡 つとむ選

「顔」 中尾 藻介選

「星」 西尾 栞選

締 切 午後1時(各題2句)

懇親宴 3,000円(希望者のみ当日受付)

主 催 八尾市・八尾市教育委員会

八尾市文化祭実行委員会

後 援 八尾市民川柳会

川柳クラブ「わたの花」

## 11 月 各 地 句 会 案 内

|                       | 日 時 と 題                                | 会 場 と 投 句 先                                               |
|-----------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------------------------|
| 川 柳<br>ねやがわ           | 3 日(木・祝)正午から<br><b>寝屋川市民川柳大会</b>       | 寝屋川市立総合センター 本文 P108 参照<br>〒572 寝屋川市春日町 9-9 高田博泉           |
| 尼 崎<br>いくしま           | 4 日(金)午後 1 時から<br>霧・うつむく・雑詠(A・B)       | サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩 3 分<br>〒661 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代        |
| 堺川柳会                  | 5 日(土)午後 1 時から<br>むなしい・バラバラ・飲む・宇宙      | 堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅役所西入る<br>〒593 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑         |
| 富 柳 会                 | 6 日(日)午後零時半から<br><b>市民文化祭川柳大会</b>      | 富田林中央公民館 本文 P108 参照<br>〒584 富田林市南大伴町 4-1 池 森子             |
| ほ たる<br>川 柳<br>同 好 会  | 8 日(火)午後 1 時から<br>働く・服・ハンドル            | 豊中市立螢池公民館 阪急螢池駅西へ 150 米<br>〒560 豊中市螢池中町 3-10-28 井上直次      |
| 川 柳 塔<br>ま つ え        | 12 日(土)午後 1 時半から<br>飾る・気前・近道           | 松江市雑賀町雑賀公民館<br>〒690 松江市雑賀町 1686 恒松町紅                      |
| 八尾市民<br>川 柳 会         | 13 日(日) 正 午 か ら<br><b>市民文化祭川柳大会</b>    | 八尾文化会館 本文 P108 参照<br>〒581 八尾市上之島北 1-15 宮崎シマ子              |
| 川 柳 塔<br>わかやま         | 13 日(日)午後 1 時から<br>横やり・預金・予想           | 近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前<br>〒641 和歌山市紀三井寺 111-2 牛尾緑良        |
| 西宮北口<br>川 柳 会         | 14 日(月)午後 1 時から<br>仮名(かな)・盛る・どンドン・自由吟  | 西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩 5 分<br>〒663 西宮市高木東町 9-4 西口いわる        |
| 高槻川柳<br>サークル<br>卯 の 花 | 17 日(木) 正 午 か ら<br>視野・巢・寒い・自由吟         | 高槻現代劇場 306 号室 阪急高槻駅徒歩 5 分<br>〒569 高槻市宮田町 3-8-8 川島颯云児      |
| 南 大 阪<br>川 柳 会        | 18 日(金)午後 6 時から<br>疑う・苦しい・随分・積もる       | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩 3 分<br>〒544 大阪市生野区生野西 1-5-2 金井文秋      |
| 京 都<br>塔 の 会          | 20 日(日)午前 10 時半集合<br>煙・掃く・融通           | 秋の吟行 本文 P 43 参照<br>〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル 都倉求芽               |
| もくせい<br>川 柳 会         | 21 日(月)午後 1 時から<br>手・励ます・全く・自由吟        | 豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩 5 分<br>〒561 豊中市島江町 1 丁目 3 番 5-801 田中正坊 |
| 東大阪市<br>川 柳<br>同 好 会  | 26 日(土)午後 6 時から<br>はっきり・払う・美しい・本       | 東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣<br>〒578 東大阪市稲葉 3 丁目 3-21 片岡湖風  |
| はびきの<br>市<br>川 柳 会    | 27 日(日)午後 1 時から<br>謎(かすがい)・枯れる・ジャンプ・希望 | 羽曳野市立陵南の森公民館<br>〒583 羽曳野市高鷲 8-31-11 塩満 敏                  |
| 岸 和 田<br>川 柳 会        | 27 日(日)午後 1 時半から<br>煮る・濡衣・熱演・暖簾        | 市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩 5 分<br>〒596 岸和田市上松町 610-85 芳地埋村     |

★日時・会場などが変更になる場合は、田中正坊(06-336-3395)へご連絡ください。

# 編集後記

★今夏、香港・マカオへ旅した。典型的な「安・近・短」のバック・ツアーである。三年後に中国へ返還されるまでに一度、香港を見におきたかったこと、自宅から近い大阪空港の国際線が廃止されることもあってこのツアーを選んだ。

★はじめから名所の観光は期待してはいなかったが、それにしても「俗悪」を絵に描いたような胡文虎花園と前壁だけが残るマカオの聖ポール天主堂だけとは何ともお粗末。一日の大部分は、船・バスによる移動とショッピングに振り回される有様だった。

★文字どおり「走馬看花」のツアーだけに、難民問題ははじめさまさまに報道されている香港のなまなましい

実態に触れることはできなかったが、ロンドンと同じ二階建てのバスや五千人が駐屯するイギリス軍のキャンプ、国境を隔ててひるがえる五星紅旗に、やはり英領という実感が湧いた。

★大阪もここ数年來、キタを中心に高層ビルが軒を並べるようになったが、中環地区を中心に林立する摩天楼には度肝を抜かれた。もちろん古いビルもあるが、超近代建築のオンパレードで、正に人工の空間だ。ただ私には、最終日に訪れたペンシユラ・ホテルのビクトリア王朝時代の風格を持ったたたずまいが強く印象に残った。

★今回の同人総会で川柳塔社の主幹以下の顔触れがかわった。新役員は本文で紹介しているが、編集部も心を新たにしていよいよき柳誌づくりを努めた。(正)

## ひとこと

### 作品批判の二石

作品をほめることはたやすい。しかし、秀句や佳句といわれる作品を批判することはむずかしい。何も批判がむずかしいのではなくそれによって生ずる波紋がわずらわしいのである。それも口頭ではなく、公開される文章となると、ためらわざるを得ないが、およそ批判のないところに、文芸としての進歩はないと思う。

一年に数名しか授賞されない文部大臣奨励賞をはじめ各柳社の年度賞を見ても、率直に言って佳句ぞろいとは言い難い。現実の世相には程遠い時代錯誤の社会諷刺であつたり、手垢にまみれた常套語で化粧した作品が堂々と秀句としてまかり通っている。作者に含むところがあつて貶すのは論外だが、作品批判がもっと活発に行われていいのではないか。 辛口 太郎

○ひとに夫のことを話すと、き、ほとんどの女性が主人という。しかし、どうもずれる感がぬぐい切れない。

○本来、主人は自分が仕える人。アラジンが魔法のランプをこすると、「ご主人様何かご用ですか」とランプの精があらわれる。武士が仕える相手も主人である。

女性社会進出が多い昨今、妻が夫に仕える意識は稀薄になってきている。それどころか、若い夫婦には「夫が妻に仕えている」例が多いと洩れ承る。

○では「旦那。これは、もつと仕える意味が強い上、昔「右や左の旦那様」なんて言っている人を街で見かけたつけ。宿六では蔑称にも慣れないせいか日常会話には固い感じがする。

○秋の夜長、こんなふうな言葉の端々にいちゃもんをつけたくなるのは、苦吟が続くせいな。(ふ)

# 川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」 発表（1月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確にお書きください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

1月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (8句) 橘高 薫風選  
水煙抄 (8句) 高杉 鬼遊選  
銀河系 (3句) 小出 智子選  
茴香の花 (3句) 西出 楓楽選  
課題吟 (3句) 「脱松」 海老池 洋選  
「テレビ」 遠山 可佳選  
初歩教室「鏡」 (3句) 吉岡美房担当

川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄は誌友 (誌代半年分前納者) 茴香の花欄は女性に限ります。

2月号 課題吟 「鈍い」「テープ」「てれる」  
初歩教室「喜ぶ」

## 本社11月句会

と き 11月2日 (日) 午後5時半  
と ころ メンズファッションセンター3F  
中央区内本町1-1 電話06・941・1918  
地下鉄谷町4丁目下車 (3番出口) 交差点南西角  
おはなし 板尾 岳人  
「マニア」 奥田 みつ子  
「しっこい」 宮崎 シマ子  
「掃く」 田中 正坊  
「世紀末」 高杉 鬼遊選  
「畳」 西尾 栞選  
兼 題  
席 題  
会 費 1 題 当日発表 各題2句以内  
投 句 500円  
句箋 (19cm×4cm) 1葉に1句を書き、  
投句料400円 (80円切手5枚) 同封のこと

## 本社12月句会 7日 (水)

兼 題 「ステージ」「めど」「すっきり」  
「まばたく」「構える」

## 夜市川柳募集

第6回「花」 天根 夢草選  
ハガキに3句 11月末締切  
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺 川 柳 会

12月の常任理事会は12月1日 (木)

## NHK川柳作品募集

課 題 「答」 橘高 薫風選  
ハガキに3句 11月10日締切  
投句先  
〒540-01 NHK大阪放送局  
「文芸部」川柳係  
発 表 11月26日 (土) 午前11時5分から  
ラジオ第1放送

## 西日本文字放送作品募集

課 題 「師走風景」 橘高 薫風選  
ハガキに3句 11月15日締切  
投句先  
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20  
大手前ウサミビル3階  
西日本文字放送 川柳係

〒545

定 価 六 百 円 (送料84円)  
半 年 分 四 千 円 (送料共)  
一 年 分 七 千 九 百 円 (同)  
平成六年十一月一日発行  
編集兼 西 尾 心 巖  
印刷所 藤 原 童 心 社  
発行所 ウエムラ第2ビル202号室  
大坂市阿倍野区三好町一〇一六  
振替 〇〇九八〇一五 一三三六八番  
電話 (〇六) 一六九一四番  
川 柳 塔 社

## 賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで  
住居の事なら何でも相談できる店

# 豊津住宅株式会社

本社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊津店

関大正門前店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21

TEL (06) 330-0006(代)

TEL (06) 388-6166(代)

FAX (06) 388-6102

FAX (06) 388-6886

十七文字のドラマを本に……

## あなただけの素敵な作品集を 作りませんか？

日頃書き綴って来たあなたの作品を本にしませんか。

出版樹々では低価格でご希望に沿った本を心をこめてつくります。

お気軽にお申し付けください。

自費出版のことなら

お問い合わせは…

**(0726)77-5171**

出版 

大阪府高槻市柱本3-12-3(〒569)